平安京左京八条二坊九町

２０２０

有限会社 京都平安文化財

例　　言

1．本書は、京都市下京区油小路通下魚ノ棚下ル油小路町 284、286、317-2 におけるホテル建設に伴う発掘調査報告書である。[文化財保護課受付番号　17H557]

2．本調査は、サムティ株式会社の委託により、有限会社 京都平安文化財が実施した。

3．発掘調査面積は、280㎡である。

4．発掘調査は、平成 30 年 (2018) 6 月 26 日から 9 月 27 日まで実施した。

整理・報告書作成は、平成 30 年 (2018) 10 月から令和元年 (2019) 12 月まで実施した。

5．発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の体制で行った。

指 導 機 関　　京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

調査検証委員　京都外国語大学教授 南　博史

同志社女子大学教授 山田 邦和

調 査 主 体　　有限会社 京都平安文化財（取締役・栗田尚典）

調 査 主 任　　植山 茂

調査補助員　　小林 雅幸

作　業　員　　有限会社 京都平安文化財

測量・図化　　有限会社 京都平安文化財　　浅川 永子、小林 雅幸、田中 侑

遺 物 実 測　　有限会社 京都平安文化財　　川端 玲子、木建 梓

なお、調査中は随時小森俊寛（有限会社 京都平安文化財顧問）の助力を得た。

6．鋳造関係遺物と八稜鏡について、久保智康氏の教示を得た。

7．本書の執筆は、第 4 章 1. と第 5 章 1. の項は小森による。

その他は植山が担当した。

8．編集は植山が担当した。

凡　　例

1．調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点は T.P. 値（東京湾平均海面値）を使用した。

2．使用した地図は京都市都市計画局発行の 1：2500「島原」「五条大橋」「梅小路」「京都駅」を参考にし編集した。

3．調査地付近の平安京条坊の座標データは（公財）京都市埋蔵文化財研究所から提供を受けた。

4．色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。

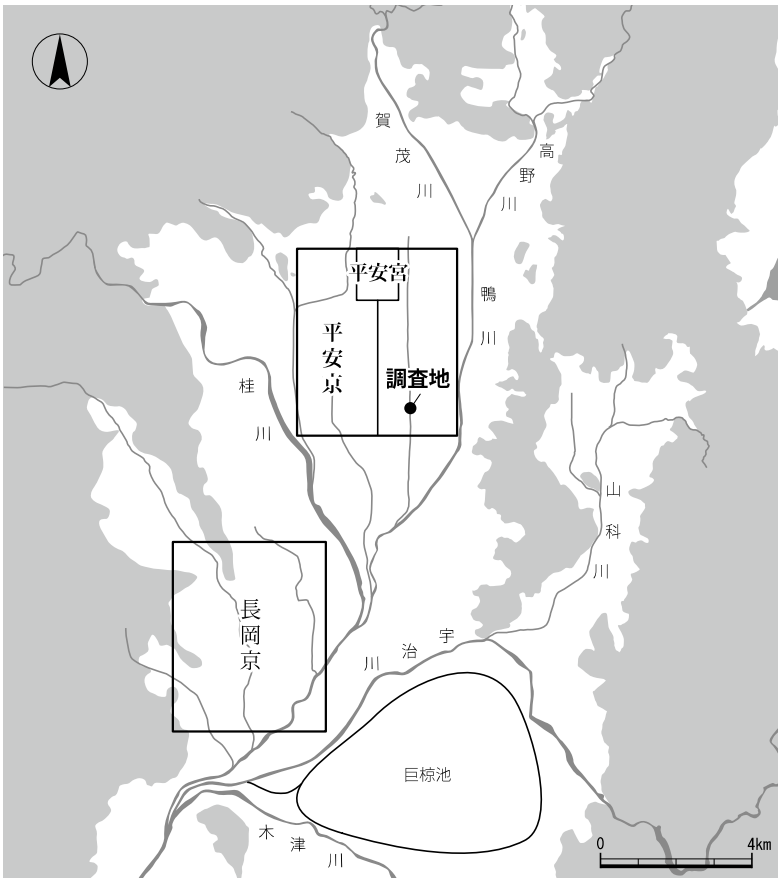
5．検出遺構には、概ね遺構と認定した順に「S」字を付けた番号を与え、遺構の種類を適時その先につけて、「井戸 S＊＊」のように表した。

6．土器類の型式・編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺構から出土する土器の編年的研究」（『研究紀要』第 3 号所収、京都市埋蔵文化財研究所、1996 年 11 月 29 日）、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（京都編集工房、2005 年 11 月 15 日）による。

7．遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 40・150 分の 1 とした。

8．遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。

9．図版 13 ～ 28 の遺物に付けた番号は、挿図第 19 ～ 62 図の遺物の番号に同じとした。ただし、挿図に掲載していない遺物にはアルファベットを付した。



目　次

例言　・　凡例

第 1 章　調査の経緯と経過 …… 1
1. 調査の経過 …… 1
2. 調査日誌抄 …… 4
3. 基本層序 …… 6

第 2 章　調査地の歴史的変遷 …… 11

第 3 章　検出遺構 …… 16
1. 平安・鎌倉時代の遺構 …… 16
2. 室町時代の遺構 …… 18
3. 江戸時代の遺構 …… 22

第 4 章　出土遺物 …… 23
1. 土器・陶磁器類 …… 23
2. 瓦磚類 …… 52
3. 鋳造関係遺物 …… 58
4. その他の遺物 …… 61

第 5 章　調査の成果 …… 66
1. 土器・陶磁器類について …… 66
2. その他の遺物について …… 69

参考文献 …… 70

報告書抄録

図版

図版目次

図版 1　調査地の環境
　上：調査前（東より）　下：調査地から東を望む
図版 2　遺構全景 1
　上：第 1 面（西より）　下：第 1 面（東より）
図版 3　遺構全景 2
　上：第 2・3 面（東より）　下：第 2・3 面（西より）
図版 4　検出遺構 1
　上：井戸 S153、上層遺物出土状態（西より）　下：井戸 S153、内部（南より）
図版 5　検出遺構 2
　上：井戸 S150（北より）　下：井戸 S151（北より）
図版 6　検出遺構 3
　上：井戸 S112（西より）　下：井戸 S138（北より）
図版 7　検出遺構 4
　上：B・C-4・5 区井戸群（南より）　下：井戸 S65（北より）
図版 8　検出遺構 5
　上：墓 S71、遺物出土状況（北より）　下：墓 S71、完掘状況（北より）
図版 9　検出遺構 6
　上：墓 S144、遺物出土状況（東より）　下：墓 S144、遺物出土状況（北より）
図版 10　検出遺構 7
　上：墓 S71 と S101（南より）　下：墓 S101（南より）
図版 11　検出遺構 8
　上：暗渠溝 S13（西より）　下：暗渠溝 S13（南より）
図版 12　検出遺構 9
　上：瓦溜 S25（北東より）　下：落込み遺構 S73 遺物出土状況（東より）
図版 13　出土遺物 1　（土器・陶磁器類 1）　平安時代以前
図版 14　出土遺物 2　（土器・陶磁器類 2）　平安時代・落込み S104
図版 15　出土遺物 3　（土器・陶磁器類 3）　井戸 S153
図版 16　出土遺物 4　（土器・陶磁器類 4）　土抗 S124・土抗 S147・土抗 S155・井戸 S139・井戸 S151
図版 17　出土遺物 5　（土器・陶磁器類 5）　井戸 S151
図版 18　出土遺物 6　（土器・陶磁器類 6）　墓 S101
図版 19　出土遺物 7　（土器・陶磁器類 7）　墓 S71
図版 20　出土遺物 8　（土器・陶磁器類 8）　墓 S71・墓 S144
図版 21　出土遺物 9　（土器・陶磁器類 9）　墓 S81・暗渠溝 S13
図版 22　出土遺物 10（土器・陶磁器類 10）　井戸 S35・井戸 S40・落込み S73
図版 23　出土遺物 11（土器・陶磁器類 11）　落込み S73
図版 24　出土遺物 12（鋳造関係遺物 1）　上：刀装具鋳型　下：鏡鋳型
図版 25　出土遺物 13（鋳造関係遺物 2）　上：ルツボ・フイゴ羽口　下：トリベ
図版 26　出土遺物 14（銅製品 1）　瑞花双鳳八稜鏡
図版 27　出土遺物 15（銅製品 2）　瑞花双鳳八稜鏡細部・懸仏・笠鞐・小柄
図版 28　出土遺物 16（石製品）　砥石石材・石帯巡方・石硯・火打ち石

挿図目次

第 1 図　地区割図 …… 1
第 2 図　調査地の位置と平安京条坊 …… 2
第 3 図　調査区南壁土層図 …… 7
第 4 図　検出遺構図 1（江戸時代以降） …… 8
第 5 図　検出遺構図 2（室町時代） …… 9
第 6 図　検出遺構図 3（平安～鎌倉時代） …… 10
第 7 図　平安時代の調査地周辺 …… 13
第 8 図　現在の調査地周辺 …… 15
第 9 図　井戸 S153 遺構図 …… 17
第 10 図　井戸 S151 遺構図 …… 17
第 11 図　井戸 S112 遺構図 …… 18
第 12 図　井戸 S138 遺構図 …… 19
第 13 図　井戸 S65・石組遺構 S128・井戸 S139 遺構図 …… 19
第 14 図　墓 S71 遺構図 …… 20
第 15 図　墓 S144 遺構図 …… 20
第 16 図　墓 S101 遺構図 …… 20
第 17 図　墓 S81 遺構図 …… 20
第 18 図　暗渠溝 S13 遺構図 …… 21
第 19 図　土器・陶磁器類実測図 1（平安時代以前 1） …… 23
第 20 図　土器・陶磁器類実測図 2（平安時代以前 2） …… 24
第 21 図　土器・陶磁器類実測図 3（平安時代） …… 24
第 22 図　土器・陶磁器類実測図 4（落込み遺構 S104 出土） …… 25
第 23 図　土器・陶磁器類実測図 5（土坑 S124 出土） …… 26
第 24 図　土器・陶磁器類実測図 6（土坑 S147 出土） …… 26
第 25 図　土器・陶磁器類実測図 7（土坑 S155 出土） …… 26
第 26 図　土器・陶磁器類実測図 8（井戸 S75 出土） …… 26
第 27 図　土器・陶磁器類実測図 9（井戸 S134 出土） …… 27
第 28 図　土器・陶磁器類実測図 10（井戸 S153 出土） …… 29
第 29 図　土器・陶磁器類実測図 11（井戸 S139 出土） …… 30
第 30 図　土器・陶磁器類実測図 12（土抗 S146 出土） …… 31
第 31 図　土器・陶磁器類実測図 13（井戸 S151 出土） …… 33
第 32 図　土器・陶磁器類実測図 14（井戸 S138 出土） …… 34
第 33 図　土器・陶磁器類実測図 15（墓 S101 出土） …… 36
第 34 図　土器・陶磁器類実測図 16（土器溜 S103 出土） …… 37
第 35 図　土器・陶磁器類実測図 17（墓 S81 出土） …… 38
第 36 図　土器・陶磁器類実測図 18（墓 S71 出土） …… 39
第 37 図　土器・陶磁器類実測図 19（墓 S144 出土） …… 41
第 38 図　土器・陶磁器類実測図 20（包含層出土） …… 42
第 39 図　土器・陶磁器類実測図 21（井戸 S65 出土） …… 43
第 40 図　土器・陶磁器類写真 22（井戸 S65 出土） …… 44
第 41 図　土器・陶磁器類写真 23（石組遺構 S128 出土） …… 44
第 42 図　土器・陶磁器類実測図 24（暗渠 S13 出土） …… 45
第 43 図　土器・陶磁器類実測図 25（井戸 S35 出土） …… 46
第 44 図　土器・陶磁器類実測図 26（井戸 S40 出土） …… 48
第 45 図　土器・陶磁器類実測図 27（落込み S73 出土） …… 50
第 46 図　瓦磚類実測図 1（平安時代） …… 52
第 47 図　瓦磚類実測図 2（平安時代） …… 53
第 48 図　瓦磚類実測図 3（鎌倉時代） …… 54
第 49 図　瓦磚類実測図 4（桃山・江戸時代） …… 55
第 50 図　瓦磚類拓影 5（敷磚） …… 56

第 51 図　瓦磚類拓影 6（有孔磚） ---------- 57
第 52 図　鋳造関係遺物実測図 1
（刀装具鋳型） ---------- 58
第 53 図　鋳造関係遺物実測図 2
（鏡鋳型 1） ---------- 59
第 54 図　鋳造関係遺物実測図 3
（鏡鋳型 2） ---------- 60
第 55 図　鋳造関係遺物実測図 4
（トリベ） ---------- 61
第 56 図　銭貨拓影 ---------- 61
第 57 図　瑞花双鳳八稜鏡（出土時） ---------- 62
第 58 図　瑞花双鳳八稜鏡実測図 ---------- 63
第 59 図　銅製品実測図 ---------- 63
第 60 図　硯石石材実測図 ---------- 64
第 61 図　石帯実測図 ---------- 64
第 62 図　石硯実測図 ---------- 65

表 目 次

第 1 表　銭貨一覧表 ---------- 62

第 1 章　調査の経緯と経過

今回の調査地は平安京跡の左京八条二坊九町に当たり、この地は平安京東市の南側と東側に張り出す外町に隣接する区画である。この度、この遺跡地内にホテルの建設が計画され、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査を、京都市の文化財保護課の指導と事業主の協力を得て実施した。調査地は、堀川通と油小路通の間、七条通の南側で、JR 京都駅の北西約 500 m、また西本願寺・興正寺の南東約 200 mの地点である。

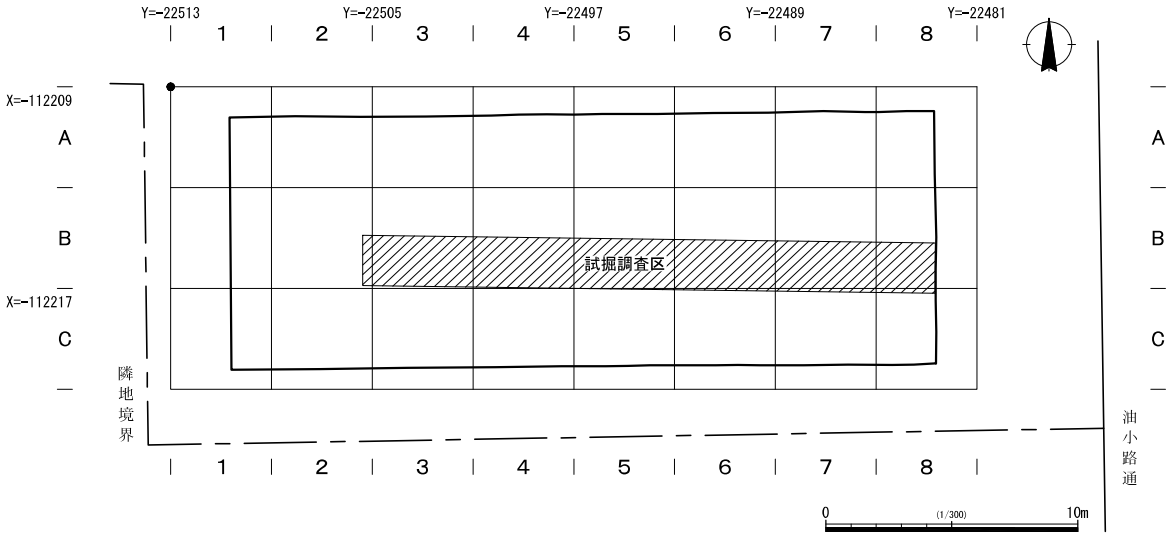
調査前は、重層の駐車場が営まれていた場所で、この北側の土地にはビルが建っていたが、両方の建築物を解体してホテルが建設される計画であった。ビルが建っていた箇所は昭和 59 年（1984）に京都市埋蔵文化財研究所により発掘調査が行われているため、今回の調査は駐車場であった部分が対象になっている。

今回の調査地は、平成 30 年（2018）に京都市の文化財保護課による試掘調査が実施され、鎌倉～室町時代、および江戸時代の遺物・遺構などが検出された。今回の発掘調査はこの結果を受けて、当該地の土地利用の歴史的変遷などを明らかにする目的で実施した。

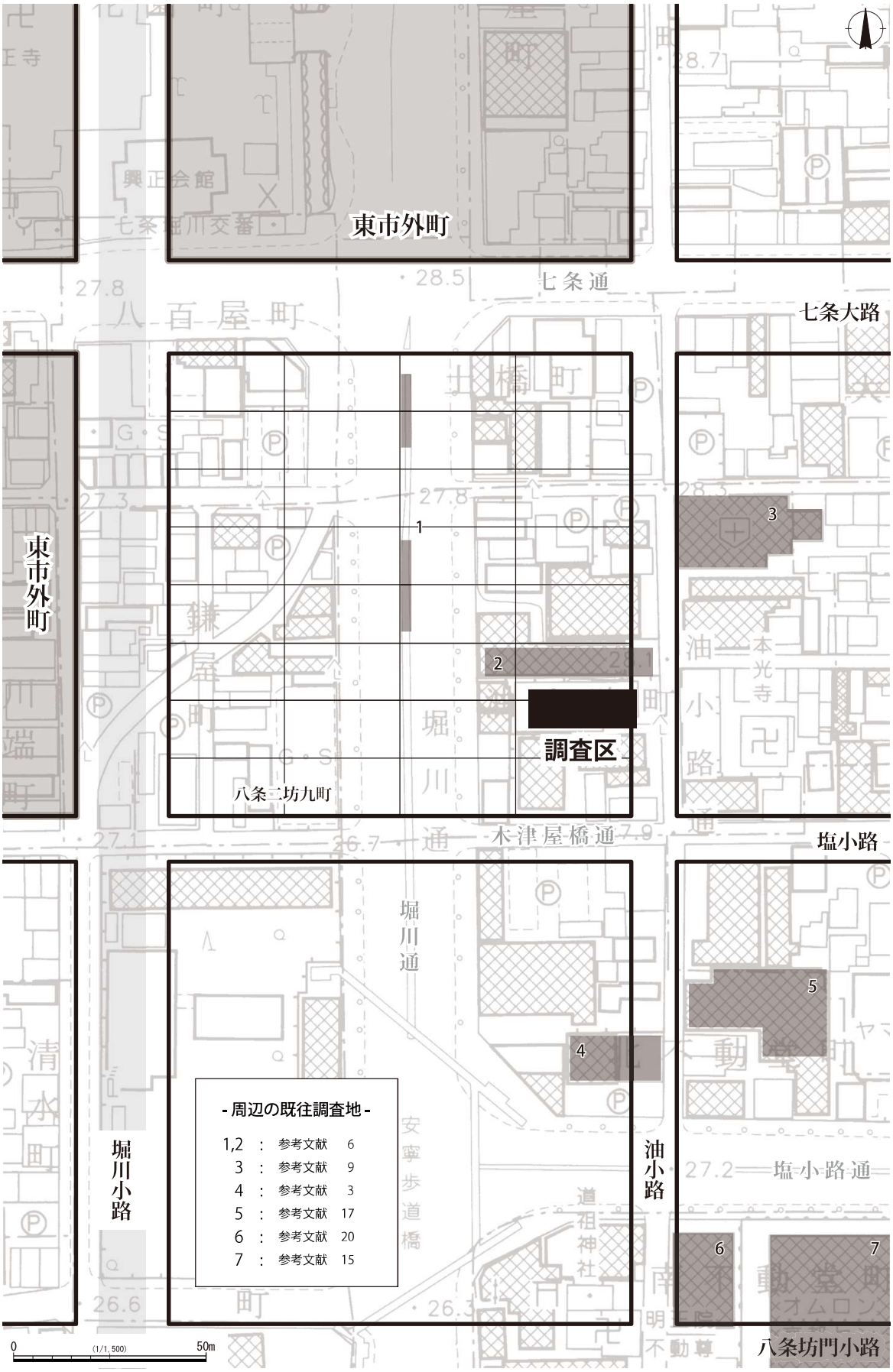
1.　調査の経過

発掘区は、試掘調査の結果を踏まえて遺構が存在するとみられる箇所に設定した。発掘区の面積は、南北 10m、東西 28m の 280㎡である（第 1 図）。

また、遺物の取り上げや遺構の位置認定などのため、平面直角座標系Ⅵの方位・数値に基づく 4m 方眼網を設定した。便宜上、北西角を起点（x= － 112209.0m、y= － 22513.0m）にして 4m ごとに北から南に A ～ C 区、西から東に 1 ～ 8 区とし、各方眼は A-1 区…、C-8 区の



第 1 図　地区割図



第２図　調査地の位置と平安京条坊

ように表した（第 1 図）。なお、調査区東端の 8 区がほぼ平安京の油小路と九町の境（築地位置）と想定され、A 区と B 区の境が九町の「西四行北六門」と「北七門」の境の位置にあたる。

調査は設定した調査区の東南から重機掘削を始めた。試掘調査の結果で、地表面（GL）から 1m 以上は現代の盛土や掘り込みが及んでいるとみられた。重機では、約 1m まで掘削した後は状況をみながら削平してゆき、全体で平均 GL － 1.3m まで下げた。この面で標高およそ 26.3m である。これより下層は人手の掘削とした。また駐車場上屋の柱基礎撤去坑 8 箇所（S1 ～ 8）が大きく掘り込まれていたため、これは重機で掘り上げた。なお、近現代では井戸（S9・10）と瓦溜（S11）、杭と板で土留めした土坑（S12）もあった。

重機掘削終了時点で、油小路通に近い東寄りの部分（5 ～ 8 区）は江戸時代の遺物包含層が広がり、これは江戸時代の整地層かとみられた。この面を第 1 面とする（第 4 図）。この面では東寄りの 6・7 区で江戸時代後期の井戸（S17・24・27・54）や土坑（S23・29）などが、西寄りの 2・3 区でも江戸時代後期の井戸（S28）や土坑（S26・33・36）、江戸時代前期の遺物を多く含む瓦溜（S31）、落ち込み（S73）などが検出された。また、中央部の B-4 区では焼瓦を廃棄した土坑（S22）がある。江戸時代の遺構は、油小路通に近い東寄りの部分で密度が高く、西半ではやや規模の大きな遺構が目立つように思われた。この面の西半では東半のような江戸時代の整地層は認められず、平安時代から室町時代の遺物を含む包含層が広がり、江戸時代以前の下層遺構の輪郭も見えていた。

江戸時代の遺構と東半部の厚さ 10㎝あまりの整地層を調査し掘削すると、東半部でも平安～室町時代の遺物を含む層が広がっていた。この面と、江戸時代の遺構を掘り上げた下層で検出した遺構では、井戸（S65）、石組井戸状遺構（S128）や墓と考えられる土器類を多く含む土坑（S71・81・101・144）、および南北方向の暗渠溝（S13）などがある。これを第 2 面とする（第 5 図）。この面を精査していく段階でさらに井戸（S75・95・112・138）と、東端部の 8 区で築地想定位置あたりに南北方向の柱穴列を検出した。柱穴列は築地位置を踏襲するものと考えられるが、規模は小さく、柵程度の施設になると思われた。この他、5 ～ 7 区では小規模な土坑が多数検出され、柱穴らしい遺構もあるが建物としてのまとまりは見出せなかった。1、2 区の境部で検出した暗渠溝（S13）は拳大前後の礫が大量に投入されていた。

東半部の平安～室町時代の遺物包含層は概ね二分でき、上部には室町時代までの遺物を含み、下部は鎌倉時代までの遺物を含む層であったが、明確に面を成すようには広がっていなかった。この包含層は東半部では薄く、その下層は砂礫が互層になる地山になっていたが、調査区中央部の 5 区あたりから地山面は西に下り気味で、その分包含層が厚くなっていた。地山面は東端部で標高 26.0m、西端部で 25.9m であった。なお包含層を下げていく段階で、鋳型など鋳造関係の遺物が目についたが、遺構として纏まるものではなかった。

およそ地山面まで掘削した段階で、鎌倉時代と考えられる井戸や土坑、南北方向の溝状遺構、東西方向の柱穴列などが検出された。この面を第 3 面とする（第 6 図）。井戸（S152・150・151・134・139・40）は 3 ～ 5 区に集中し、短期間の内に掘り替えがあったように重複する

箇所もあった。B-7 区から C-7 区にかけて検出した溝状遺構（S85）は、ごく浅く遺物もほとんど出土していない。B-3・4 区で検出した柱穴列は、柱穴（S160・162・154）が東西方向に並ぶが、いずれも浅いもので他に続く柱穴は認められなかった。柱穴かと思われる小土坑は東端部にもあるが（S108・109・132・117・121・87・96）、建物としてのまとまりは見出せなかった。なお、この面で検出した C-6 区の土坑（S124）と A-3 区の落ち込み遺構（S104）は、出土遺物からみて平安時代に属すると思われる。調査開始時点から緑釉製品など平安時代の遺物は採集していたが、確実な平安時代の遺構としては、この 2 件だけであった。

第 3 面の遺構の状況が判明した段階で調査地周辺の方々を対象に現地説明会を開催し、約 70 人の参観者があった。その後、最終面で検出した遺構精査の後、写真撮影と電子平板による最終的な記録をとり、重機によって埋め戻しを行い、機材の撤収も済ませて現場作業を終えた。

2. 調査日誌抄

平成 30 年（2018）6 月 26 日～ 9 月 27 日

6 月 26 日 (火)	現場調査開始。東南角から重機掘削開始。京都市確認。
6 月 27 日 (水)	重機掘削。京都市検査
6 月 28 日 (木)	重機掘削。掘削部分の壁面整形。
6 月 29 日 (金)	雨で作業中止。
7 月　2 日 (月)	重機で排土整理。壁面整形。
7 月　3 日 (火)	壁面整形。現代撹乱坑など整形。
7 月　4 日 (水) ～ 6 日 (金)	大雨で作業中止。
7 月　9 日 (月)	東寄りから第 1 面精査。
7 月 10 日 (火)	東～中央部の第 1 面精査。
7 月 11 日 (水)	4m 方眼を設定。京都市検査
7 月 12 日 (木)	第 1 面の現代土坑と江戸時代遺構掘り下げ。
7 月 13 日 (金)	遺構精査、清掃。遺構の状況を記録(電子平板)。
7 月 17 日 (火)	A・B-1・2 区精査。東～中央部を 1 段下げ。
7 月 18 日 (水)	東部～中央部を 1 段掘り下げ。
7 月 19 日 (木)	A・B-3 ～ 6 区、1 段掘り下げ。江戸時代の遺構掘りあげ。
7 月 20 日 (金) ～ 26 日 (木)	江戸時代の遺構掘りあげ。C-8 区 1 段掘り下げ。
7 月 27 日 (金)	江戸時代の遺構掘りあげ。台風接近予想のため現場養生。京都市巡回。
7 月 29 日 (日)	未明に台風 12 号、奈良を通過。
7 月 30 日 (月)	台風養生復旧。江戸時代の遺構掘削。写真撮影に向け壁面清掃。
7 月 31 日 (火)	江戸時代の遺構掘削。京都市検査。
8 月　1 日 (水)	土坑 S64、井戸 S65 掘り下げ。写真撮影のため東端から清掃。

調査区設定

重機掘削（6 月 28 日）

8月 2日(木)　全景写真撮影に向けて全面清掃。
8月 3日(金)　午前中、写真撮影。午後、遺構平面測量（電子平板)。
8月 6日(月)　南半部、第1面より10㎝掘り下げ。
8月 7日(火)　C-3～8区掘り下げ。
8月 8日(水)　C-3～8区包含層掘り下げ。京都市検査。
8月 9日(木)　2～8区まで包含層掘り下げ。
8月10日(金)　包含層掘削。C-7区で刀装具鋳型出土。
8月17日(金)　包含層掘削。
8月18日(土)　遺構掘削、精査。検証委員・南氏視察。
8月20日(月)　東半・西半部包含層掘削、遺構検出。
8月21日(火)　遺構掘削、精査。
8月22日(水)　A･B-6･7区、C-5区包含層掘り下げ。遺構精査。
8月23日(木)　包含層掘削、遺構検出。台風対策養生など。
8月24日(金)　包含層掘削、遺構検出、遺構精査。
8月25日(土)　遺構検出、遺構精査。
8月27日(月)　遺構検出、遺構精査。
8月28日(火)　暗渠S13精査。A～C-1・2区掘り下げ。遺構精査。検証委員・山田氏視察。
8月29日(水)　暗渠S13精査。A・B-5～7区遺構精査。
8月30日(木)　遺構精査。京都市検査。
8月31日(金)　西半部溝S14清掃､写真撮影。東半部遺構精査。
9月 1日(土)　東端部写真撮影。全面現状測量。
9月 3日(月)　遺構掘削、精査。溝S9・井戸S41撮影。台風対策養生。
9月 4日(火)　作業休止。(午後台風21号、兵庫県通過で暴風雨)
9月 5日(水)　台風の後始末。A～C-4～6区包含層掘り下げ。
9月 6日(木)　B-5・6区包含層掘り下げ。遺構精査。
9月 7日(金)　雨で外作業中止。
9月 8日(土)　雨で午前中は外作業中止。午後、B・C–4・5区の遺構精査。
9月10日(月)　雨で午前中は外作業中止。午後、S71精査。B–4・5区包含層掘り下げ。
9月11日(火)　遺構掘削、精査。
9月12日(水)　西半部清掃、写真撮影。京都市検査。
9月13日(木)～14日(金)　遺構掘削、精査。
9月15日(土)　東半部遺構掘削、精査。
9月17日(月)　遺構精査。南半東部平面測量。
9月18日(火)～21日(金)　遺構掘削、精査。遺構精査。
9月22日(土)　遺構掘削、精査。B-4区包含層で八稜鏡出土。
9月23日(日)　全景写真撮影。壁面撮影。遺構平面測量。B-4区、C-3区の遺構精査。
9月24日(月)　午前、近隣向け現地説明会（参加者65名)。調査区西寄りの遺構精査。
9月25日(火)　重機搬入、埋め戻し開始。井戸S153精査。
9月26日(水)　埋め戻し。
9月27日(木)　埋め戻し完了。機材など撤収。現場調査終了。

第1面整形（7月2日）

墓S71（8月21日）

遺構測量（9月1日）

第2・3面遺構精査（9月3日）

現地説明会（9 月 24 日）

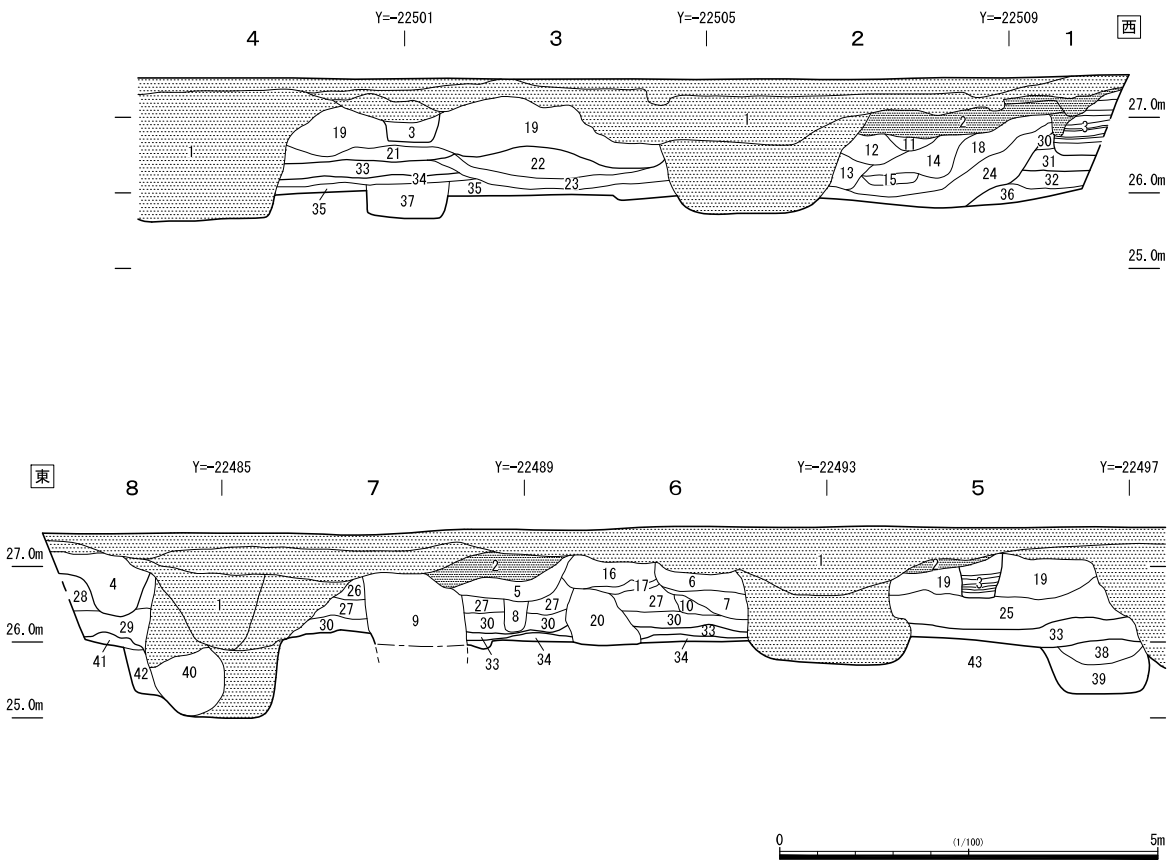
西半遺構精査（9 月 24 日）

3. 基本層序

今回の発掘調査の結果、調査区内では江戸時代から平安時代までの時期の遺構が検出できたが、各々の遺構は必ずしも面的に把握できたものではなかった。平安京左京域では、ほとんど切れ目なく何らかの人の活動があり、先行する遺構が削平あるいは後代の遺構によって壊されていることが多いが、当地でも同様である。また、調査地は駐車場として利用されていたが、重層であったためそのコンクリートの柱基礎が 5 ～ 7m 間隔に並び、その撤去作業で大きく掘り込まれている部分もあった。ただし、所々では各時期の整地層や遺物包含層の水平の広がりも認められた。

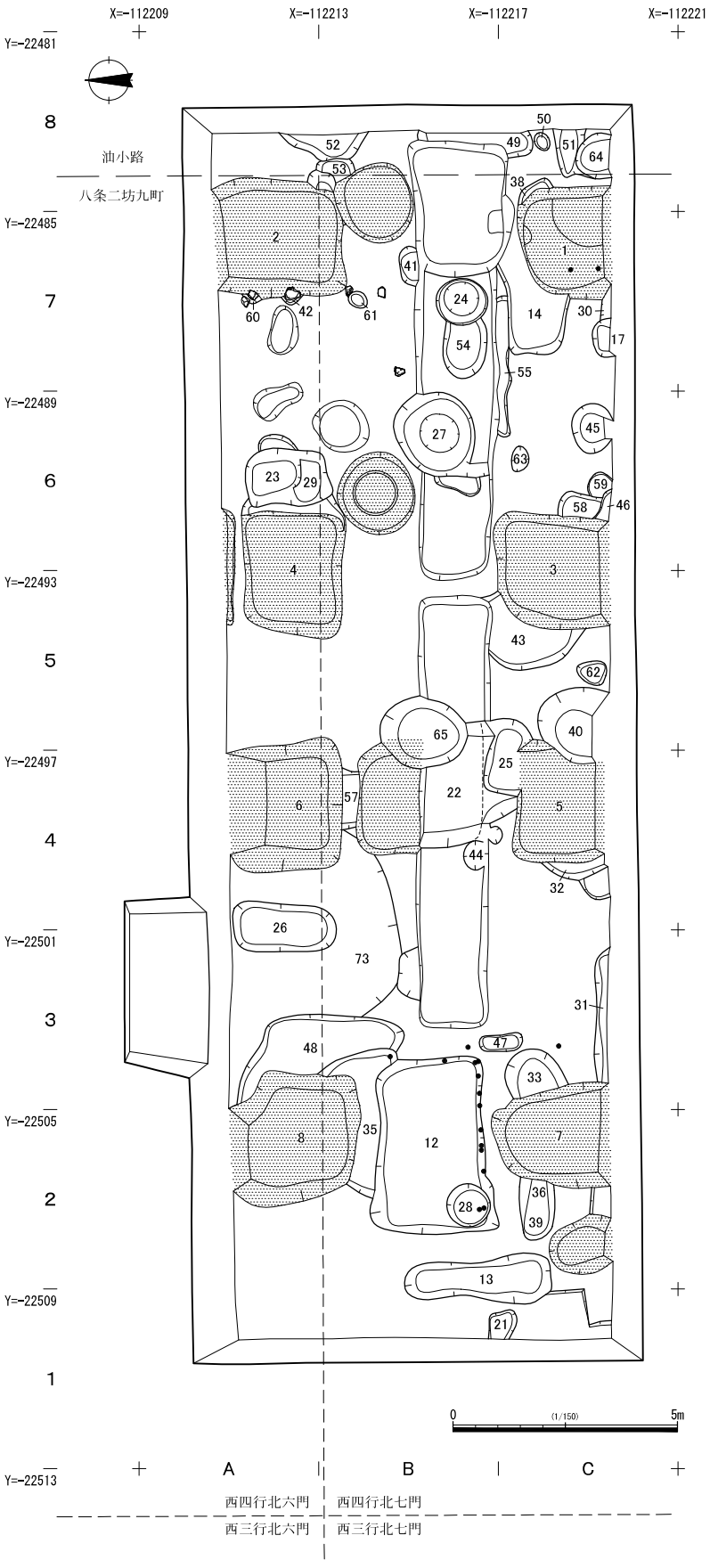
第 3 図は調査区南壁の土層図で、これにより調査区の層序の状況を見ていく。地表面から 20 ～ 50㎝ほどは調査前に更地にされる際の重機による整地であり（1）、柱基礎撤去の撹乱と同時になされている。その下層には部分的ながら、駐車場になる時点の整地と見られる層がある（2）。東半の 5 ～ 8 区あたりでは、この工事で破壊されたらしい江戸時代末～明治期頃の遺構（4・5）や瓦溜（6）などが見える。調査地東側の現在の油小路通の標高は 27.62m で、近代以降に 30 ～ 50㎝程度の堆積があることになる。

4 ～ 6 区では、26.4 m あたりに、断続的ながら整地面かと思われる部分があった。当初、この深さまでは重機掘削を行った。その下層（31）は平安～室町時代の遺物も少なくないが、江戸時代後期の遺物も含む層であった。3 ～ 4 区南半では、現代整地層の直下から厚さ 60㎝ほどの暗灰褐色砂質土層（19）があり、3 区ではその下層が「落込み遺構 S31」になっていた。S31 の埋土は下層が厚さ 15㎝ほどの黒褐色粘質土（23）で、その上部に江戸時代前半期の瓦を多く含む層（22）があった。3 ～ 4 区の北半では、暗灰褐色砂質土層（19）に相当する層は認められなかったが、「落込み遺構 S73」の埋土は黒褐色粘質土（23）に類似し、江戸時代前半期の遺物を含んでいた。

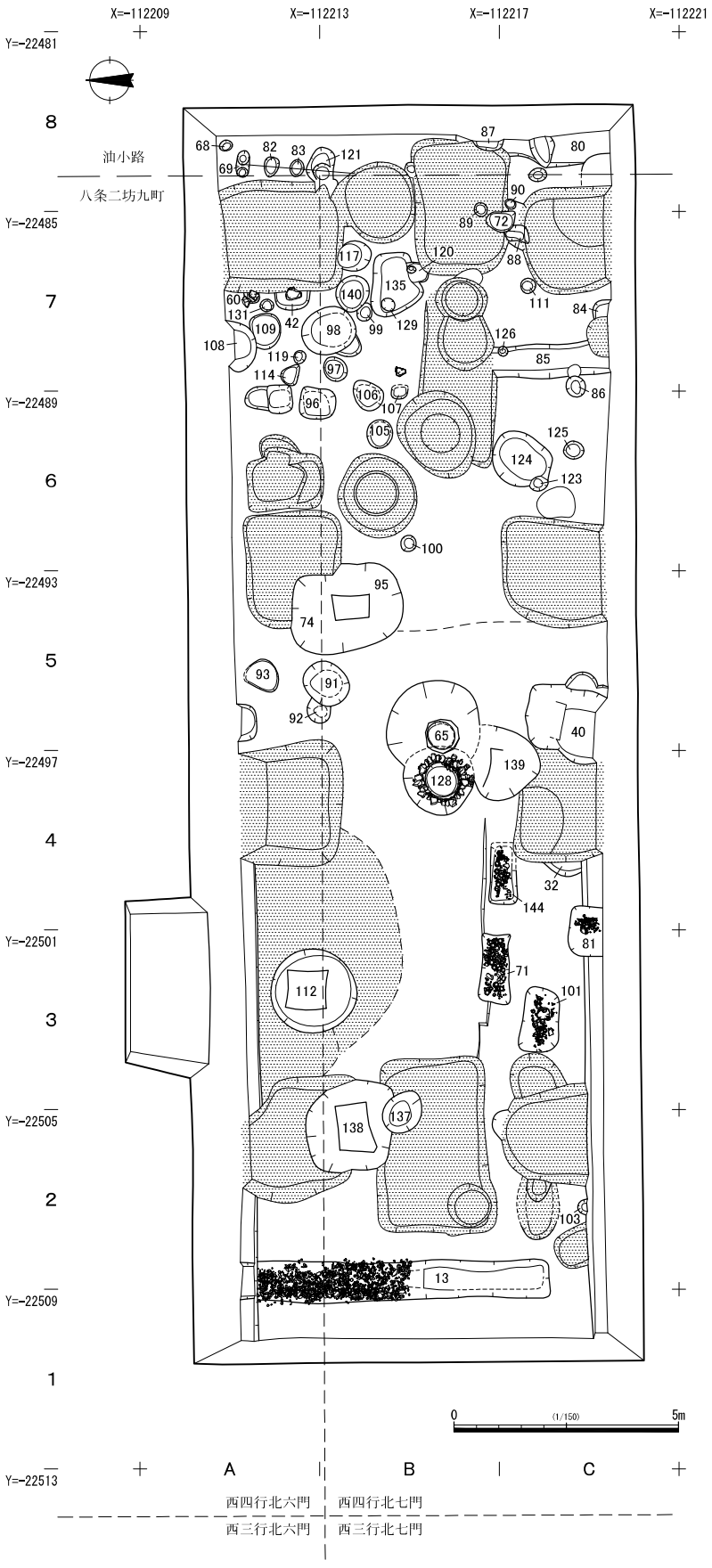


1　現代整地層 1
2　現代整地層 2
3　版築状地業（砂利と土の互層、締まってはいない）
4　埋甕遺構（便槽か）
5　漆喰塊集中
6　2.5YR4/6 暗赤褐色土（焼土・焼け瓦）
7　7.5YR3/3 暗褐色土
8　7.5YR3/2 黒褐色土（陶片多く含む）
9　5YR4/1　暗灰褐色土（井戸S17埋土）
10　7.5YR3/3 暗褐色土（礫含む）
11　7.5YR3/2 黒褐色土（礫含む）
12　7.5YR2/2 黒褐色粘質土
13　7.5YR3/2 黒褐色土（小礫含む）
14　7.5YR3/3 暗褐色土（石・礫多く含む）
15　7.5YR3/2 黒褐色粘質土
16　7.5YR3/3 暗褐色土
17　7.5YR3/3 暗褐色粘質土（礫多く含む）
18　7.5YR3/2 黒褐色砂質土（小礫含む）
19　10YR3/1　黒褐色砂質土
20　5YR4/1　褐灰色土（土坑S45埋土、小礫含む）
21　7.5YR3/3 暗褐色砂質土（江戸時代遺物包含層）
22　5YR2/1　黒褐色粘質土（瓦類多く含む）
23　7.5YR1.7/1 黒色泥土
24　7.5YR3/2　黒褐色砂質土
25　7.5YR3/3　暗褐色砂質土（江戸時代遺物包含層、21に類似）
26　7.5YR4/2　暗灰褐色土（江戸時代遺物含む）
27　7.5YR3/3　暗褐色砂質土（25に近似）
28　7.5YR4/2　暗灰褐色土（江戸時代遺物含む、26に類似）
29　7.5YR3/3　暗褐色土（室町時代遺物包含層）
30　7.5YR3/3　暗褐色土（江戸時代遺物包含層）
31　7.5YR4/1　暗灰褐色土（江戸時代遺物包含層）
32　7.5YR4/2　暗灰褐色土（室町時代遺物包含層）
33　7.5YR3/3　暗褐色砂質土（江戸時代遺物包含層）
34　7.5YR4/2　暗灰褐色土（室町時代遺物包含層）
35　7.5YR4/2　暗灰褐色土（鎌倉時代遺物包含層）
36　7.5YR4/2　暗灰褐色土（鎌倉時代遺物包含層、35に類似）
37　7.5YR3/3　暗褐色土（S146埋土、上部に土器類多く含む）
38　7.5YR2/2　黒褐色土（井戸S40埋土）
39　7.5YR2/2　黒褐色粘質土（井戸S40埋土）
40　7.5YR2/2　黒褐色粘質土（井戸S75埋土、礫多数含む）
41　7.5YR4/2　暗灰褐色土（鎌倉時代遺物包含層、35に類似）
42　7.5YR2/2　黒褐色粘質土（井戸S74埋土）
43　10YR7/4　にぶい黄橙色砂礫層（地山）

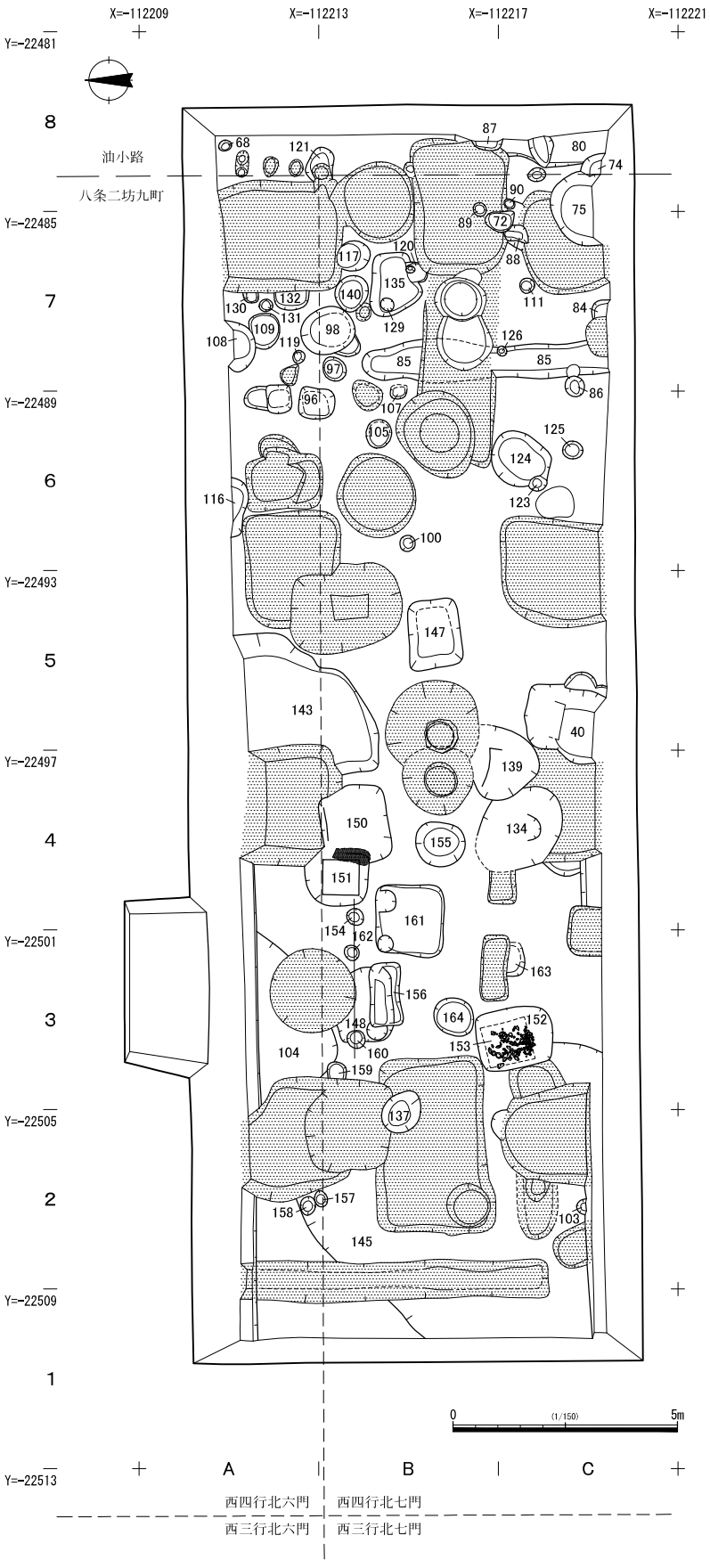
第３図　調査区南壁土層図



第 4 図　検出遺構図 1（江戸時代以降）



第５図　検出遺構図２（室町時代）



第６図　検出遺構図３（平安～鎌倉時代）

第２章　調査地の歴史的変遷

今回の調査地は平安京の「左京八条二坊九町」になり、北が七条大路（現七条通）、南は塩小路（木津屋橋通）、西は堀川小路（堀川通）、東を油小路（油小路通）に囲まれた一画である。この地そのものは直接的な記録が少ないため、周辺の七・八条の二・三坊あたりまでを含めた歴史的変遷を見ていく。

「左京八条二坊九町」は、平安京遷都に伴い長岡京から移された東市（七条二坊三・四・五・六町）の南東にあたり、後に市町の四方に拡張されたと考えられる東側と南側の東市外町に隣接する。平安時代前半期の七条・八条辺は、平安宮に近い京の北部に比べると著名な邸宅はあまり見当たらず、七条二坊十三・十四町が宇多法皇の御所で、延喜 13 年（913）に盛大な歌合が開催された「亭子院」であったことが知られる程度である。ただし、東市を中心として経済活動は活発な地域であったとみられ、今回の調査地近辺の既往の埋蔵文化財調査においても、平安時代前期段階からの多彩な遺物が数多く出土し、繁華な様子が窺える。天慶元年（938）、空也上人が東市門前などで念仏を始めるのも、人が賑わう場所であったからであろう。

その後、平安時代後期頃からは七条大路（七条通）と町小路（新町通）の交点あたりが「七条町」と称され、平安京の商工業の要の地として繁栄する。11 世紀半ば頃に成ったとされる藤原明衡の『新猿楽記』には、架空の人物ながら「七条町」辺の金属製品に関わる工人たちの話が記されており、八条二坊・三坊での発掘調査ではこの話を裏付けるように平安～鎌倉時代の鋳造に関係する遺物が多数出土している。

七条大路については、11 世紀代から稲荷祭の祭列巡行路として見物の人々で賑わっていた様子もしばしば記録されている。長久元年（1040）4 月には藤原資房が七条堀川辺の小屋から稲荷祭列を見物し（『春記』）、永保元年（1081）には「七条町」東南に稲荷祭見物の桟敷が設けられ（『帥記』）、康和 5 年（1103）の稲荷祭では「市町桟敷」があった（『本朝世紀』）。12 世紀に成立したと考えられる『年中行事絵巻』には、稲荷祭列が民家の建ち並ぶ大路を巡行する場面が描かれている。

治承 2 年（1178）3 月 24 日、七条東洞院から出火し西は朱雀大路に至るまでを焼く大火があった。前年の平安京中心部の大火「太郎焼亡」に対してこの火災は「次郎焼亡」と呼ばれた。七条大路の両側五十町余りが被災したといい、家屋が密集していたこと思わせる。近辺では承安元年（1171）10 月 3 日にも、八条二坊十二町の藤原顕長邸が焼失している（『百錬抄』）。

院政期の八条一坊には八条辺に院の御所や近臣の邸宅が営まれ、平清盛の広大な西八条第（八条一坊五・六・十一・十二・十三・十四町）をはじめ八条大路沿いには平家一門の居宅なども建ち並んでいた。この西八条第は寿永 2 年（1183）、平家都落ちの際に自ら火を放ち灰燼に帰した。ここより西の八条三坊には、後に「八条院町」と呼ばれる八条院暲子が鳥羽法皇から伝えられた

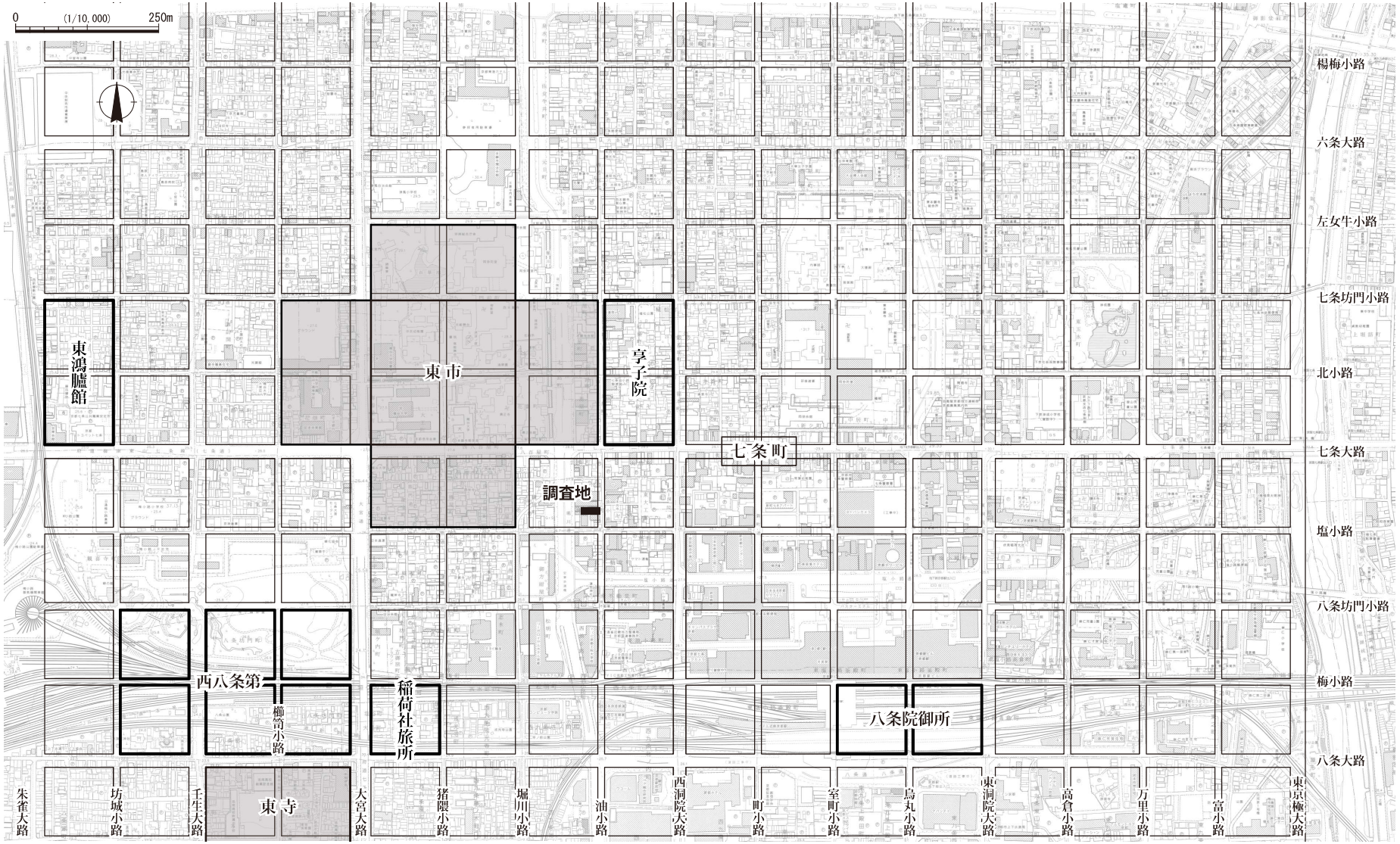
多くの所領地があった。女院の崩後は伝領を重ね、多くがその後東寺に施入された。女院御所は荒廃が進んでいったようで、嘉禄元年（1225）11 月 11 日に近隣を訪れた藤原定家はその状況を見て慨嘆している（『明月記』）。ただし、この記事からは、道路に沿った邸宅の築地などが毀たれていてもその場所に民屋が建ち並ぶ様子も窺える。貴賓の大邸宅は消滅しても、この付近での民衆の活動が依然として盛んであることがみえる。寛喜 3 年（1231）夏に八条三坊の塩小路西洞院から室町小路まで焼亡するが、この付近は裕福な商工人の多い「潤屋」とされている（『民経記』）。文暦元年（1234）8 月にも、烏丸小路西、油小路東、七条坊門小路南、八条坊門小路北が焼亡した。この範囲も「土倉数知れず」という（『明月記』）。その後の、応永 33 年（1426）には七条大路の堀川小路～東洞院大路間に 6 軒の酒屋が存在していたという（「応永三十二・三十三年酒屋交名」『北野天満宮文書』）。

弘安 7 年（1284）、一遍上人は空也上人の市町での念仏の遺跡である七条堀川の金光寺に踊躍念仏の踊屋を掛けた。その有様を描いた『一遍聖絵』第七には、舞台の周りを屋根のある桟敷とない桟敷が囲み、大勢の見物人が集まっている様子がみえる。10 台以上の牛車が舞台を取り囲んでおり、京内の貴賤の人々に人気のイベントであったことがわかる。子供の遊ぶ姿も多いことは、近隣には庶民の居住者の暮らしがあったことも表している。

貞和元年（1345）、法華宗の本国寺が京に寺地を得て鎌倉より移転した。寺地は、およそ北は五条大路（松原通）、南は七条坊門小路（正面通）、東は堀川（堀川通）、西は大宮（大宮通）までに及ぶ広大なものであった。後に堀など防御施設も備えるようで、戦国時代にはしばしば軍事拠点のようになっている。大永 7 年（1527）2 月、足利義晴が三好・柳本勢に備えて室町殿から本国寺に陣を移したが、桂河原の戦いで敗れ、義晴は近江に追放される。天文元年（1532）には本国寺が法華一揆の拠点となり、天文 6 年（1537）に「天文法華の乱」で本国寺は焼失する。一時堺に避難したが、天文 11 年（1542）には環住の勅許を得て旧地に戻った。永禄 11 年（1568）、織田信長が足利義昭を奉じて上洛した際には、本国寺を義昭の仮御所としている。そして本国寺の堂舎を破却して義昭の居所を造営する資材にしようとするが、これには洛中の門徒が信長に中止を請願している。後に、正徳元年（1711）の朝鮮通信使来訪時にも本圀寺が京での一行の宿舎とされている。

なお、本国寺の南の堀川七条西北には、一遍が踊躍念仏を行った時宗の市屋道場金光寺があった。文明 18 年（1486）には七条大宮の三昧聖が、金光寺に対し荼毘作業の料の定めを誓約している（『金光寺文書』）、

天正 19 年（1591）、本願寺と興正寺が大坂天満から京に移転する。その寺地は本国寺の南部 2 町が割譲され、本願寺にあてられた。またこれに伴い、時宗金光寺も六条京極に移される（『秀吉朱印状』）。7 月には本願寺の御影堂が移建され、翌文禄元年（1592）7 月に阿弥陀堂が建立されている。移転後間もない文禄 5 年（慶長元年、1596）閏 7 月 13 日、いわゆる「慶長伏見大地震」



第７図　平安時代の調査地周辺

が起こり、阿弥陀堂は倒壊を免れたが本願寺の他の諸堂多数が被災した。翌年に御影堂が再建されているが、元和 3 年（1617）12 月 20 日にも本願寺が焼亡している。元和 4 年（1618）に阿弥陀堂再建、寛永 13 年（1636）に御影堂再建など、現在の西本願寺の多数の文化財建造物はこの後の復興によるものである。また、本願寺の諸堂の移転･建立とともに、伽藍の東側の堀川東、七条北には寺内町が形成されている（寛永 8 年『本願寺寺内町絵図』）。

なお、徳川家康が慶長 7 年（1602）に七条北、烏丸西の地を教如上人に寄進し、翌年、新たな本願寺（東本願寺）の阿弥陀堂が建立されている。これにより七条から六条の間には、東西本願寺の伽藍が並び建ちそれぞれの寺内町も発展し、今に至っている。

寛永 16 年（1639）には（西）本願寺に学寮が設立された。元禄 8 年（1695）に寺内町北部（東中筋通学林町）に本願寺学林が再建される。学林は元治元年（1864）の兵火で全焼したが、明治 4 年（1871）に本願寺境内南部に移転し､これを継いで明治 12 年（1879）に本願寺大教校（大宮学舎）が落成し、大正 11 年（1922）に大学となり「龍谷大学」と改称された。

今回の調査地の「油小路町」は､寛永 14 年（1637）の京絵図にも「油小路丁」とある（『洛中絵図』）。この町内は、慶長 7 年（1602）に二条大宮付近の人家を移して油小路町を開いたとされる（『坊目誌』）。豊臣秀吉の築いた御土居の南端に近く、当時の絵図ではこの付近は畑など耕作地とされる土地が多いが油小路町のあたりは町屋で、七条北の本願寺寺内町に続く市街地のようになっている。なお、油小路町には天和元年（1681）4 月、日堯を開基として日蓮宗の本光寺が建立されている（『京町鑑』）。

幕末の元治元年（1864）、蛤御門の変（禁門の変）がおこり京都の市街地南部の大部分が焼亡した。当時のかわら版によると、今回の調査地辺では本願寺・本圀寺は焼失を免れたが、堀川の東までは焼け、南は七条あたりまでが焼亡範囲とされる。今回の調査では、大規模な焼土・焼瓦の層は認められなかったが、焼瓦を投棄された土坑があり、この火災が七条を越えて調査地辺まで及んでいた可能性がある。蛤御門の変の後、慶応元年（1865）3 月に新撰組が屯所を壬生から西本願寺に移し、境内で調練などを行った。大砲の訓練もなされたという。新撰組屯所は慶応 3 年（1867）6 月に、西本願寺の南方で現在の JR 京都駅の西にあたる不動堂村に、西本願寺が費用を負担して移された。その年の 11 月 18 日、油小路の本光寺付近で新撰組が元隊士であった伊東甲子太郎を襲撃する事件もあった。

明治維新を迎えた後、七条・八条辺りで大きな変化のあったのは鉄道の開通である。明治 10 年（1877）に日本で 2 番目になる鉄道が神戸と京都を結んで開通し、その京都の駅として京都停車場（現 JR 京都駅）が造られた。明治 13 年（1880）に路線はさらに京都から大津まで延伸され､後に東海道線の一部になる。同年､停車場構内に郵便電信局もつくられる（後､七条郵便局。現京都中央郵便局）。明治 29 年（1896）には、奈良鉄道（JR 奈良線）が京都と奈良の間が開通し、翌年には京都鉄道（JR 嵯峨野線）も乗り入れている。京都停車場は、当時の京都の中心であった三条辺りからは離れていたが、徐々にこの駅が京都の新たな交通の要所となっていく。明

治 37 年（1904）、路面電車の京都電気鉄道西洞院線の西四条から七条駅前間が開業し、大正元年（1912）には、市電の七条烏丸から七条大宮間が開通した。さらに昭和 3 年（1928）、奈良電気鉄道（近畿日本鉄道京都線）が京都駅まで通じている。駅周辺の開発も進み、大正 9 年（1920）、京都駅北側に京都物産館（後の丸物百貨店、現在の京都ヨドバシの地）が開業し、大正 15 年（1926）に 6 階建の社屋が完成している。同年には京都駅の駅舎も建設された。昭和 3 年（1928）、京都ステーションホテル開業（1984 年閉業）、昭和 12 年（1937）には駅前に武田五一の設計になる京都電燈株式会社の社屋が竣工（現関西電力京都支社）するなど、京都駅の北側には近代的な街並みが形成されてきた。第二次大戦後の 1960 年代頃からは、東西本願寺の南の京都駅前の再開発が目立ち始める。昭和 39 年（1964）、東海道新幹線の開通した年の京都タワーの開業を始め、近年の京都駅舎の建て替えなど現在も続く京都駅周辺の再開発が行われている。これらの開発に伴う埋蔵文化財調査の実施により、当地の特に平安～室町時代の実態が明らかになってきている。

第 8 図　現在の調査地周辺
（隣地建物より北西の興正寺・
西本願寺を望む）

第３章　検出遺構

調査区では、ほぼ全面から各時期の何らかの遺構が検出されている。近現代以前の遺構は、出土遺物の検討で平安時代から江戸時代までのものがあるが、出土遺物から確実に平安時代の遺構と認められるのは少なく、大半が鎌倉時代以降であった。特に室町時代に属する遺構が多いように思われた。遺構の種類は、各時期とも井戸が目立ち、柱穴・土坑墓・溝・瓦溜などがあった。以下、年代別に遺構の種類ごとに個別の遺構を記していく。

1. 平安・鎌倉時代の遺構（第６図）

落込み S104

A-3 区の調査区北壁際で、江戸時代の落込み遺構 S73 の下層で検出した。北の調査区外に続く大きな土坑の底部のようであるが､井戸 S112 や西側の柱基礎撹乱（S8）が掘り込まれているため、遺構の詳細はわからない。埋土は暗褐色の粘質土で、厚さは 10㎝程度であった。

土坑 S124

C-6 区で検出した浅い土坑である。長径 1.5m、短径 1.1m の南西 - 北東方向にやや長い偏円形の土坑で、深さが 10 ～ 15㎝であるため、検出したのは土坑の底にあたる部分かと思われる。

柱穴列 2（柱穴 S154、S162、S160）

B-3・4 区の鎌倉時代遺物包含層下で、東西方向にほぼ直線に並ぶ一連の柱穴と見られる浅い小土坑が検出できた。いずれも径 35㎝程度の円形掘方で、深さは 5㎝ほどしかない。S154 と S162 の間隔は 0.8m、S162 と S160 の間隔は 1.8m であった。この列の東西は後代の井戸が掘り込まれており、南北にも関連しそうな柱穴は認められなかった。1・2 区の S157、S158、S159 も同様の形状で柱穴らしいが、関連はわからない。これらの遺構の分布している場所は、九町西四行の六門と七門との境あたりで、何らかの区画に関わるかも知れない。

溝 S85

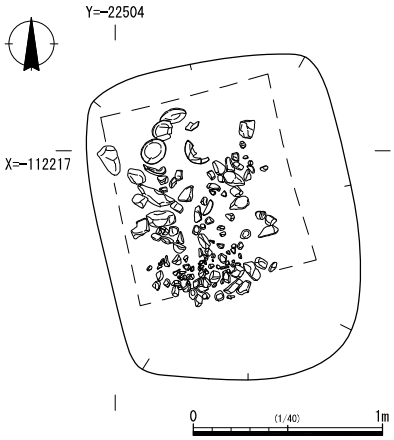
B・C-7 区で検出した南北方向の溝である。B-7 区が北端で南壁までの 5.5m 分を検出した。幅は 70 ～ 80㎝、深さが 10㎝程度で浅く、かなり削平されているようであり、本来はもっと北に延びていたことも考えられる。この溝の位置は、平安京の油小路と八条二坊九町宅地の境の築地推定線から、西に約 4m 離れて境界線に平行している。築地の内溝にはあたらないであろうが、境界との関連は考えられよう。

土坑 S147

B-5 区で検出した、東西幅 1.5m、南北幅 1.2m のほぼ角丸方形土坑である。深さは 30㎝程度で、底面は平らではなく、中央部が少し窪む状況であった。

土坑 S155

B-4 区の石組遺構 S128 の西側で検出された。東西 1m、南北 1.1m の偏円形の土坑で、深さは約 20㎝である。この土坑は鎌倉時代遺物包含層下で遺構輪郭が認められたが、埋土は包含層と同様であった。



第 9 図　井戸 S153 遺構図

井戸 S152・153（図版 4、第 9 図）

B・C-3 区の包含層下で検出した方形掘方の井戸である。掘方は南北 1.5m、東西 1.2m の規模で深さは検出面から 1.1m、底面の標高は 25.0m であった。底部で木枠らしい木片を検出した。ただし痕跡程度であり、裏込め土も崩落しているようで詳細はわからないが、縦板方形枠かと思われた。検出面では、掘方内のやや西寄りが窪んでおり、その窪みに完形品を含む土器類と礫が多数投入されていた。当初、この土器集中部が単独の遺構かと見られたが、土器類を取り上げ、周囲を掘り下げると井戸の形状になっていった。土器集中部の下層の埋土にも完形に近い土器類が含まれていたが、上面の土器類よりは少なかった。

井戸 S151（図版 5、第 10 図）

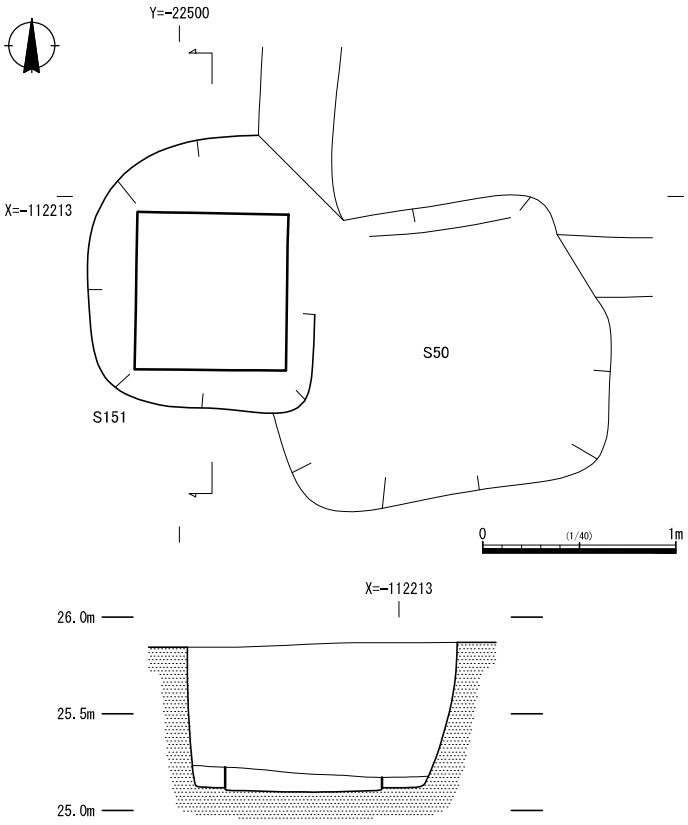
A・B-4 区で検出した 1 辺 1.5m 程度の角丸方形掘方の井戸である。深さは検出面から 0.8m で、底面の標高は 25.05m であった。底部に明瞭な 1 辺 0.8m の正方形の木枠痕が認められたが、木質は痕跡のみである。水溜施設とみられる。この井戸の上層から中層あたりまでの埋土には、土師器皿を中心に多量の土器類が混入していた。

井戸 S75・79

C-7・8 区の南壁際で検出した井戸である。現代の柱基礎撹乱坑の底面で遺構輪郭が見えた状況で、詳細は不明であるが、掘方は不整円形らしい。壁際であったため、底部の確認はできなかった。

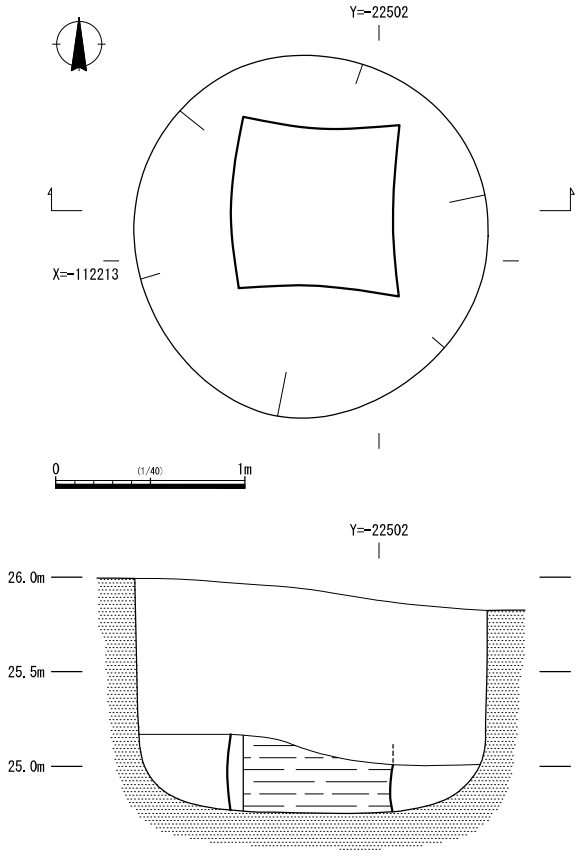
井戸 S134

C-4 区で検出した不整円形掘方の井戸である。井戸 S139・墓 S144 に切られ、また南半は柱基礎撹乱 S5 で大きく掘り込まれていた。底面の標高は 25.2m で、底部に若干の木質痕が認められたので、木枠の水溜が設けられていたらしい。



第 10 図　井戸 S151 遺構図

2. 室町時代の遺構（第 5 図）



第 11 図　井戸 S112 遺構図

井戸 S139（図版 7、第 13 図）

B・C-4・5 区で検出した不整円形掘方の井戸である。井戸 S65・石組遺構 S128 および柱基礎撹乱 S5 に切られていた。底面の標高は 25.0m で、底部に方形になるような木質の痕跡があり、木枠の水溜が設けられていたとみられる。

井戸 S112（図版 6、第 11 図）

A・B-3 区で、江戸時代の落込み遺構 S73 の下層で検出した井戸である。掘方は径 1.9m の円形で、深さは検出面から 1.2m、底面の標高は 24.9m であった。下部に 1 辺 0.8m の方形木枠が設けられている。木枠は横板組みと思われるが木質は痕跡程度であった。

井戸 S138（図版 6、第 12 図）

A・B-2・3 区の江戸時代の土坑 S35 の下層で検出した井戸である。砂利層に掘り込まれているため、掘方の壁面がかなり崩落していたが、1 辺約 2m の角丸方形と見られる。底面の標高は 25.0m で、底部には腐朽した木片が散っていた。その痕跡から、およそ短辺 0.6m、長辺 1m の長方形に木枠が設けられていたらしい。

井戸 S65（図版 7、第 13 図）

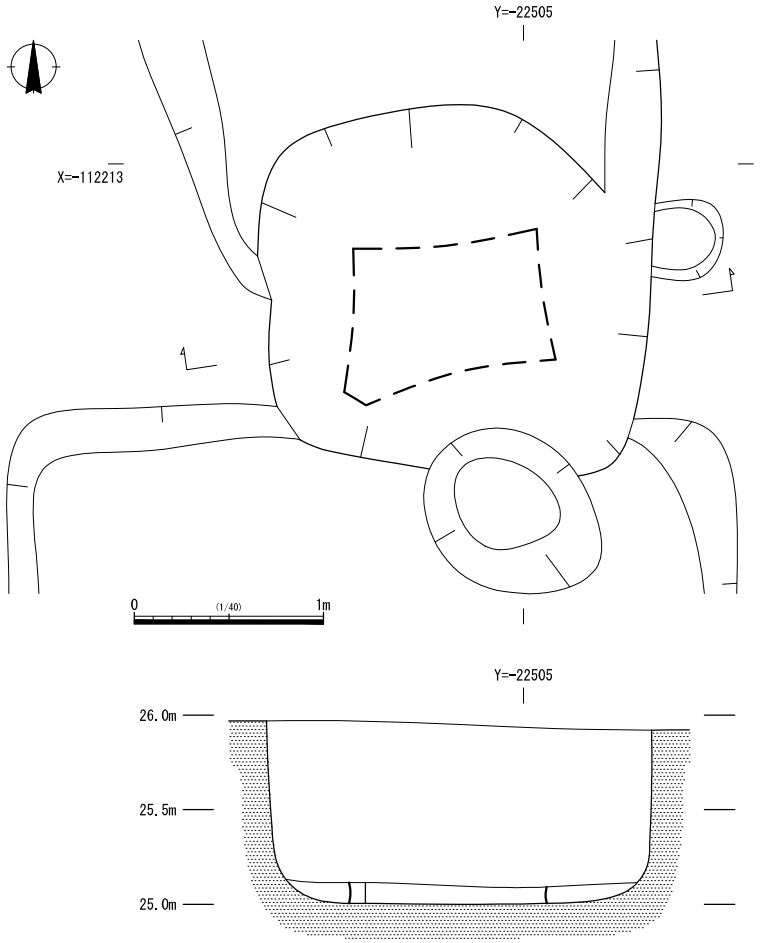
B-4・5 区で検出した井戸である。掘方は大きくて径約 2m の円形であった。その掘方中心より少し西寄りに、幅 20 ～ 30㎝のやや幅広の縦板 10 枚で径約 80㎝の多角形に枠をつくる。さらにその内側に幅の狭い縦板で径 60㎝の円形枠がつくられていた。円形枠は水溜とみられ、高さ 40㎝までは確認できた。井戸上部は崩壊していて木質の状態も良くないので、多角形枠の板の長さや固定状況などはわからない。なお、井戸底面の標高は 24.7m である。

石組遺構 S128（図版 7、第 13 図）

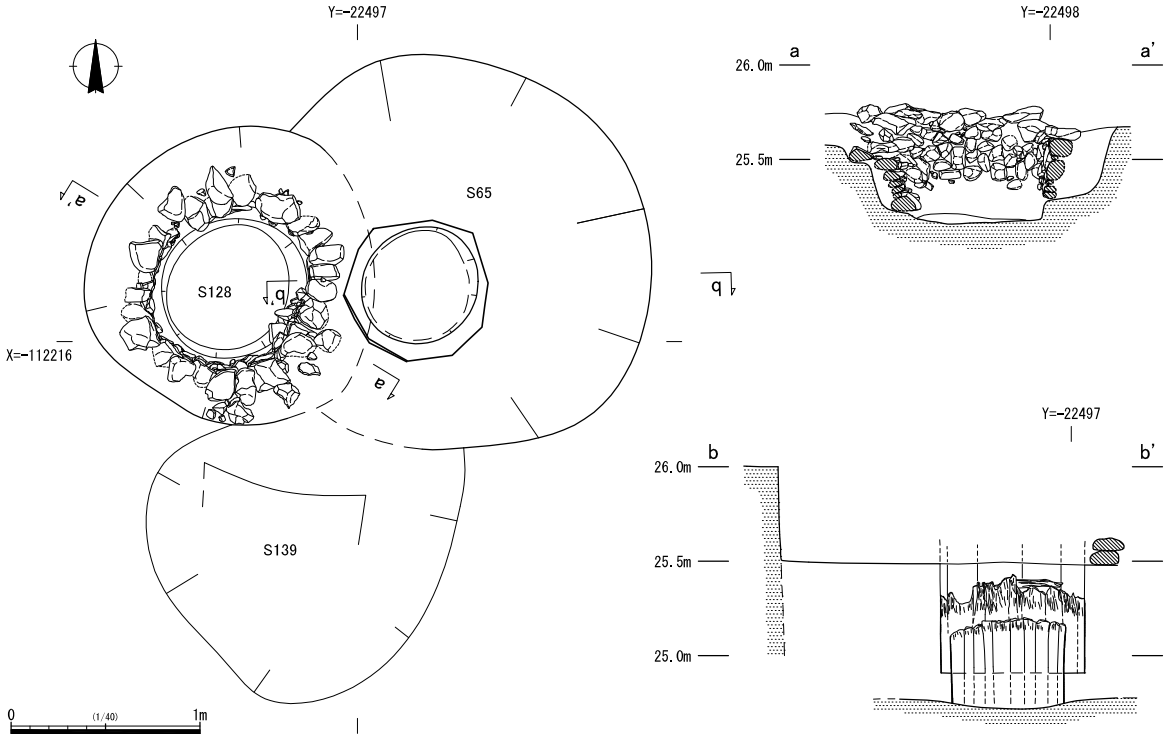
B-4 区で検出した円形の石組井戸状遺構で、東側の井戸 S65 を切り込んでいる。形状は石組の井戸と同様であるが、深さは検出面から 60㎝、底面の標高が 25.2 m程度であり湧水層には達していない。むしろ排水枡のような施設とも思われる。掘方は径 1.5m で、石組の内径は 0.8m であった。なお石組は比較的扁平な河原石を積んでいるが、石に混じって有孔磚の破片も用いられていた。

墓 S71（図版 8、第 14 図）

B・C-3 区で検出した東西に長い長方形の土坑である。東西長 1.5m、南北幅 0.6m で、深さは



第 12 図　井戸 S138 遺構図



第 13 図　井戸 S65、石組遺構 S128、井戸 S139 遺構図

検出面から 30㎝程度であった。土坑の中には 20㎝ほどの厚さで、礫と完形の土師器や白色土器などの土器類が多量に入れられていた。類例からこの遺構は墓と考えられる。土坑の各壁面がほぼ垂直になり、壁面と底面との角の仕上げなど、他の同様の遺構に比べて整形はかなり丁寧なされていた。土坑内部の土器類は、出土状況からみて南側の東寄りから流し込まれたように思われるが、大半が口縁を上に向けていた。また、土坑内やや西寄りに完形ではないが東播系の捏鉢が土器類の上に被さるように入れられていた。土器類の下部で、ハモ（鱧）と見られる魚骨が数点含まれていたが、状態は良くない。なお、中央あたりの埋土には土器類の堆積上に、径 40㎝ほどの範囲で脆い焼土塊が集中していた。

墓 S144（図版 9、第 15 図）

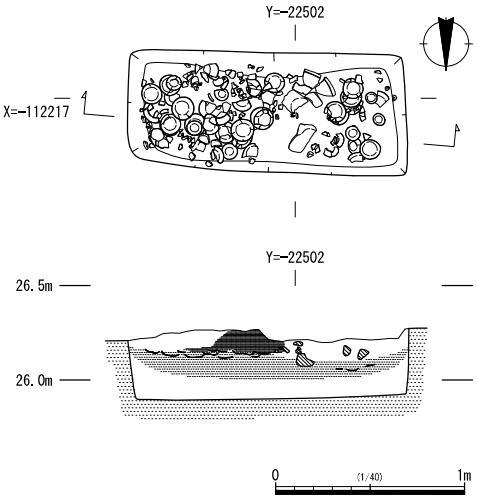
C-4 区で検出した東西に長い長方形の土坑である。西側の墓 S71 と軸線を揃えるようにつくられ、墓 S71 との間隔は 0.7m ほどである。土坑の深さは検出面から南北幅は約 0.6m で、東西は西端から 1.3m までは確認できたが、東端部は柱基礎撹乱 S5 と下層の井戸 S134 の掘削時に削り込んでしまったため、東西幅は不明である。土坑内には墓 S71 と同様に土器類が多量に入れられていた。

墓 S101（図版 10、第 16 図）

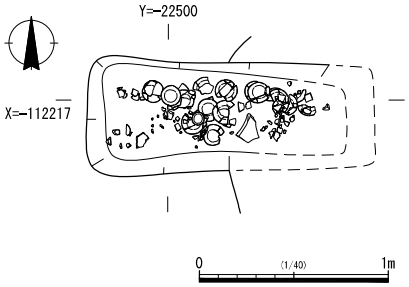
C-3 区の墓 S71 の南西で検出した東西に長い角丸長方形の土坑である。南北約 0.8m、東西約 1.4m で、窪み状に掘られていて輪郭もあまり明確ではない。中央部で深さが検出面から 25㎝ほどで、土坑内に多量の土器類が入れられていた。また、土器類の中にほぼ完形に復元できる瓦器鍋が上向きに入っていた。これも墓と考えられる。

墓 S81（第 17 図）

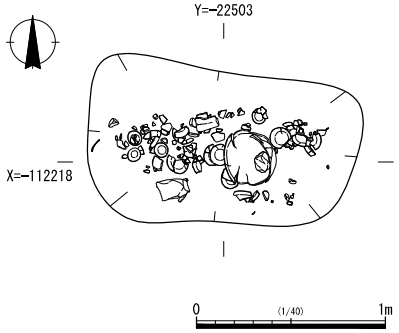
C-3・4 区の南壁際で検出した、土器類を多量に入れた土坑である。掘方は、東西幅約 1m の方形とみられるが、北端部だけの検出で南部が調査区外に



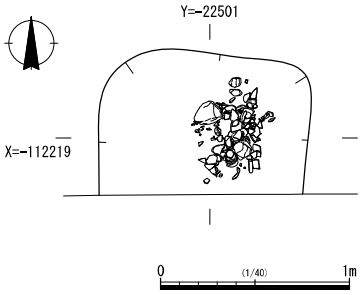
第 14 図　墓 S71 遺構図



第 15 図　墓 S144 遺構図



第 16 図　墓 S101 遺構図

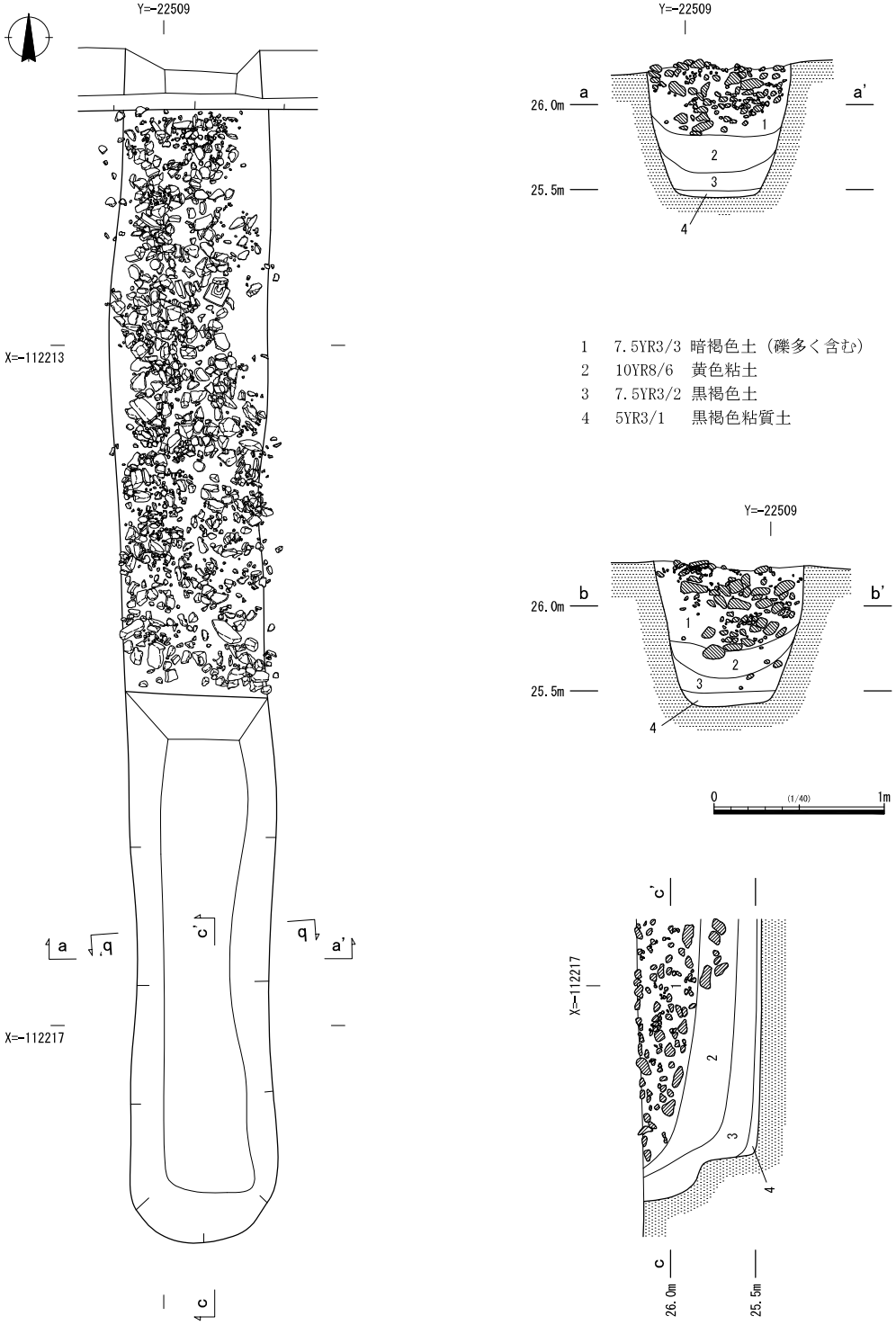


第 17 図　墓 S81 遺構図

なるため全容は確認できなかった。土器類は掘方内の北端部で幅 40㎝、深さ 20㎝ほどの範囲に集中していた。土器類の堆積状況などから、この遺構も墓の可能性が考えられる。

墓 S103

C-2 区の南壁際で検出した土坑である。ただし、土坑の大半は調査区外になるとみられ全容はわからない。検出した部分では土器類が多量に入れられていた。周辺の遺構の分布状況などから、この遺構も墓であろう。



第 18 図　暗渠溝 S13 遺構図

暗渠溝 S13（図版 11、第 18 図）

A ～ C-2 区で検出した南北方向の溝である。南端が C-2 区で北に約 7 m分を確認したが、さらに北の調査区外に延びる。溝内には、検出面から深さ 60㎝あたりまで径 10㎝前後の多数の礫が投入されており、暗渠になっていたとみられる。溝の幅は、肩部でほぼ 90㎝、底部で 45㎝、深さは検出面から 90㎝である。当初の底面の標高は、南端で 25.4 m、北端で　mであるが、底面から 10 ～ 15㎝ほど土を入れた上に、厚さ 15㎝前後で黄色粘土を貼って床をつくり、その上が礫層になっていた。黄色粘土層上面の標高は 25.8m であった。暗渠施工途中での水勾配などの調整であったかと思われる。なお、礫層には敷瓦や有孔磚の破片も投入されていた。

柱穴列 1（S69、S82、S83、S118）

A・B-8 区の東壁際で検出した南北方向に柱穴列で、ほぼ 60㎝の間隔で並ぶ。この列の南は現代の掘り込みなどがあり、続きは確認できなかった。規模から見て、柵列のような施設と思われる。柱穴の掘方は径 30 ～ 40㎝の円形で検出面からの深さは 25㎝程度であった。ただ、S69 の掘方は東西が約 60㎝の楕円形で、さらに中に二つの掘り込みがあった。これが他の柱穴と一連であれば、あるいはこれが柱穴列の端になるかも知れない。柱穴列の位置は、平安京の油小路と八条二坊九町宅地の境の築地推定線にほぼ重なり、区画を踏襲するものであろう。ただし、方位は少し北が東に振れていた。

3. 江戸時代の遺構（第 4 図）

落込み S73

A・B-3・4 区で検出した黒褐色泥土が溜まる落込みで、北は調査区外に続いていく。埋土中には江戸時代前半代の備前の水指などの陶磁器類や瓦類が含まれ、状態は良くないがウシかと思われる骨片も含まれていた。

落込み S31

C-3 区の調査区南壁際で南に続く落込みを検出した。埋土は黒褐色泥土で、遺物は瓦類が特に多かった。ただし、検出できたのは遺構北端から調査区南壁までの 30㎝程度であったため、全体の規模はわからない。これも江戸時代前半代の遺構と思われる。

井戸 S17・S24・S27・S28

S17（C-7 区）・24（B-7 区）・27（B-6 区）・28（B-2 区）

いずれも円形の掘方で、中に円形の桶状枠を設けていた。枠内埋土中の遺物から、江戸時代後期の遺構とみられる。

江戸時代の遺構には他に、幕末の元治の兵火の始末と思われる焼け瓦の瓦溜（S22）もあった。なお、調査区の中ほど、5・6 区辺りに厚さ 10㎝前後の整地層かと思われる江戸時代の遺物包含層があり、これより西に江戸時代前半代の遺物の出土が多いように感じられた。

第 4 章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、コンテナバット（内法 34 × 54 × 15㎝）にして 95 箱分であった。遺物の年代は、平安時代以前から江戸時代に至るまでのものがあり、中でも鎌倉～室町時代と考えられるものが多数であった。平安時代以前の時期の遺物は､いずれも後世の遺構･包含層からの出土であり、平安時代の遺物も後世の層から出土するものが多かった。鎌倉～室町時代の遺物は遺構に伴う資料、および包含層中からの出土も多い。

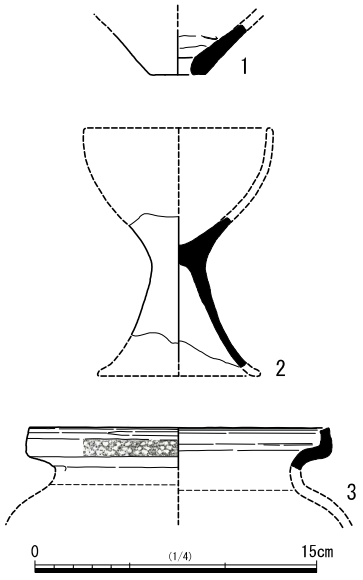
以下、主要遺物について遺構出土資料を中心に、土器・陶磁器類、瓦磚類、鋳造関係遺物、その他の遺物の順に記していく。

1.　土器・陶磁器類（第 19 ～ 45 図、図版 13 ～ 23）

第 19・20 図に掲載した弥生時代から古墳時代の土器類は、すべてが平安時代以降の整地層や遺構への混入品として出土している。両期の遺物は他にも小片が出土しているが図示に耐えるものは少ない。

第 19 図 1 は落込み遺構 S104 への混入品である。体部から口縁部が逆八の字状に開く小振りの甑である。径 3㎝ほどの小径平底の底部中央付近に、径 0.8㎝ほどの小孔を穿つ。2 は井戸 S65 への混入品として出土した、脚台が付く台付グラス状を呈すると見ている小振りの台付鉢である。脚の付け根付近で径 3.8㎝ほどを測る。

3 は口縁部が立ち上がる特徴的な受け口状口縁形状を呈した甕である。口縁部外面には右上から左下へ斜めに列点が並ぶ、列点文を施している。山城から近江に広く分布することが知られている、いわゆる受け口状の口縁部を持った煮炊具として利用されただろう甕である。口径は 16㎝ほどであり､通有の甕（大 1 か）と言える大きさである。山城・近江南半の弥生土器第Ⅴ様式系を主体としている。

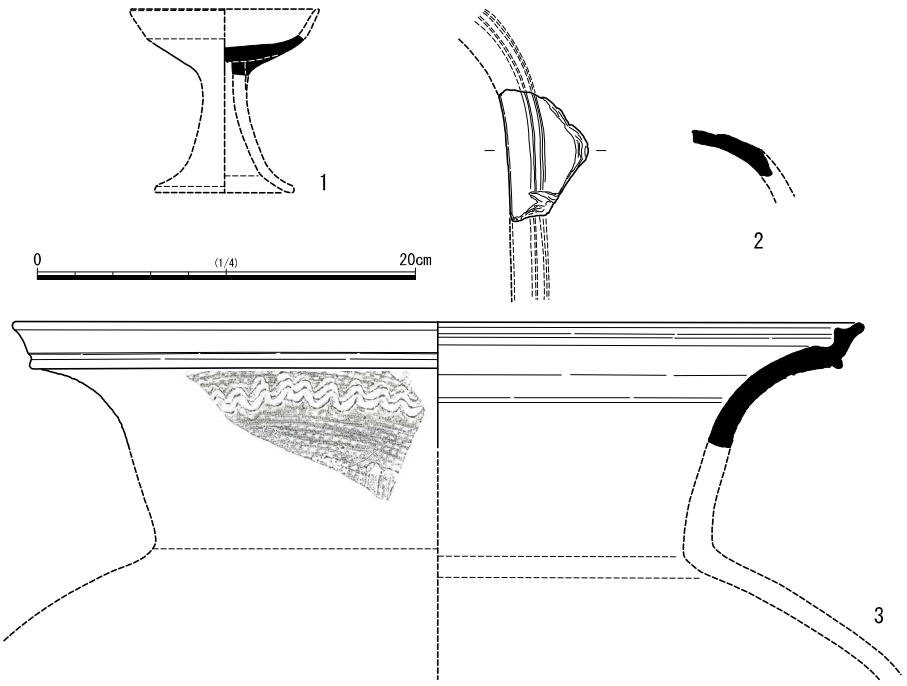


第 19 図　土器・陶磁器類実測図 1
（平安時代以前 1）

上述の 3 点ともに型式特徴からは、弥生時代後期から古墳時代初頃には収まる。

第 20 図 1 は井戸 S65 への混入品として出土した土師器高坏である。坏部下半片であるが、脚部の接合部に凹みが残り、高坏と判る。坏部口径 10cm ほど、器高 10cm 前後の小振りの高坏と推測している。2 は井戸 S75 への混入品として出土している小片である。口縁端部や残存部の形状等から、土師器竈の焚き口の側面片と見られる。

3 は中世包含層への混入品として出土した須恵器甕の口縁部片である。口径 45.0cm ほどを測

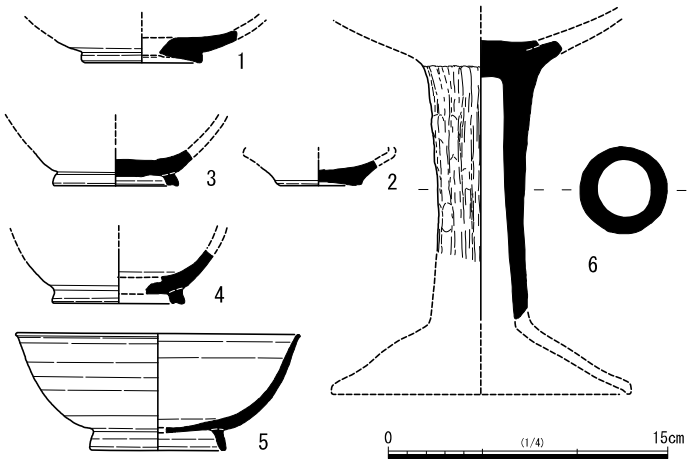


第 20 図　土器・陶磁器類実測図 2（平安時代以前 2）

り、大型甕では小さめである。本来は幅があっただろう頸部上辺は強く外反し、口縁部は直角近くで立ち上がり外面下端角は小さい突帯状を呈する仕上げとなっている。頸部上辺外面には退化した波状文が施されている。口縁部形状や胎土等からは、大阪府陶邑産あるいは同系に属するものと見ている。これら 3 点の土師器、須恵器は古墳時代末期（飛鳥時代）から奈良時代初（8 世紀前半）頃の幅の内には位置付けられるものと見ている。

第 21 図に掲載した緑釉陶器、灰釉陶器の食器類と土師器高坏片は 8 世紀末から 9・10 世紀の平安時代前半期に位置付けられる遺物である。同期遺物は、中・近世の遺構などへの混入品が大半を占めている。他に使用痕の残る土師器甕類、須恵器食器類・鉢・壺・甕、硯、黒色土器椀、白色土器椀、輸入陶磁器など各種のものが見られ、量的にもかなり出土している。

1 は径 6.4cm を測る削り出しの平底の緑釉陶器椀であり、山城産と言える。体部内外面などの釉下にヘラミガキが施されているが、削り出しの平高台底外の糸切りによる刳り込みが強く湾曲的になっており、9 世紀中葉頃に位置付けておく。2 は平高台の耳皿片である。底面は無釉であり、回転糸切り痕を残す。形態、釉調等から 9 世紀後葉から 10 世紀初めの頃を中心に見ておく。3・4

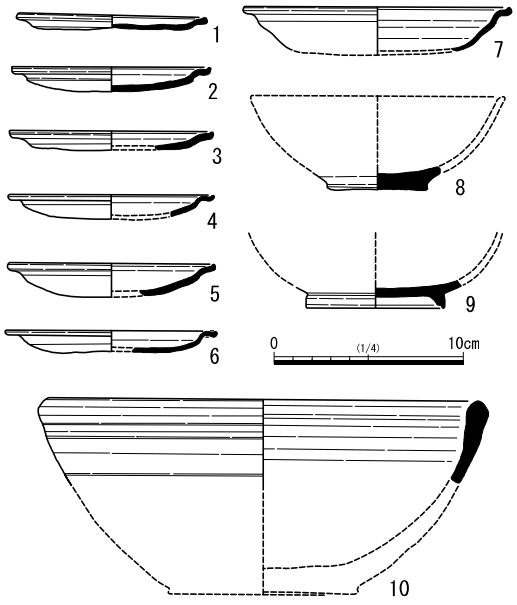


第 21 図　土器・陶磁器類実測図 3（平安時代）

の緑釉陶器埦は、体部と高台の比例からは高台が太く武骨に見える角高台であり、9 世紀に上がる古手の角高台ではない。釉調も厚手観はあるがかなり濃く、古相の淡い緑色のものではなく、10 世紀前半頃を中心によく見られる美濃産の緑釉埦と見ている。5 の灰釉陶器埦は、口縁部から高台まで残存している比較的残りのよいものである。体部形状と高台の高さが少し浅い深埦的な埦である。10 世紀前半を中心として 10 世紀の幅の内に位置付けておく。

6 は土師器高坏の脚部片である。胎土や技法痕等からは京域主流派の製品であろう。脚外面のヘラによる面取りは調整の幅がなく単位も不明となっており、平安時代中期 10 世紀代の内に位置付けられるものと見ている。

第 22 図は、落込み遺構 S104 から一定量がまとまって出土したものである。図示したもの以外にも 9 世紀から 10 世紀中葉頃の古手混入品である土師器高坏や甕類、須恵器・壺・甕片、緑釉陶器、灰釉陶器の食器類等が出土している。



第 22 図　土器・陶磁器類実測図 4
（落込み遺構 S104 出土）

1 ～ 7 は土師器の食器類である。1 ～ 6 は坏 A と皿 A の区別が難しくなっている土師器小型食器であり、1 と 3 は皿ＡⅡ（小）の流れ、2・4 ～ 6 は埦と坏ＡⅡ（小）連合の流れで、総括的に坏ＡⅡと分類できる可能性を指摘しておく。7 は土師器坏ＡⅠ（大）である。これらの土師器坏 A・皿 A は共通して薄手化しており、口縁部が外方へ強く屈曲する特徴的形態を呈するものとなっており、型式的にまとまった資料と言える。Ⅲ期新を中心に見ておく。8 は径 5.3cm を測る平高台の白色土器埦の底部であり、底面に糸切り痕を残す。古相にも見えるが、土師器と同時期と見てもよいだろう。

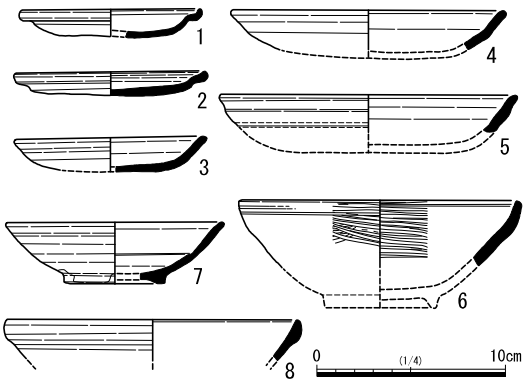
9 は緑釉陶器埦の底部片である。少し華奢な端部内側に細い凹状の段を持つ、貼り付け輪高台の埦である。近江産かとも見られるが底内に凹線もなく、釉調、胎土とも少し異なり美濃産の 10 世紀前から中葉のものと見ており、伝世使用の上で共伴した資料であろう。

10 の須恵器鉢は、口縁端部が長く変形した玉縁状を呈し、三角玉縁形からは大きく変化しているが底部は平底の糸切り痕を残す仕上げだろう。胎土等からも口丹波の篠窯産の須恵器鉢でよいだろう。

第 23 図は土坑 S124 から出土した遺物であり、古手混入品も少なくないが下限を呈す一群を示す。

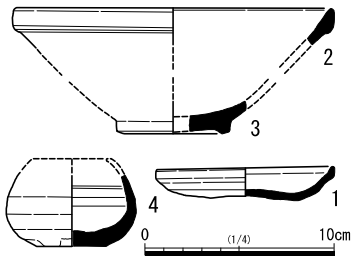
1 ～ 5 は土師器小型食器類であり、1・2 は皿（坏）A、3 は皿 N 小、4・5 は皿 N 大である。皿 A は厚手化しており、口縁端部が少し外反し、2 段凹のナデ痕を持つ、皿 N が主体の中心を占めるようになっている。しかし皿 N は小・大ともに端部は外反が鈍化し、外反の不明瞭さが出

て来ている。型式変化の進行からはⅣ期新あるいはⅤ期古の古い段階に少し幅を持たせて位置付けられるものと見ている。いずれにせよ 11 世紀後葉頃に位置付けられるだろう。6 の瓦器埦は、外面にもヘラミガキを施し、内面のヘラミガキも密であり、口径も 15.0cm を保っており、土師器と共伴しているものと見ている。7 は輸入白磁の皿、8 は同じ白磁の玉縁碗であり、玉縁は少し太くなってきている中国華南産の白磁である。提示したこれらの土師器、瓦器、輸入白磁の食器類は 11 世紀後葉の内では古い段階に埋没したものと見ている。

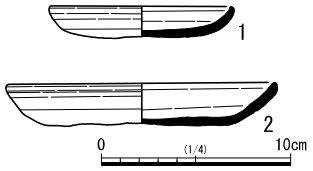


第 23 図　土器・陶磁器類実測図 5（土坑 S124 出土）

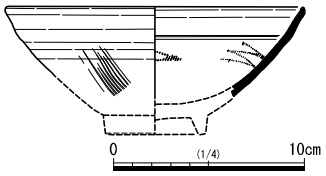
第 24 図の 4 点は土坑 S147 から出土している。1 は土師器皿 N 小であり、京都Ⅴ期新に属し、12 世紀中葉頃に位置付けしておく。2・3 は中国華南産白磁碗片である。2 は玉縁口縁で最も太い口縁は古相を呈し、12 世紀前半頃のものと見ている。3 は 2 と同一個体とは言えないが、同形式の碗の底部で太めの玉縁碗の底部形状を持つ削り出し輪高台が付く。4 は同じく華南産の白磁小壺である。無頸壺と推定しており、蓋が付くものだろう。この 3 点の白磁は土師器よりは少し古く位置付けられるが伝世使用後に、土師器皿と同時に廃棄、埋没したものであろう。



第 24 図　土器・陶磁器類実測図 6（土坑 S147 出土）



第 25 図　土器・陶磁器類実測図 7（土坑 S155 出土）



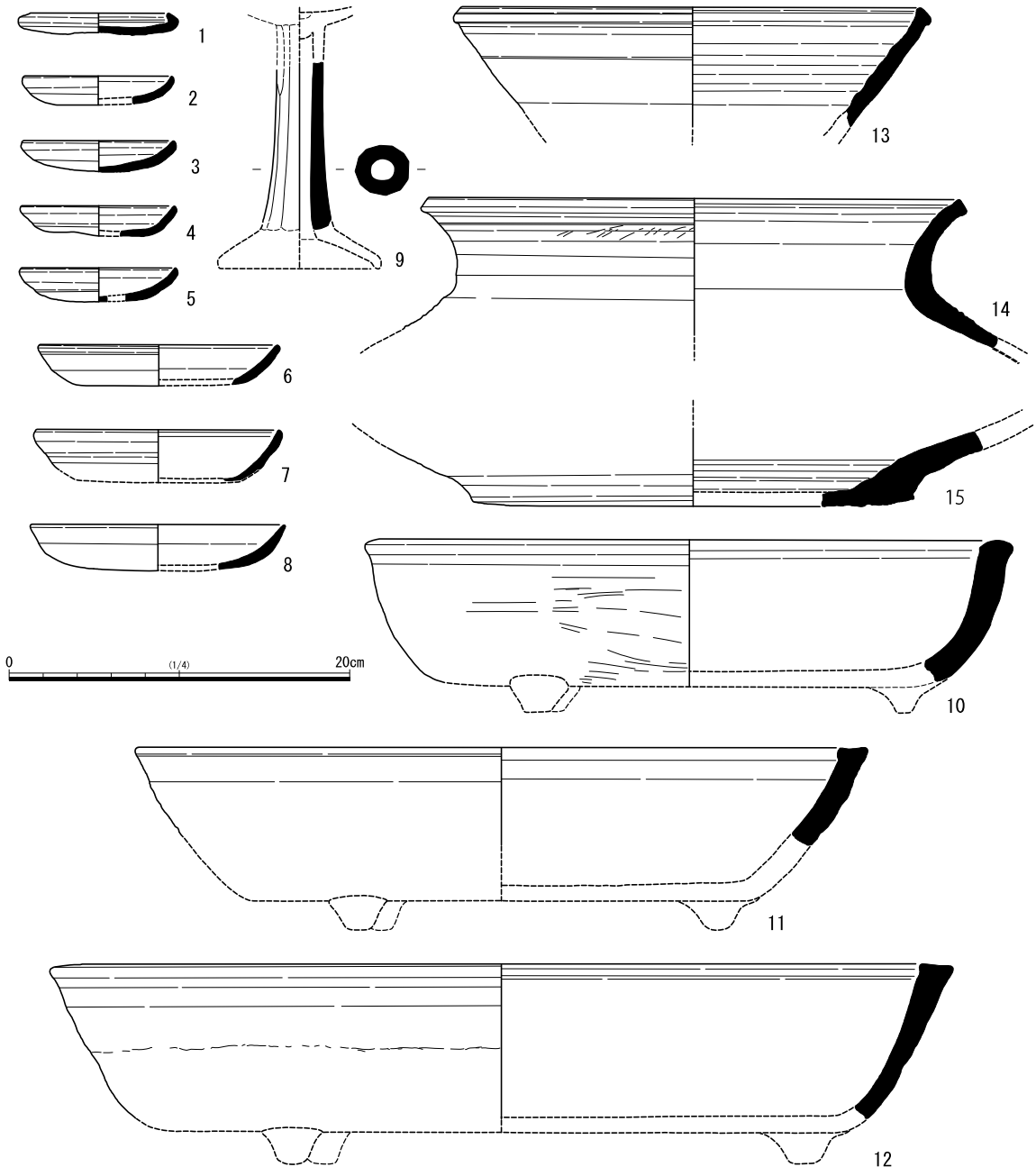
第 26 図　土器・陶磁器類実測図 8（井戸 S75 出土）

同遺構からは共伴していてよいだろう瓦器埦小片や、瓦、鉄釘類が出土しているが、他に古手混入品の 10 世紀から 11 世紀代の土師器甕や、羽釜、9 世紀から 10 世紀代の緑釉陶器埦、耳皿等も出土している。

第 25 図の 2 点は土坑 S155 から出土している。1 は土師器皿 N 小、2 は土師器皿 N 大である。1 は口径が大きめで、Ⅴ期側に属する古相を持つ。2 の皿 N 大は、体部の立ち上がりが平底から角的様相を呈して強いものとなっている。体部上端から口縁部、外面の回しナデも 1 段凹化し、端部は外側が内傾的な面となる三角形状を呈しており、Ⅵ期的形態へと変化を遂げており、大きさ等も踏まえるとⅥ古に属すると言え 12 世紀後葉頃に位置付けておきたい。先の皿 N 小もⅤ期的形態を残すが、この皿 N 大と共伴してもいい範囲のものと考えている。土抗 S155 からは他に、須恵器鉢、少し古相の華南産白磁碗や、瓦類等も出土している。

第 26 図は遺構 S75 から出土した中国同安窯産の青磁碗である。口径 15.7cm ほどを測る通有品である。共伴出土している須恵器鉢や輸入白磁碗、大和産の土師器羽釜、楠葉産の瓦器等も含めて、Ⅴ期新最新からⅥ期古くらいの幅には収まるものが主体で、この遺構の年代は 12 世紀後葉の平安時代最末期から鎌倉時代初頭頃に比定しておく。

第27図は井戸S134から、まとまって出土したものである。1はコースター型の土師器皿であり、体部径 9.4㎝を測る。2 ～ 5 は土師器皿 N 小であり、口径 8.5㎝台～ 9.0cm 台のものが主体、6・7 は土師器皿 N 大であり、口径は 14.0cm 台～ 14.5㎝台が主体的である。両方ともに三角端部で 1 段凹ナデ化しており 12 世紀後葉のⅥ期古に位置付けておく。8 は先の京域主流派とは異なる



第 27 図　土器・陶磁器類実測図 9（井戸 S134 出土）

楠葉産の土師器皿である。口径は 15.0cm を測り、技法痕跡的には 1 段ナデであるが、口縁ナデの下端となる体部中位あたりの器壁が若干厚めで、そこから口縁端部にかけては尖り気味に収めている。このあたりの細長めの三角形状の形態は特徴的である。大阪府枚方市、京都府八幡市、乙訓郡あたりの「男山文化圏」[1] で平安時代から中世に主体を成す形式である。土師器皿 N 大・小と同時間帯で共伴するものであり京域主流派との比較検討のできるよい資料である。

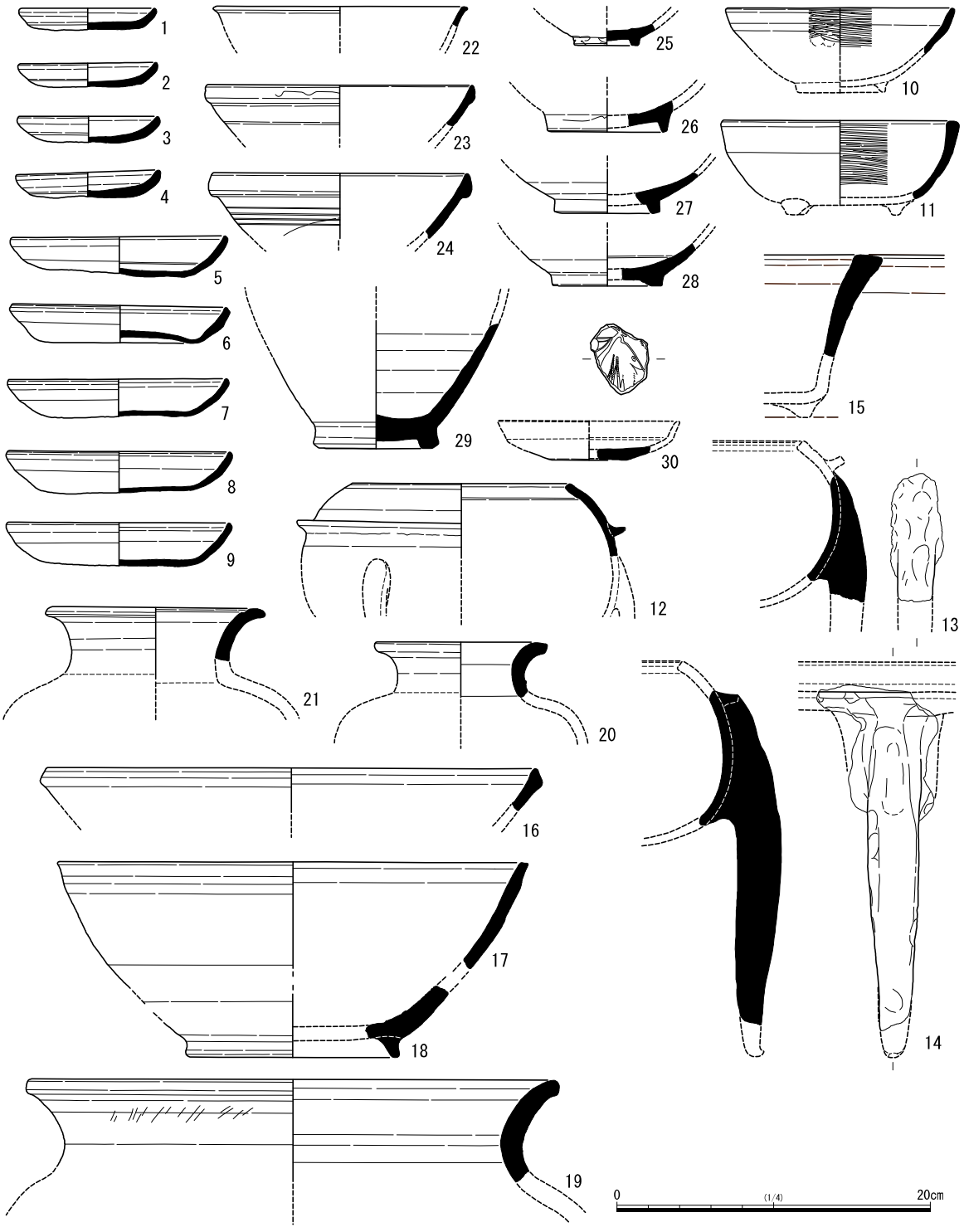
9 は白色土器高坏の脚部である。胎土は白色で脚部のヘラによる面取りは不明瞭化している。10 ～ 12 は瓦器盤であり、3 点とも楠葉産の低い三足の付くものであろう。10 は口径 37.8cm、器高推定 10.2cm ほど、11 は口径 43cm、器高は推定 10.7cm ほど、12 は口径 53cm、器高は 11.7cm ほどを測り、10・11 は中型品、12 は大型品と見ている。底部から体部の立ち上がりは湾曲的で盤としては土師器の時代以来の古相を残す。11・12 は口径端部は少し凹むが端面化しており、体部の開きが少し大きくなり体部大半が少し華奢化しているなど、10 よりは新相を呈するものと言える。新～古の様相差は今のところ工房差と理解している。瓦器盤は口径は大きいが体部の器高は 10cm 前後の浅い鉢状の器形であり、灰をひいて炭火などを使う浅い炉的火床である。単なる暖房器具として使われていたであろうが、調理用のコンロ的利用や火熱を使う生産現場で使われる移動可能炉であったとも見ている。12 世紀末から 13、14 世紀には洛中でも多く出土するが、14 世紀後半以降には大和産の火鉢に負けて京都市場からは消えていく。

13 は口縁端部が小さいが、内傾する外面の上下端が少し発達し小さな三角形状を呈するものとなっている須恵器鉢の口縁部であり口径は 28.0cm を測る。12 世紀後半代の東播系の須恵器鉢と見ている。14 は須恵器甕の口縁部片で、口径 32.0㎝ほどを測り、中形のように見られる。口縁端部は口縁部の器壁に直行するように切り揃えた上で内傾する端面を持った角的形態にナデ仕上げしている。11 世紀以前に遡って位置付けられる可能性を残すが、伝世的使用期間がかなり長かった可能性も考えられる。白色土器高坏が埋没した廃絶時期（12 世紀後葉）は、土師器皿 N らと同期であったものと見ている。15 は焼き締め陶器で、26.0cm を測る平底の底部片である。大きく開く形状と胎土等から常滑産の大甕と見られる。白色土器高坏、瓦器盤、須恵器鉢・甕、常滑産大甕底部等は伝世使用期間を見込む必要はあるが、12 世紀後葉の内で鎌倉時代初頭の時間幅で見ておきたい。

第 28 図は井戸 S153 からまとまって出土したものである。1 ～ 4 は土師器皿 N 小で､口径 8.5cm 台～ 9.0cm 台のものが主体である。5 ～ 9 は土師器皿 N 大で口径 14.0cm 台のものが中心である。両者ともに 1 段ナデ化を含めてⅥ期的定形化が進んだもので、Ⅵ期古に属すると見られる。10 は瓦器埦であり、外面に少しヘラミガキを残す。11 は瓦器の小盤である。内面は丁寧な横方向のヘラミガキ、外面も器表感からはヘラミガキと見てよいが、単位が不明瞭となっている。12 は三足の付く瓦器羽釜で、13・14 はその脚部の破片である。15 は体部の立ち上がりが少し強くなっていると思われる瓦器盤である。土師器と瓦器は共にⅥ期古型式に収まっていいものが主体であり、12 世紀後葉頃に位置付けておく。16 は口縁端部の三角形的形態の発達はまだ小さいが、形態的特徴や胎土等から東播系の須恵器鉢と言える。口径は 32.0cm ほどを測る通有品である。

17 は須恵器鉢で口径は 30.0㎝を測る。接点がなく同一個体にはできないが、18 も同様の須恵器鉢の底部である。18 は貼り付け高台を有しており、17 とともに東海産の製品と見ていいだろう。19 は頸部から口縁部がごく短く委縮した須恵器甕である。東播以西の瀬戸内海東半部地域(備前、播磨、讃岐等）の生産品であろうと見ている。

20・21 は大きさに差が若干あるが国産の焼き締め陶器壺の破片である。どちらも頸部から口



第 28 図　土器・陶磁器類実測図 10（井戸 S153 出土）

縁部までしかないが、茶褐色に自然釉の淡緑色の灰釉など常滑産の特徴が見て取れる。破片では常滑産の大甕の破片も見られる。

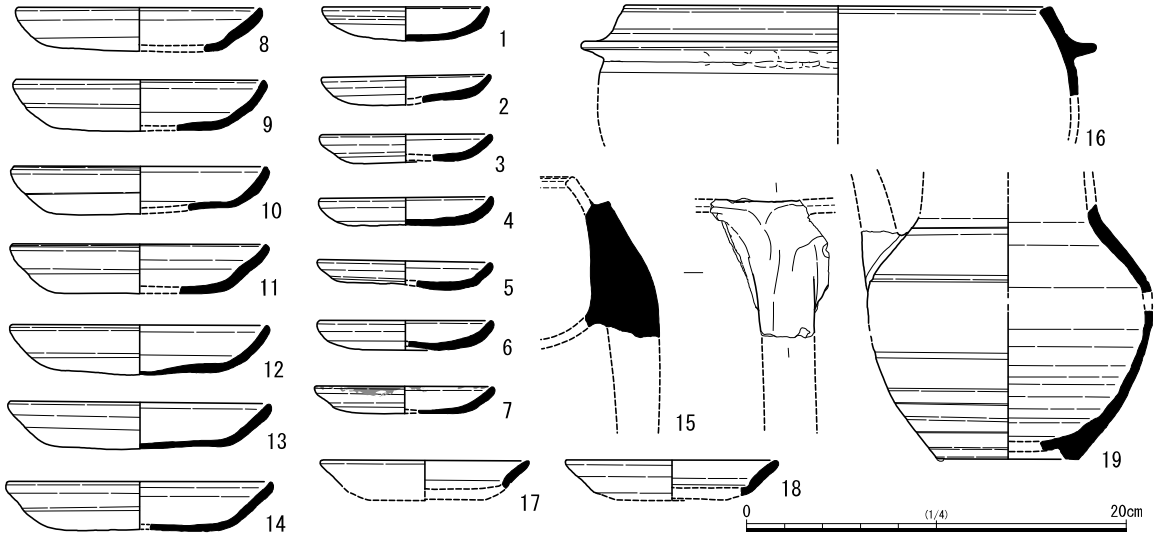
22 ～ 30 は中国からの輸入磁器類である。22 ～ 29 は、いわゆる華南産の白磁碗と四耳壺と見られる壺である。碗類は口縁・高台ともに変化があるが 11 世紀から 12 世紀の平安時代後期の幅には収まるものである。四耳壺も高台等からは 11 世紀から 12 世紀のものと見てよいだろう。30 は同安窯系の青磁皿である。しかし青磁は少なく、まだ白磁が主体を成している。

須恵器、国産焼き締め陶器、輸入青磁皿などは、土師器食器類や瓦器類と同時期の共伴遺物と見てよく、同じ 12 世紀後葉頃の時間帯に比定しておく。なお白磁類はかなり長い伝世使用期間を見込んでおく。

第 29 図は井戸 S139 から出土している遺物である。

1 ～ 7 は土師器皿 N 小で、口径 8.5cm 台～ 9.5cm 台が主体、8 ～ 14 は土師器皿 N 大で口径 14.0cm 台を少数含むが口径 13.0cm 台～ 13.5cm 台が中心である。皿 N 大・小とも、井戸 S153 の出土品等に比べると、皿 N 小では分かりにくいが、皿 N 大では小型化と、華奢化が進んでいる事がよく分かる。白色系 S が共伴出土していてもいいと思われるが､ここでは見られなかった。15 は三足の付く瓦器羽釜であり、16 も三足の付く羽釜と見てよいだろう。17・18 は中国同安窯の青磁皿であり、19 も同安窯の鉄釉水注で、注ぎ口の反対側に把手が付くものであろう。

輸入陶磁器が若干古い時期からの伝世使用品的な感じはあるが、土師器皿、瓦器羽釜については、Ⅵ期中（～新古）に属すると見てよいだろう。



第 29 図　土器・陶磁器類実測図 11（井戸 S139 出土）

第 30 図に掲載した土器陶磁器類と滑石羽釜は土坑 S146 からまとまって出土した遺物である。

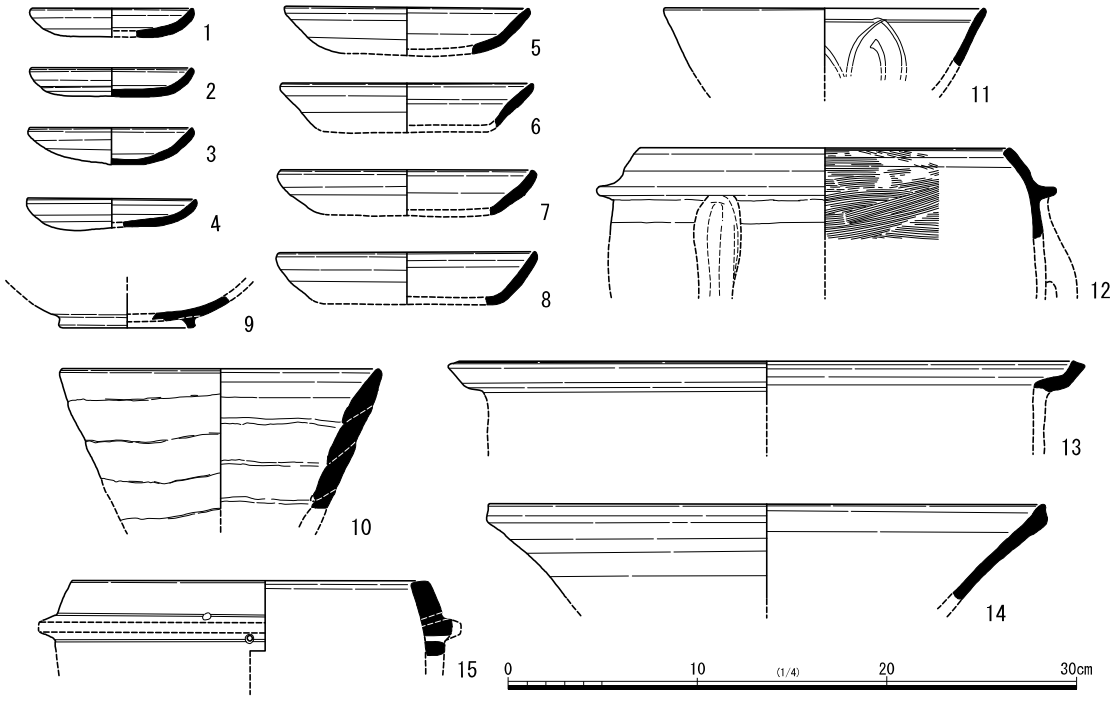
1 ～ 8 は土師器皿類であり､すべて京域主流派に属している。1 ～ 4 は赤褐色系の皿 N 小であり、口径 8.5㎝台を中心に 9.0㎝を少し超える程度に分布する。5 ～ 8 は同じ赤褐色系の皿 N 大であり、口径 13.0㎝～ 13.5㎝のものが主体である。N 大小とも手づくね土師皿である。体部下部から底部外面はオサエ痕で、体部上位から口縁部および内面全体はナデにより仕上げている。内面等に

ハケ目痕を残すものは、ほとんど見られなくなっている。形態的には平底から体部が強めに立ち上がり、少し反り気味に開き、体部上半から口縁部外面はいわゆる一段凹のナデ痕跡が特徴的である。口縁部は内傾する少し凹気味の端面を持ち、少し丸味を持った三角形状を呈する。製作技法やその技法痕跡および全形等の形式要素はⅥ期的定形化を遂げており、法量分布を含めてⅥ期中から新古ぐらいの幅の内に収まるものと見ている。洛中のこの時期の土師器食器類には、白色系の土師器皿 S が少量ながら伴う例も多くなるが、この遺構では共伴していなかった。ほぼ同時代の遺構と見ている井戸 S139 でも共伴出土していない状況からは、七条町では白色系の土師器皿 S 関係の出現が若干遅れるのだろうか、結論は資料増加を待ちたい。

9 は高台が付く土師器埦の底部片である。高台は貼り付け成形で、径 7.2㎝を測るやや大振りの埦である。産地は岡山県から以西の山陽中から西部域のいずれかであり、年代は 12 世紀後半から 13 世紀初め頃に比定できると見ている。

10 は土師器の鉢であり、体部は厚めで逆八の字状に開き、内外面に粘土紐接合痕跡を明瞭に残すなど特徴的である。体部がもう少し立つものや、器高の低いもの、また底部に三足を付けるものと付けないものなど変化はかなりある。粘土は細かく良質であるが、粘土紐の継ぎ目を残すなど一見では仕上げが雑に見える点などから、「製塩土器風の鉢」と通称している。12 世紀から 15 世紀初頃までは洛中や鴨東の諸遺跡からの出土例も少なくない。しかし焼き塩等が付着する資料は見つかっておらず、製塩土器との判断は難しく、現状では用途不明な器物のひとつである。

11 は中国南宋からの輸入青磁碗である。内面に劃花文を持ち、口径は 17.0㎝ほどを測る。当時の龍泉窯で大量生産された青磁碗である。日本へは 12 世紀後半頃から 13 世紀前半頃に、かなり数多く輸入されており洛中に限らず博多や鎌倉などの諸遺跡からもよく出土している。



第 30 図　土器・陶磁器類実測図 12（土抗 S146 出土）

12 は三足が付く金属器に見られる鼎形の瓦器羽釜である。内傾する口縁部とそのすぐ下部に短い鍔（羽根）が付くなど、体部も特徴的な形態を呈する。内面はハケ目調整で、外面はオサエ痕で仕上げる。13 は瓦器鍋で、受け部はかなり幅広く、立ち上がりもしっかりとしている。金属製の鍋の全形と口縁形状を模倣して生産を開始した初期段階の製品と言える。羽釜・鍋ともに楠葉産の瓦器であるが、出現は、羽釜が少し先行し 12 世紀の内で、鍋は少し遅れて 13 世紀に入ってすぐ頃からと見える。しかし本来的には、ほぼ同時代から始まる金属器模倣の新製品だろう。

14 は東播磨産の片口が付く須恵器鉢である。体部から口縁部は外上方へ大きく広く通有の形態を呈する。器壁は薄手感を残し、口縁部の発達も小さくて端面の幅も狭く、断面形は小さな三角形状にとどまっている。12 世紀末から 13 世紀初め前後の搬入品である。

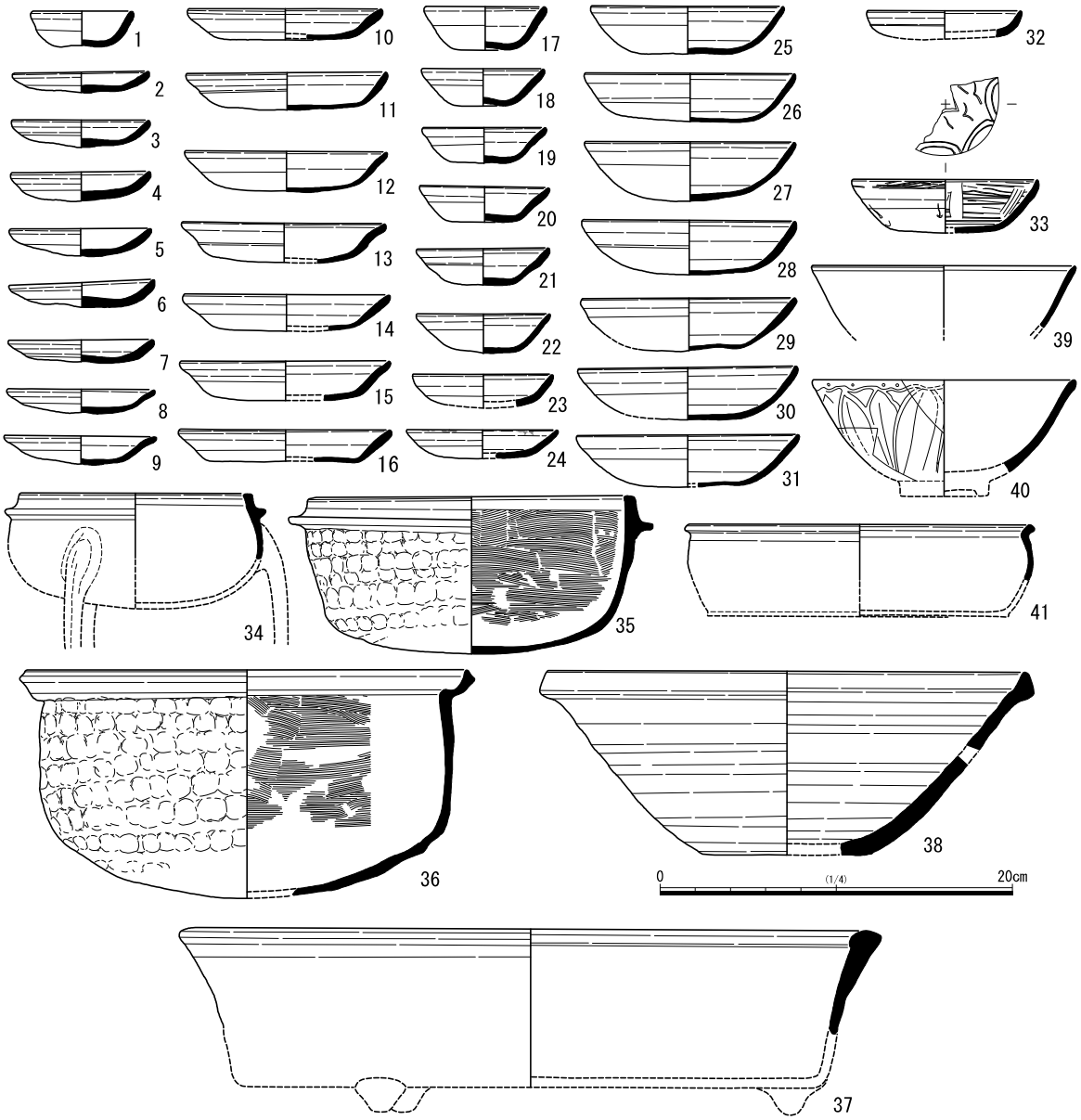
15 は口縁部直下の外面に断面が台形を呈する突帯状の鍔が付く、滑石製の羽釜である。金属の道具による削り出しで作られている。長崎県で量産されていた滑石製の鍋であり、平安時代後期から鎌倉時代に京都へもたくさん搬入されている。

上述してきた土師器皿類を中心とした、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、滑石羽釜は型式的にも若干の前後はあっても鎌倉時代前期の 12 世紀末期から 13 世紀前葉頃には生活用具として使用されていたものが一括的に廃棄された遺物と見ている。

第 31 図は井戸 S151 から出土している遺物である。

1 は淡橙褐色の土師器皿であり口径は 5.9cm を測る。胎土、色調は皿 N 系であるが、少し深い器形面では、S 系統の形態を呈する。2 ～ 9 は土師器皿 N で 7.5cm 台～ 8.0cm 台が中心だが、若干数 8.5cm 台のものが見られる。10 ～ 16 は土師器皿 N 大であり、口径 11.5cm 台～ 12.0cm 台のものが主体である。形態的には皿 N 小は、やや大きめの口径だが、8・9 などは外方への反りが強くなっており、皿 N 大では、12・13・15 など、華奢化ゆえか体部に反りが入って来ており、形態的にも新相を示すものが入って来ている。17 ～ 22 は土師器皿 S 小かと見られ器高はやや深く、皿 N 大と同様に坏形的である。口径は 7.0cm 台～ 7.5cm 台が中心である。この中で 18・19・22 など底部が若干ながら押し上げているものに関しては、いわゆる「ヘソ皿」と通称されている皿 Sh の初現的な原型とも考えられるが、先行的に成立したものからの影響とも考えられるので結論は置く。いずれにしろ、ここでは明瞭な「ヘソ皿」は含まれていない。23・24 は胎土が白色（S）系だが、形態的には皿 N 小によく類似している。鎌倉時代前半代頃（Ⅵ期古～中頃）には同様に形態的には大・小ともに N 系であるが胎土は白色（S）化しているものに通じるものであり、皿 NS としておく。皿 N と皿 S は基本形態は異に 7 するが、同一の生産者によって作り分けられているものである可能性を示す資料である。25 は口径 11.0cm ほどで相対的には、皿 S 中かもしれないが、ここでは皿 S 大 1 としておく。26 ～ 31 は皿 S 大 2 と見ており、口径は 12.0cm 台と 12.5cm 台を中心とする。土師器食器類は全体的にも型式的まとまりは良く、Ⅶ古の新しい方からⅦ中に収まるが、中側にウェートが大きいとも見ている。

32 の瓦器皿は土師器皿 N 小に近似し、暗文の付く輪花坏形の 33 は、口径 10.6cm を測る。全形、器壁の薄作りの点ともに土師器皿 S によく類似している。両方ともに楠葉産と見られ、時期的に



第 31 図　土器・陶磁器類実測図 13（井戸 S151 出土）

は土師器と同型式に属すると見ている。34 の瓦器の三足が付くだろう羽釜や、35 の体部直立型で脚は付かないだろう瓦器羽釜、36 の口縁部の立ち上がりは、まだしっかりしているが、受け部が委縮化している瓦器鍋は楠葉産であり、土師器食器類と同型式に属するものと見てよいだろう。

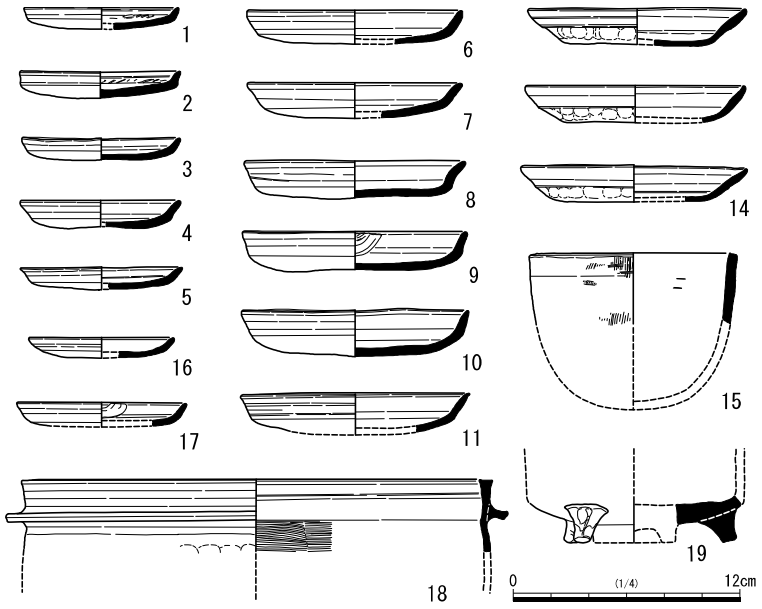
37 は低い三足が付くだろう瓦器の盤である。口径は 40cm 弱ほどであり、残高は 5.9cm ほどで推定器高は 10.5cm、大の普及品的大きさと見ている。口径部上端面が少し広くなり、内外両面が丸味をもって把厚しているなど口縁部の型式変化進んでいる。口縁部の形態的特徴等からも楠葉産でよいだろう。瓦器盤の用途は暖をとる火鉢や床で行う料理用の火床となる移動炉あるいは生産現場で火熱を用いるための火床などである。瓦器の盤あるいは火鉢は七条を含む洛中では次型式のⅦ期新段階の途中頃には楠葉産主体から奈良産主体へと大きく変化し、以降楠葉産瓦器盤は激減する。当調査地での出土状況の変化もその見方を追認するものである。

38 は東播系の須恵器鉢である。口縁部の三角玉縁は発達的型式変化がかなり進んでいるが、土師器皿他、瓦器類との共存に大きな齟齬はないだろう。

39 ～ 41 は中国からの輸入陶磁器であり、39 は口禿の白磁碗、40 は太めの縞蓮弁文を持つ龍泉窯産の青磁碗、41 は角縁口縁風の浅い小振りの褐釉の鉢である。40 の青磁碗や 41 の褐釉盤など少し古相を持つとも言えるが、土師器食器類などと大きな時間差はないだろう。輸入陶磁器類は他に、古手混入品の華南産の白磁碗や同安・龍泉窯の青磁碗・皿等も出土している。全体的にも、13 世紀末期から 14 世紀前葉頃の鎌倉時代末期頃を中心に理解していいと考えている。

第 32 図に掲載した遺物は井戸 S138 から出土した遺物である。この遺構からは、平安時代から鎌倉時代に位置付けられる土師器や瓦器の埦皿類、中国からの輸入品である白磁の碗皿壺、少量だが瓦類などの古手の混入品も出土している。しかし他に、遺構の年代推定の根拠となる新しい時代に位置付けられる土器･陶磁器類もまとまって出土している。これらには土師器、須恵器、瓦器、焼き締め陶器、輸入陶磁器類など各種の遺物が見られる。ここではそれらを中心に実測図を示している。注目すべきは、土師器皿類の中心が「男山文化圏」で主体をなす楠葉産である点である。逆に洛中では、ほとんどの土器群で圧倒的に主体を占めている京域主流派の土師器皿が少ない。以下では図示したものの個々の説明を加えて年代を記す。

1 ～ 14 は土師器皿である。1 ～ 5 は男山文化圏ローカル N(以下､OMLN とする)の小で口径 8.0 ㎝～ 8.5㎝台、6 ～ 11 は OMLN の大であり 11.5㎝台を中心に 11.0㎝～ 12.0㎝台に分布し型式的まとまりはよい。12 ～ 14 は京域主流派に属する赤褐色系の皿 N 大であり、大きさは口径 11.5 ㎝台が中心で 12.0㎝を超えるものは少ない。形態は、体部下半のオサエによる外反が少し目に付くようになっており、体部中位が少し厚めで、そこから上位の口縁部まで外反気味に細くなり、口縁端部は上方へ内湾気味に収め、内上端に半丸的な小肥厚が生じている。京都のⅧ的形態への型式変化の方向性が読み取れる。しかし立ち上がり部内面が、強く凹む圏線状を呈していない。この点はⅧ期に入っていないと考える理由の一つである。OMLN 大小の製作技法は、主にオサエとナデ痕跡を残して仕上げをするいわゆる e 手法であり、京域主流派と基本的には、ほぼ共通したものである。両者の結果形態は、生産集団の違いが生み出す地域差と言えるものである。OMLN の土師器は、大小ともに体部の立ち上がりが強く、オサエからナデへの変換点が立ち上りに近い下部に位置す



第 32 図　土器・陶磁器類実測図 14（井戸 S138 出土）

る。断面では、その付近が厚めで上方から口縁にかけて徐々に薄くなりながら口縁端部は尖り気味に収めている。京域主流派のNとの差異は、断面形態によって認識可能である。OMLNの小は楠葉産の瓦器皿と形式特徴が共通している。

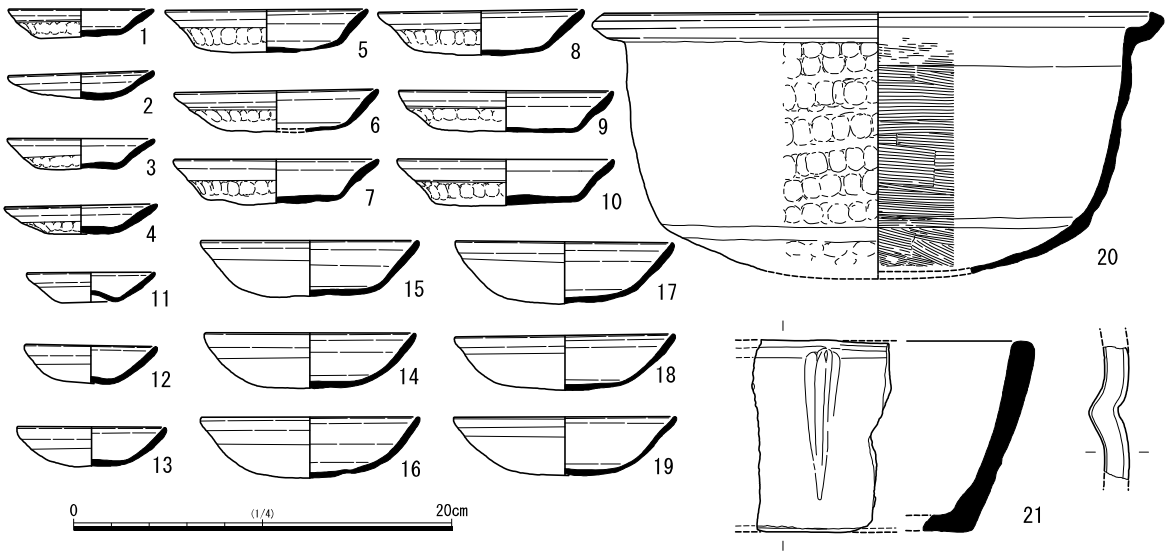
この遺構から出土するOMLNの土師器皿大小は、八幡市の上津屋遺跡の遺構SX377出土例に近似しているが[2)]、法量等の小型化がもう少し進んでおり、全形も少し華奢となった印象が強い。SX377の年代は、13世紀後葉から14世紀前葉に位置すると推定されているので、井戸S138のOMLNは14世紀中頃前後の年代と考えられる。京域主流派に属する土師器皿Nは、その型式特徴からは、京都Ⅶ期新からⅧ期古の幅の内に位置すると見ているが、Ⅶ期新側にウェートがありⅦ期新の推定年代は14世紀中葉を中心とする。OMLNと京域主流派の推定年代に大きな齟齬はなく、両者ともに室町時代初頭頃の14世紀中葉頃に位置すると見ている。なお男山文化圏の土師器、瓦器食器類と京域主流派の土師器皿等の食器類の比較検討と年代調整はもっと広い地域全体で行う努力が必要であり、微細な年代調整は今後の課題である。

15は土師器の丸底小鉢片であり、他にも多数出土している。内面は平滑であり、外面にはハケ目痕が残る手づくね形成で底部を丸底に仕上げている。洛中の調査では14世紀の中頃前後以降から17世紀初頭の桃山時代頃までは洛中での出土例が少なくなく、七条町でも既出土例も多い。天地を逆にして蓋状に使用する、油煙（スス）を取る道具の可能性があるが、それが正しければ名称、図の天地ともに変えなければならないが一旦はこのままで報告しておく[3)]。

16・17は楠葉産の瓦器皿である。形態や技法痕跡等の型式的特徴は土師器皿OMLNに通じる。18は同じく楠葉産の瓦器羽釜である。鍔部に端面を残す様相等からは、OMLNの土師器皿類と共伴出土していて問題はないだろう。19は青白磁の三足付き香炉であるが、輪高台も付くものと見ている。中国の景徳鎮窯からの輸入品であろう。口径も小さめであり、香合わせ等に用いられるか、いわゆる線香立て的用途の香炉とも考えられる。共伴出土しているこれらの土器陶磁器類は、やや古相を読み取れるものを含めて、14世紀前半から14世紀中葉頃の幅の内で理解してよいと考えている。

第33図は墓と見ているS101から出土している。数多く定型品も多い土師器皿類と、ほぼ完形に復元できる瓦器鍋1点が主要遺物である。東海系の須恵器鉢や輪花火鉢等は、小片化した破片で出土しており、これら以外の土器・陶磁器類もあまり出土していない。このような事からは、土師器皿類は埋葬儀礼用品であり、墓に埋葬されたもので、瓦器鍋は蔵骨器の可能性も考えられる。

1～19は土師器皿類である。1～4は皿N小で口径7.5cm台が中心であり、8.0cm台が続く。5～10は皿N大であり、10.5cm台～11.0cm台が中心である。11は皿Shで口径6.8cmを測る。底部の底上げは、指の腹で押し上げており、上り方がゆるい。12・13は皿S小であり、12は口径7.0cm、13は口径7.9cmを測る。14～19は皿S大であり、口径11.0cm台～11.5cm台が中心である。土師器皿Nは小大ともに小型化と全体の華奢化が進んでおり、形態変化も進んでいる。皿N大でみると5・6・9のように体部下半がオサエで外反気味で、体部中位付近の上半のナデ



第 33 図　土器・陶磁器類実測図 15（墓 S101 出土）

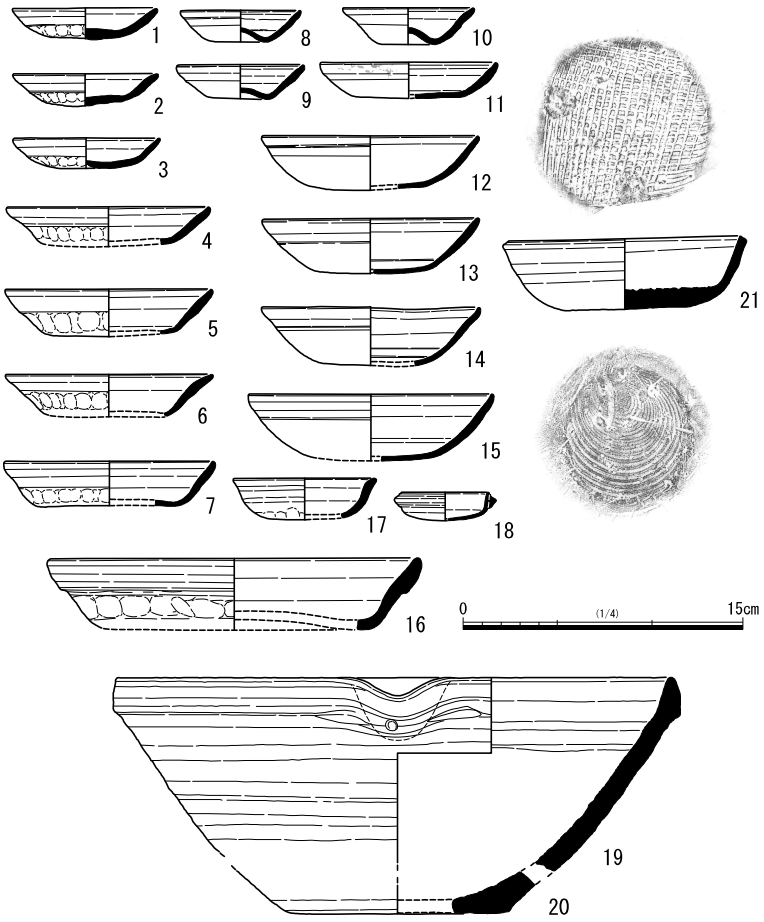
下端あたりの器壁が少し厚くなる。そこから上位の体部上辺から口縁部は回しナデにより少し尖り気味に端部だけを少し上方へ向けて収める、かなり特徴的な断面形状を呈する。これら 5・6・9 が新相的ながら、主体相を占めるようになっている。逆に 7 ～ 9 などは基本をほとんど共有しているが、口縁端部に厚みを残す中では古相が残るものと見える。皿 N 小は体部から口縁部に幅がなく形態的特徴は大よりも判りにくいが、同様の理解が可能であるが、古相と主体相が同一個体中に共存するように見えるものが多いと見える。皿 Sh を含む S 系は、全体に薄手化が進んでおり、全形が底部の広い坏形から、底部が小さい方へ変化して、そこから体部が大きく開く埦形が主体へと変化している。土師器皿類は N 系、S 系ともにⅧ期的形態へと変化が進んでおり、ほぼ定形化領域まで達していると見ている。しかし残る古相のものの理解によるのだが、Ⅶ期新（の中・新あたり）からⅧ期古の幅で見ておき、Ⅷ期古側にウェートがある資料との見方を取っておく。

20 は瓦器の鍋であり、口径 30.2cm ほどを測る。口縁部から受け部の立ち上がりは若干委縮している、楠葉産である。21 は瓦器の火鉢であり、口縁部を輪花状に仕上げた大和産である。Ⅶ期新の新以降の共伴と見るのが妥当と考えている。

第 34 図に示した遺物は、土器溜 S103 から出土した土器･陶磁器類である。S103 からは、皿 N･S を主体とした京域主流派に属する多数の土師器皿類他に、須恵器鉢・甕、常滑産の甕類片、瀬戸美濃産の灰釉オロシ目皿、中国龍泉窯産の連弁青磁碗、砥石片、鉄釘など各種のものが数多く出土している。その中から遺構の年代特定に必要な新相の一群を図示しておいた。

1 ～ 16 は土師器皿であり、京域主流派に属する。1 ～ 3 は赤褐色系の土師器皿 N 小で、大きさは口径 7.5㎝台、4 ～ 7 は土師器皿 N 大で、口径 10.8㎝以上で 11.0㎝台を中心としている。N 大小ともに全形はⅧ期的形態と見ている。8 ～ 15 は白色系の皿 Sh と S であり、全体的に作りも丁寧で薄手化が進んでおり、きれいな白土器 (かわらけ) である。8 ～ 10 は、「ヘソ皿」と通称されている皿 Sh で、口径 6.4㎝～ 7.0㎝の幅の内にある。11 は形態的には N の系統であるが、

胎土の色調は白色系であり皿NSとしており、口径8.4㎝を測る。12～14はS大1であり、口径は11.5㎝台を中心とする。底部径は縮小傾向を読み取れ、全形の椀形化が進んでいる。体部内面下端近くに細い凸状圏線が認められるものも含まれている。15は形態的特徴がS大1とほぼ共通し、単純に大きくしたS大2である。16は形態と色調から赤褐色系のNに通じる大皿である。皿N大1から一寸刻みであれば皿N大5ほどとなる大きさで、底部が上げ底とされている点が注目される。類品は賀茂御祖神社（下鴨神社）境内[4]、京都大学構内遺跡や京都御苑内の和風迎賓館建設に先立つ既発掘調査で出土例が確認出来る[5]。また下鴨神社で神饌に使用する土師器皿＝かわらけ皿の伝使用記録の図[6]にも大型の上げ底皿がみられ、「大やつかさ」と記されている。ちなみに皿Shに通じる小さい上げ底皿は「小やつかさ」とされている。神饌での使用例では「大やつかさ」には鯛や鯉などの大型の魚が盛られており、鮮魚の腹が沈むのを防ぐ上げ底かとも思われる。



第34図　土器・陶磁器類実測図16（土器溜S103出土）

17・18は小型の土師器であり、表面がきれいで丁寧な仕上げが共通する。17は小浅鉢か小浅坏と見られ、18はより小型の浅い羽釜形である。両者ともももう少し大きいものまで各種あり、細部の変化形も多く、既出土例がいくつも知られている。七条町関係でも既出土例も少なくない。

19・20は東播磨産の須恵器鉢であり、いわゆる「こね鉢」と通称されている擂り目を持たない鉢である。19・20は接合しないが胎土、焼き上がりの色調等は共通しており、同一個体か、同じ産地の同じ窯で焼かれたものと見ている。東播系の鉢類は平安時代後期頃以降、洛中への搬入が継続しており、洛中での生産や生活の道具として定着している。この鉢の口縁部は上方へやや長い三角形状によく発達しており、洛中への搬入がなくなる15世紀初頭頃のものにかなり近いが、一歩手前頃のものだろう。

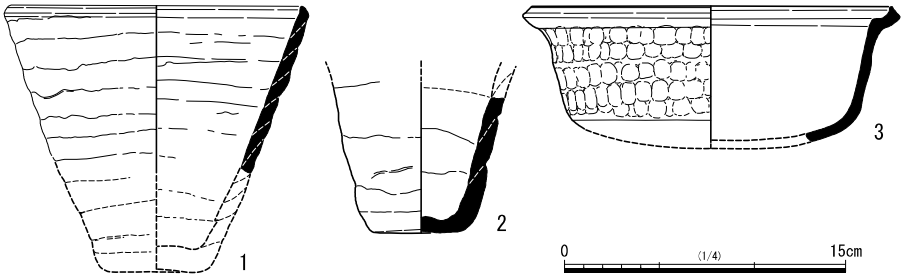
21は瀬戸美濃産の灰釉陶器オロシ目皿であり、口径は12.9㎝ほどを測る。底部内面見込みは平で格子状にオロシ目が刻まれている。底部は回転糸切り痕を残す平底である。手慣れた技術痕

を残す大量生産品であり、東国の諸遺跡をはじめ大消費市場である京でもこの頃から、たくさん出土するようになる。

土師器皿類の年代観に関しては、Ⅶ期新からⅧ期古の幅の内に位置し、その幅内ではⅧ期古側にウェートがあると見ており、14 世紀後葉頃を中心に位置付けておく。他の共伴遺物は、14 世紀後半から後葉頃の室町時代前期（前半）頃のものと見ている。

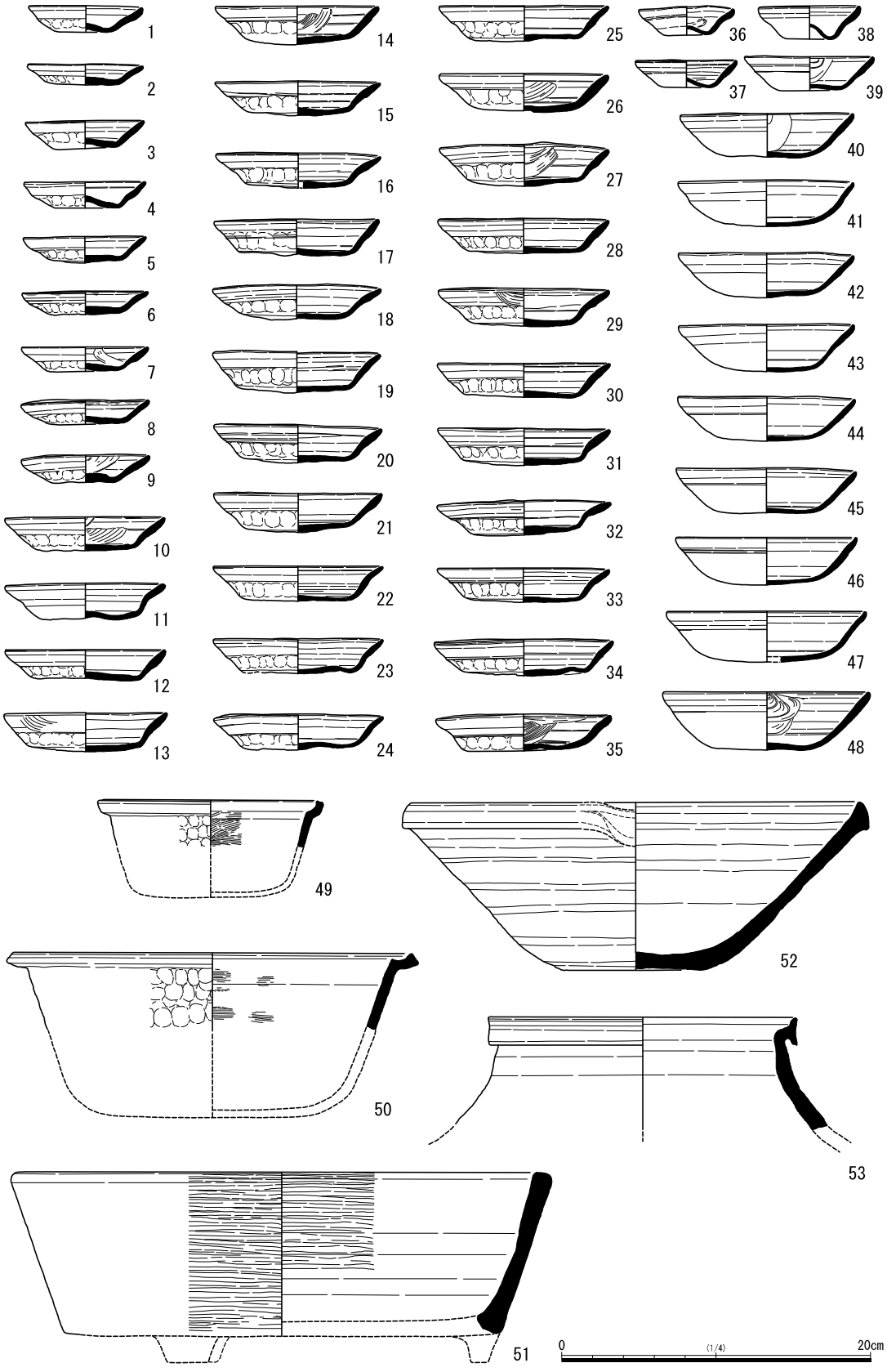
第 35 図は墓 S81 から出土している土器である。1・2 は土師器・製塩土器風の鉢で、3 は瓦器鍋である。共伴出土している土師器皿 N と皿 S はⅧ期古から中に少しかかる型式の時間幅をもっているが中心は古側にあり、14 世紀後葉（～ 15 世紀初）頃に位置付けてよいだろう。

墓 S71 からは、型式的にまとまりのある皿 N・S を中心とした多数の土師器皿類の他、少数ずつではあるが、土師器製塩土器風鉢・丸底小鉢・ミニチュア羽釜、須恵器鉢・甕、瓦器鍋・羽釜・火鉢類、焼き締め陶器壺・甕類、中国の白磁口禿碗など各種の遺物が出土している。



第 35 図　土器・陶磁器類実測図 17（墓 S81 出土）

第 36 図の 1 ～ 48 は土師器皿類であり、京域主流派に属するものが大半を占めている。1 ～ 9 は赤褐色系の皿 N 小で口径 7.5㎝台～ 8.0㎝台が主体で平底を主とするが、3・4 のようにゆるい上げ底状のものも少数見られる。10 ～ 35 は同皿 N 大で口径 10.0㎝台が少量あり、10.5㎝台～ 11.0㎝台前半あたりが量的中心を成し、口径 11.5㎝台は極く少数にとどまる。形態や技法の点では、底部の周縁部となる立ち上がり部が薄くなって凹み、凹線状を呈するものも少なくない。体部下半のオサエによる外反も定形化しており、体部上半は上方へ薄くなりつつ端部をやや内湾気味に収めるなど、Ⅶ期新へつながる古い様相を残すものもあるが、全体としてはⅧ期古的に定型化したものが主体となっている。36 ～ 38 は白色系のいわゆる「ヘソ皿」と通称される皿 Sh であり、口径 6.5㎝台のものが一定量見られる。39 ～ 48 は白色系の皿 S である。39 は皿 S 小で口径 8.4㎝を測る。40 ～ 46 は皿 S 大 1 であり、口径 10.5㎝台は少量にとどまり、口径 11.0㎝台～ 11.5㎝台が量的中心を占めている。47・48 は皿 S 大 2 であり 47 は 13.0㎝、48 は 13.5㎝を測る。皿 Sh を含む白色系の皿 S 類は、丁寧なつくりで薄手化がほぼ定着しており、底部も少し径が小さくなって体部から口縁部は開きが強く見え、全形の椀形化はほぼ達成されている。この遺構から出土する土師器皿類は、赤みを増したものも多い橙褐色系の皿 N 大小が量的には主体であり、白色系の皿 Sh と S の方がやや少ない印象である。土師器皿 N・S は両群ともにⅦ期新的な古相を残すものを含むが、先に記した墓 S101 から出土している土師器皿 N・S 類よりもⅧ期的形態



第 36 図　土器・陶磁器類実測図 18（墓 S71 出土）

へと変化をとげたものが多くなっている。S71 出土の土師器皿 N・S 類には、Ⅷ期中期的な新相方向のものも含まれているが、主体は 14 世紀後葉に位置付けているⅧ期古に属するものと考えている。

49･50 は瓦器の鍋である。49 は口径 14.6㎝の小型であり､50 は口径 26.6㎝ほどの中型である。口縁部の型式変化は、変化のありように工房差的な差異は見られるが、受け部を含む口縁部全体が萎縮化するという変化の方向性は共通している。製作技法も、体部内面をハケ目、外面はオサエ痕を残し、口縁部内外はナデによって仕上げており、基本的には共通している。胎土等も共通しており、両者ともに楠葉産である。瓦器鍋の口縁部外面下から体部外面にかけて使用痕としてのススが付着しており、日常生活用具であったようだ。51 は口径 35.0㎝ほどを測る、円形の輪花形の火鉢である。体部から口縁部の内外ともにヘラミガキを施した上で、炭素吸着させて器表を黒色に仕上げている。口縁形態や全形等の形式特徴からは、14 世紀後半頃以降京都においても急速に増加し、近世にまで出土が続く奈良産の火鉢と言える。

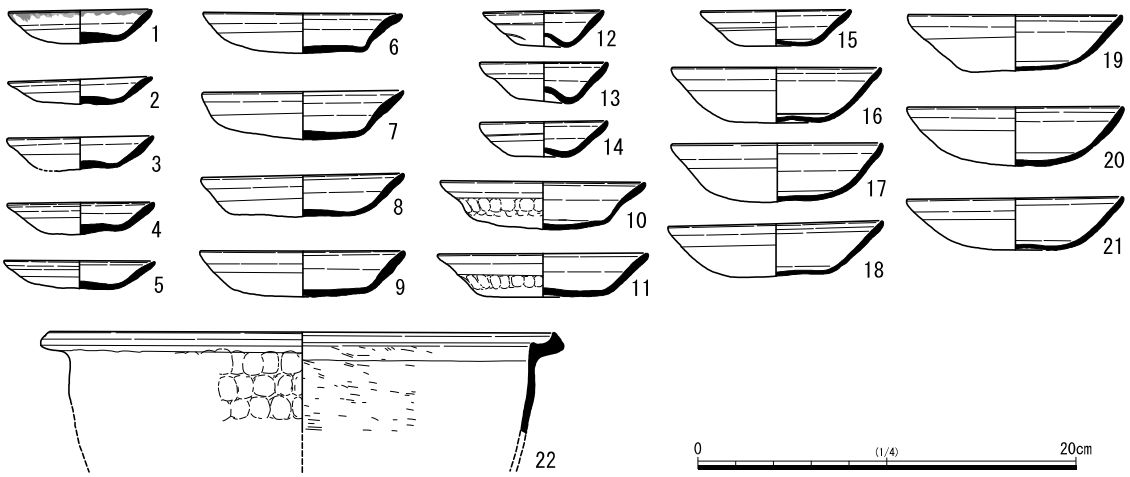
52 は東播磨産の片口が付くだろういわゆる「こね鉢」と通称されている須恵器の鉢である。擂り目は施されていないが体部内面中位付近から下部は、表面が荒れており擂りつぶし作業を行ったと見られる使用痕が残っている。他に伝世使用したと見られる、古相の東播系の鉢類や甕等も一定数出土している。53 は常滑産の口径 20.0㎝ほどを測る小振りの甕である。他に同産の壺や大甕になると見られる破片も多く出土している。この甕の口縁部縁帯の発達段階から、14 世紀前半頃に搬入されたものであり、一定期間の伝世的使用された後に廃棄されたものと見ている。

図示したもの以外に、輸入陶磁器片もかなり出土している。華南産の白磁碗や褐釉や鉄釉の壺類、龍泉窯の青磁碗など南宋から元時代の混入品や伝世使用品と見られる古手のものが主体を成している。しかし瓦器の鍋・釜・火鉢類等や新相の須恵器の鉢類などは、土師器皿類の推定年代である 14 世紀後葉と重なる 14 世紀後半代のものが中心である。

第 37 図は墓 S144 からまとまって出土した土師器皿類であり京域主流派に属するものが主体である。1 ～ 5 は土師器皿 N 小で口径 7.5cm 台のものが、6 ～ 11 は土師器皿 N 大であり 10.5cm 台のものが、それぞれ中心的である。12 ～ 14 は白色系の「ヘソ皿」土師器皿 Sh である。底部の押し上げの強いものが含まれるようになっている。15 は白色系の土師器皿 S の小である。16 ～ 21 は白色系の土師器皿 S の大 1 であり 11.0cm 台が中心である。白色系の土師器皿 Sh･S ともに、より薄手となり埦形化が進んでいる。皿 N 大小とも華奢となり、小型化が進んでおり、胎土の色調は赤褐色化したものが多くなっている。

土師器皿 N 及び皿 S ともにⅧ期的定形化を遂げておりⅧ期中的方向性が読み取れるものも少なくない。型式の位置はⅧ期古からⅧ期中ぐらいの幅の内にあり、実時間的には、Ⅷ期古の新しい方にウェートを置いて、14 世紀末前後と見ておく。

22 は瓦器の鍋であり、楠葉産である。口縁部の委縮からは、上述の土師器皿類と共伴している型式と見てよいだろう。



第 37 図　土器・陶磁器類実測図 19（墓 S144 出土）

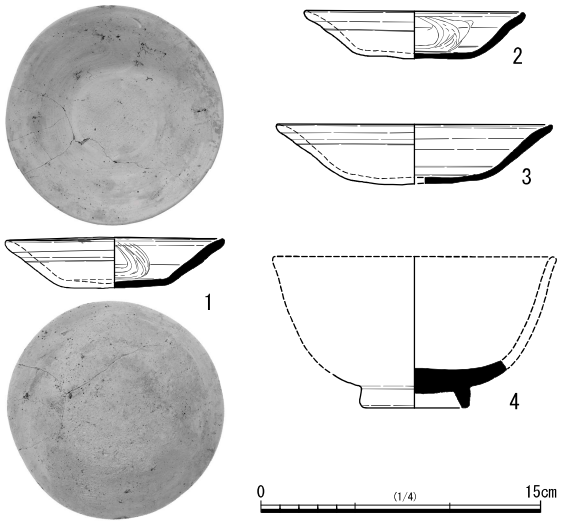
第 38 図に示した遺物は中世末期の包含層の土器集中部から出土しており、京域主流派に属する。これらの土師器 3 点はかなり残りのよい個体で、Ⅸ期の白色系の皿 S 大の全形や技法痕跡が良くわかる資料であり、1 には内外面の俯瞰写真も付けておいた。

1・2 は白色系の土師器皿 S 大 1 であり、1 は口径 11.6㎝、器高 2.6㎝、2 は口径 11.7㎝、器高 2.5㎝を測る。少し深さ感を残すが、浅い皿形への変化が始まっていることが読み取れる。体部から口縁部の幅は減じており、口縁部の外方への伸びやかさが失われつつあり、口縁部も萎縮化が始まっており、口縁部内端の浅い凹はより端面化が進んでいる。底部内面を一定方向にナデてから体部内面から口縁部の内外面をナデ仕上げする。口縁部外面から体部の内面のナデは体部を回してナデており、内外面ともに指ナデ（麻布等の道具を用いているだろう）が外上方へ抜け出ている痕跡が明瞭に残る。古代の小型の土師器食器等の左手（物を左手に乗せて、右手の指でナデを加える）技法である。京域主流派内では、中近世に下っても変化しない、体部から口縁部内外のナデ仕上げの基本技法である。体部内面の回しナデ痕跡の下端には、ドベ（水分の多い泥）により生じた凸状の圏線が付くが、その外縁はまだ強くは凹んでいない。体部から底部の外面は痕跡をあまり残さない丁寧なオサエで仕上げている。

3 は同じく白色系の土師器皿 S 大 3 と見ている。口径 14.6㎝、器高 3.1㎝を測る、少し大きい土師器皿である。色調が淡い橙色に戻っているが、器表面の仕上げも丁寧で、きれいな京都産の土師器皿との印象が強い。技法痕跡や形態的特徴は 1・2 とほぼ共通するが大きさゆえに口縁の伸びやかさ等の古相がよく残っている。これら 3 点の S 類土師器皿に関しては、型式特徴をよく共有しており、Ⅸ期に属するものであるが、型式特徴の変化の様態からはⅨ期後半のⅨ期中の新しい方からⅨ期新の古から中の幅の内に収まると見ている。型式要素は、次の第 39 図に掲載している井戸 S65 の土師器皿 S 類より、少し古い要素を持っている。年代的には 15 世紀後葉の古い方にウェートを置いて見ておく。

4 は中国明からの輸入青磁碗の底部である。高台は削り出しで、釉の垂れ込みがあるので判りにくいが高台外面から底部外面は露胎であり、赤褐色を呈している。高台径は 5.8㎝ほどを測り、

類品からの推測では口径 15.0㎝、器高 8.0㎝ほどの大きさの腰に丸みを持った碗になる。再開された日明貿易で搬入される明の龍泉窯産の一般的な青磁碗片のようである。釉調は、いわゆる天龍寺青磁より元末のものに近い少し古相を呈する。上述の土師器皿とは、同時代的に共伴してよいと見ている。



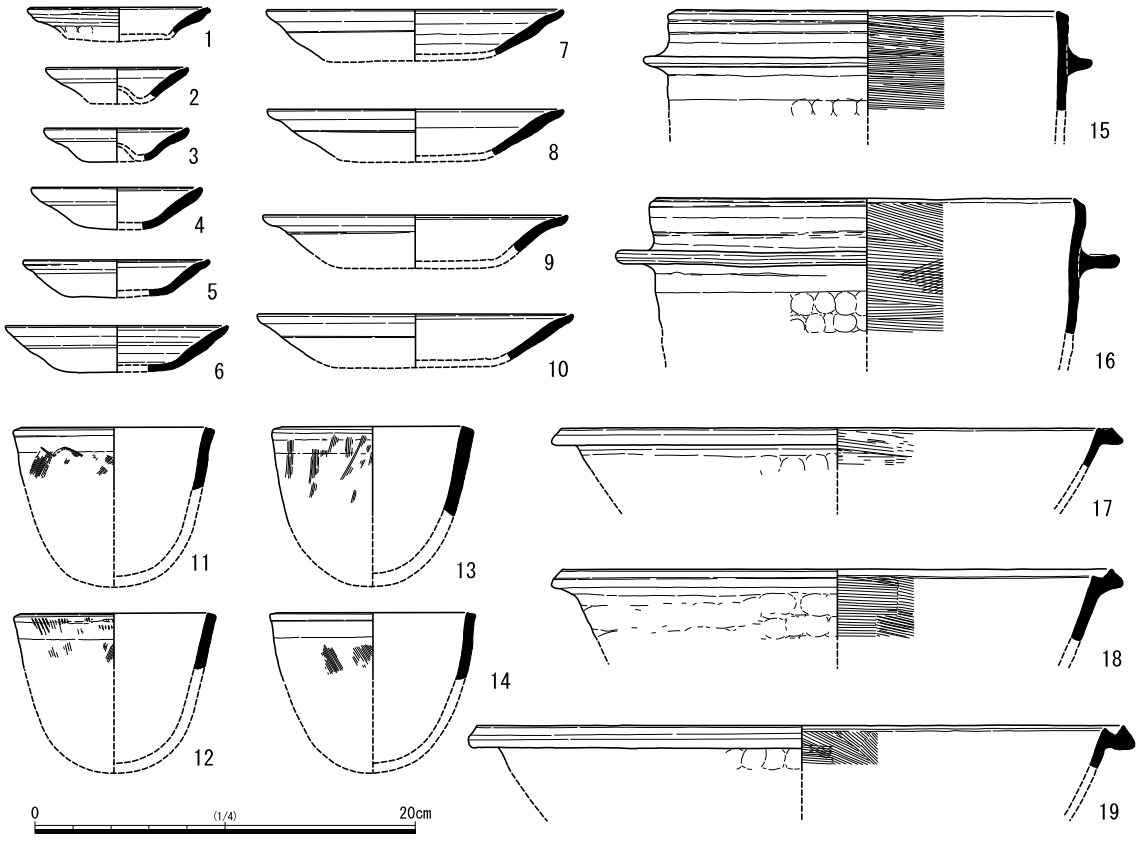
第 38 図　土器・陶磁器類実測図 20（包含層出土）

第 39・40 図に掲載した遺物は井戸 S65 内から出土したものである。この遺構からは、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代前半代頃の混入遺物も多数出土しているが、それらよりも新しい時期に比定出来るまとまった遺物もある程度の量が出土している。これらの新しい時期の遺物は井戸の廃絶期を知る上での重要な資料である。年代特定の根拠とした土師器や瓦器の主要なものは実測図（第 39 図）で、その他のものは写真（第 40 図）で示している。

第 39 図 1 ～ 10 は土師器皿類ですべて京域主流派に属する。1 は赤褐色系の皿Ｎ大で口径 9.6㎝を測る。これ以外この遺構からは皿Ｎは大小ともに出土が見られない。Ⅸ期の資料では、よくみられる組成構造である。2･3 は白色系の皿 Sh であり、2 は口径 7.1㎝、3 は 7.6㎝を測る。4･5 は同じく白色系の皿Ｓで 4 は口径 9.5㎝、5 は口径 9.8㎝を測り、4 は小になる可能性もあるが今のところＳの中でよいと見ている。6 も白色系であり口径 11.7㎝を測り皿Ｓ大 1 と見ている。同白色系の 7・8 は両者ともに口径 15.6㎝ほどを測る。同じ白色系の 9 は口径 16.0㎝、10 は口径 16.6㎝を測る。7 ～ 10 に関しては少しばらつき幅があるが、皿Ｓ大 3 に属すると見ておく。これら白色系の土師器皿Ｓは先の包含層出土のものに比べると若干ながら器高が低下し大皿の大 3 などでは口縁部の伸びやかさがやや減じているように見える。型式位置的にはⅨ期新からＸ期古に少しかかる幅内に収まるだろう。15 世紀末から 16 世紀最初期頃前後のものと見ておく。

11 ～ 14 は内面が平滑なことが特徴的な土師器の丸底小鉢である。体部外面にはハケ目痕が残る。大きさは口径 10.6㎝から 10.8㎝ほどを測り、推定器高は 8.5㎝前後である。年代は上述の土師器皿類と同時期のものと考えている。

15・16 は瓦器羽釜であり、内面はハケ目、口縁部から貼り付けの鍔部はナデ、体部外面はオサエによって仕上げている。15 のように鍔部の委縮し断面三角形状に近くなったものが新相を持っている。17 ～ 19 は瓦器鍋である。体部が大きく開くようになっており、受け部と立ち上がりが委縮化し、一体化した口縁形状を呈するものが主となっている。内面にハケ目、口縁部の内外面はナデ、体部外面はオサエ痕を残して仕上げている。器形は異なるが、製作技法は基本的には共通しており、同じ工房で同じ工人が作り分けていると見ても問題ないだろう。両者ともに楠葉産と見ている。16 の鍔部などに古相が残るが全体的には前述の土師器皿と共伴していていい



第 39 図　土器・陶磁器類実測図 21（井戸 S65 出土）

だろう。なお羽釜・鍋ともに外面にススを残す破片も多く、当時の日常的生活用具の一端を担っていた土製煮炊具であろう。

第 40 図 1 ～ 3 は瓦器の火鉢類である。1 は口縁部が内方へ折れ曲がり上面が平たい縁状を呈する、丸型の火鉢あるいは風炉であろう。口縁部から体部外面は丁寧にヘラミガキして、器表を黒色に仕上げている。2 は輪花になる可能性も残る丸形の火鉢である。内外面をヘラミガキし器表を黒色に仕上げている。3 は直立する体部から口縁部を持つ方形の火鉢である。外面は丁寧にヘラミガキを施し、その上から菊花文を付した後に器表を黒色としている。3 点ともに製作技法と仕上げ観は共通しており、大和の奈良産火鉢類である。類品は、洛中でもたくさん出土している。この型式のものは、上述の土師器皿類と共伴していてよいものだろう。

4 ～ 7 は瀬戸美濃産の施釉陶器である。4 は鉄釉天目茶垸、5 は灰釉のいわゆる平茶垸、6 は同じ灰釉の鉢、7 は灰釉のオロシ目皿である。天目茶垸は少し古相を持つが、他は瀬戸美濃において大窯が出現する前後頃の製品が中心のようである。土師器皿との年代観に大きな齟齬はない。

8 は備前産の焼き締め陶器甕の口縁片である。口縁端部を外方へ丸く肥厚させて形作る、備前甕の特徴ともなっている、いわゆる「玉縁口縁」の甕である。口径は 50.0㎝ほどと推定され、2 石以上の大甕になると見られる。生産年代は玉縁の発展水準から、15 世紀代の半ば頃前後と見られるもので、伝世的使用後に土師器などと共に廃棄された可能性が高い。

第 40 図　土器・陶磁器類写真 22（井戸 S65 出土）

第 41 図は石組遺構 S128 から出土した遺物である。平安時代中期後半以降から室町時代前半代頃の古手混入品は小片が主だが、出土量は多い。遺構の埋没年代等を知り得る最新相の土器陶磁器も一定量出土しているが、これらも小片のものが多いこともあり、写真で報告しておく。

1・2 は赤褐色系の土師器皿 N 小であり、1 は口径 6.9㎝、2 は口径 7.0㎝を測る。同系の 3・4 は土師器皿 N 大で、3 は口径 8.9㎝、4 は口径 9.6㎝を測る。5・6 は白色系の土師器皿 S 大で、5 は大 1 で口径 11.6㎝、6 は大 2 で口径 14.0㎝を測る。型式上の位置はⅨ期新あるいはⅩ期古の前半くらいの幅の内に収まると見える。実年代的には 15 世紀末頃から 16 世紀初め頃を中心に位置付けられるものが主なようだ。7 は土師器丸底小鉢の口縁片である。井戸 S65 から出土しているものの類品であり、上述の土師器皿と共伴して問題ないと考えている。

8 は瓦器の羽釜片であり、大きさは口径 30.0㎝ほどになる。鍔部の幅は少し短くなっていて先の丸い三角形状を呈するようになっており、洛中で出土する瓦器羽釜の内では最終期に近い様相を持つものとなっている。9 は瓦器鍋であり、大きさは口径 30㎝を少し超える程度である。羽釜・鍋ともに井戸 S65 からの出土品に類似したものが中心であり、体部から口縁部はかなり大

第 41 図　土器・陶磁器類写真 23（石組遺構 S128 出土）

きく開いており、全形的には浅く見えるものとなっている。口縁部は受け部と立ち上がり部が、それぞれ委縮し､湾曲形に一体化して外方へ張り出して収められている。両者とも楠葉産である。10 は瓦器の丸形火鉢の口縁片であり、体部から口縁部の内外はかなり丁寧にヘラミガキをしている。型式的特徴からは奈良産の火鉢と見られる。11 は瀬戸美濃産の灰釉陶器オロシメ皿であり、同地域に大窯が出現する前後、15 世紀後葉から 16 世紀初め頃の製品と見てよいだろう。

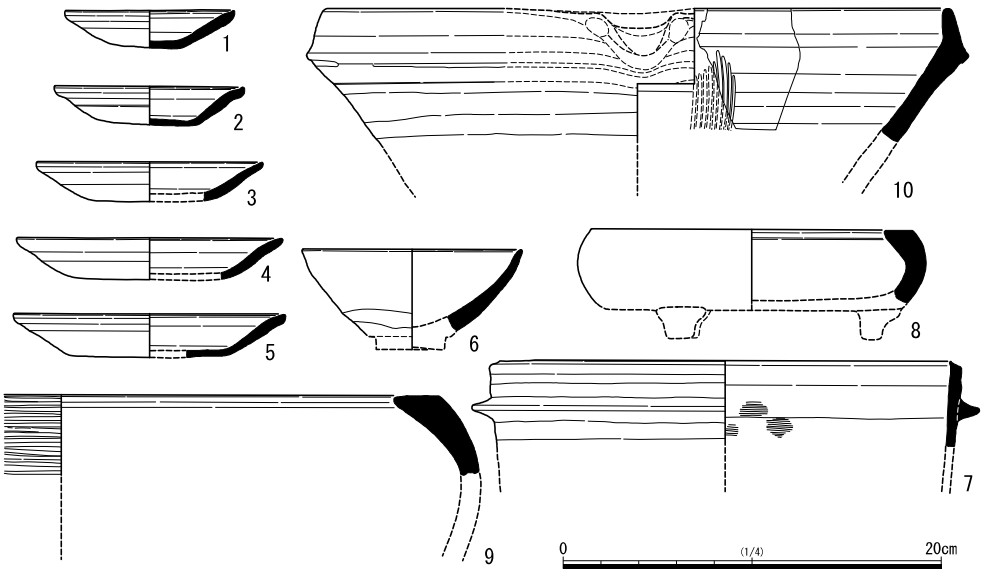
ここで示した石組 S128 から出土した土器陶磁器類に関しては、15 世紀後葉から 16 世紀初頃前後の時期幅を持つものである。

第 42 図は暗渠溝 S13 から出土した土器・陶磁器類である。

1 は土師器皿 Sb であり口径 9.0cm を測る。2 は土師器皿 S の中 1 であり口径 10.1cm ほどである。3 は土師器皿 S の中と見ており口径 12.0cm を測る。4・5 は土師器皿 S 大 1 と見ており 4 は口径 14.1cm、5 は口径 14.4cm であり 14.0cm 台に属する。白色系の皿 Sb・S ともに胎土が淡い橙色化しているものが多く若干の厚手化が進んでいる。全形は、体部から口縁が低く大きく開くか、幅を減じておりⅨ期の皿 S 系に比べてより低い皿形化へと変化が進んでおり、X期の中で位置付けられる。皿 S 系は底部から体部の立ち上がり付近にめぐる圏線が、浅いが凹線状を呈するようになったものが主体を成しておりX期古から少し中にかけて 16 世紀中葉あたりを中心に位置すると見ておく。

6 は国産施釉陶器の鉄釉天目茶垸であり､瀬戸美濃産である。土師器皿類よりは少し古相を持っており 15 世紀頃からの伝世的使用品と見ている。

7 は楠葉産の瓦器羽釜で、口径 25.0cm を測る通有品である。鍔部が委縮し断面が三角形状を呈するようになっており、15 世紀末期から 16 世紀前葉頃に位置付けられる。8・9 は奈良産の瓦器火鉢であり、8 は口径 17.1cm ほどで小振りの円形である。9 の口径は推定 40.0cm ほどであり、大きい円形である。8 は不明瞭だが、8・9 ともに上面から外面は丁寧なヘラミガキである。



第 42 図　土器・陶磁器類実測図 24（暗渠溝 S13 出土）

それぞれ低い三角脚が付くものと見られる。15 世紀末から 16 世紀中葉頃の製品と見てよいだろう。

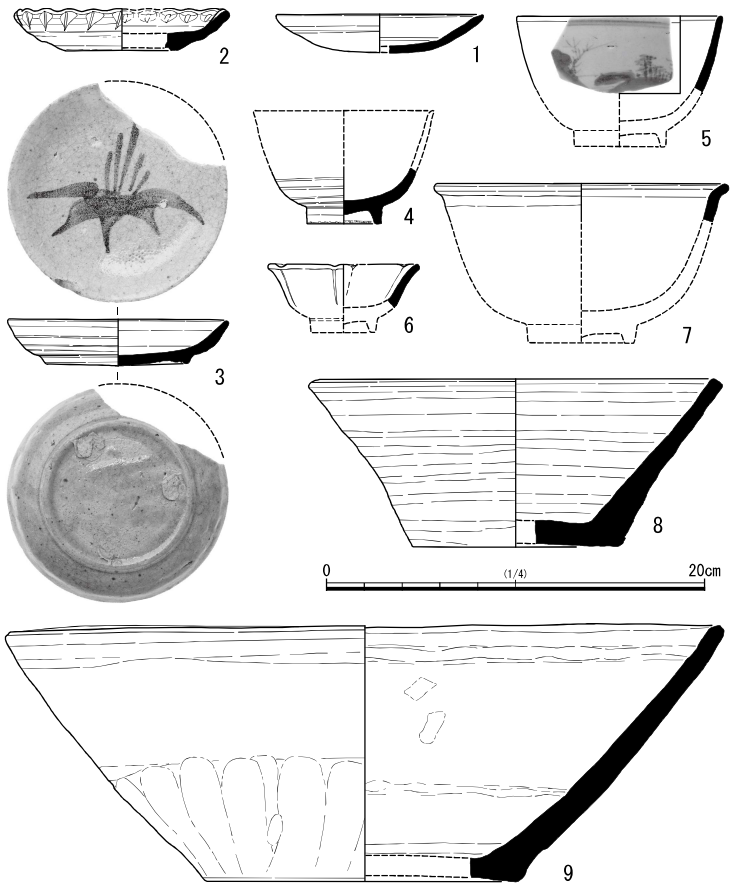
10 は焼き締め陶器の備前の擂鉢であり、体部内面に 9 本と推測される櫛目が付くが櫛目間はかなり幅がありそうである。口縁部は断面的には三角形が上方へ発達しており、口縁部の外面は幅のある縁帯状を呈するようになっている。伊丹城下町遺跡出土で主体を成す備前の火鉢と同型式に属するものと見てよいだろう。16 世紀前半代を中心にした年代の備前製品と見ておく。

暗渠溝 S13 から出土した遺物の全体的な年代観は、より古い混入品を除いて 15 世紀末期から 16 世紀前半頃に位置付けられる土器・陶磁器等が中心をなす遺物群であり、下限年代は 16 世紀半ばと見ておきたい。

第 43 図に示した遺物は土坑 S35 内から出土した遺物である。土坑 S35 の下層は井戸 S138 になり、平安時代から中世の遺物も大量に含まれているが、上層の土坑 S35 には近世前期頃の遺物を中心に一定量がまとまった形で出土している。

1 は白色系の土師器皿 S 大であり、口径 11.0㎝、器高 2.0㎝ほどを測る。立ち上がり部角の内面より少しずり上がり気味の位置に凹状圏線が付く、口縁部は委縮気味で端面化している。細部の型式特徴からはⅪ期中の新しい方にウェートを置いて見ておく。

2 は瀬戸美濃産鉄釉陶器皿であり、口縁部を小単位で外側からヘラを縦にあて花弁状としている。口径 11.4㎝、器高 2.2㎝ほどを測る。3 は同じ瀬戸美濃産の長石釉の皿である。口径 11.7㎝、器高 2.5㎝ほどを測り、内面の見込みを中心に鉄絵で、ゆりの花状のいわゆる「蘭竹文」とされる花文様を施す。高台内の底部外面には大きな三又トチン痕と内面の見込みには小さな三又トチン痕が残り、これらの皿が量産されていた事を示している。これらの瀬戸美濃産の小皿は、日常的に御膳の上で補助的な位置で使われる、いわゆる「手塩皿」であろう。4 は胎土が陶胎に近い肥前の白磁碗であり、推定口径 9.6㎝、推定



第 43 図　土器・陶磁器類実測図 25（井戸 S35 出土）

器高 6.0㎝ほどの小振りの碗である。5 は口径 10.9㎝、推定器高 6.9㎝ほどの染付磁器碗である。体部外面には山水文的な文様を呉須で描く。釉は基本透明釉である。京都へ搬入されている肥前磁器としてはかなり早い 17 世紀前半代のものであろう。

6 は中国明末の輸入白磁の小坏である。轆轤成形で、縦ベラ等を入れて輪花状としている。口径 8.0㎝ほどで、推定器高 3.6㎝ほどであり、猪口的な小酒坏である。7 は中国明からの輸入青磁碗である。口径 15.6㎝、推定器高 8.4㎝ほどである。輸入時期は 15 世紀末から 16 世紀前半代と見られ、伝世的な使用が続いた後に廃棄されたものだろう。

8 は国産の焼き締め陶器鉢である。口径 22.2㎝、器高 8.9㎝、底径 11.0㎝ほどを測る。長石、石英粒が目に付く淡褐色でやや粗の胎土他の要素から信楽産の鉢と見ている。信楽の同期の擂鉢等に比べて、口縁の割には器高が低く、浅鉢と称すべきものであり、茶道具の平水指として使用されていた可能性も考えておく。9 は半分以上残っていた焼き締め陶器の鉢であり、口径 38.0㎝、器高 13.5㎝、底径 17.0㎝ほどを測る。内面のほぼ全体に少し緑味をおびた自然釉（灰釉）がかなり厚くかかっている。重ね焼きの際に最も上位に置かれていたものだろう。端面状を呈する口縁端部および口縁部内面下端が浅い凹線状を示しているなどの点や、濃い茶色に焼き上がる外面のねっとりとした器表感などから、丹波産としてよいだろう。体部外面の幅のある縦ヘラケズリ痕跡も信楽や備前の鉢には見られない。8・9 の焼き締め陶器類は、生産と京都への搬入時期が室町時代末期から桃山時代の 16 世紀代半ばから後半代と見られるので、伝世使用後に廃棄されたものであろう。この土坑から出土した土器陶磁器類全体のなかで、17 世紀前半の中頃を中心に位置付けられるものが下限になる一群である。

第 44 図に示した遺物は井戸 S40 から出土したものである。古代から中世の古手混入品も同時にたくさん出土しているが、ここでは近世初頭の江戸時代前期に比定できるものを主に報告する。

1 ～ 4 は、京域主流派に属する土師器皿 S 大 1 である。土師器皿類では他に皿 Sb や Nr も見られたがここでは図示するに至っていない。皿 S 大 1 では、1・2 は口径 11.2㎝、3 は口径 11.3㎝、4 は口径 11.6㎝を測り、器高は 2.0 ～ 2.3㎝ほどである。XI期的定形が保持されているが、器壁の厚手感が少し増し、底部内面縁辺をめぐる凹状圏線が、少し上方へずり上がっているように見えてきている。口縁端部内面は幅狭くなり、より端面化したものが主体を成すが、端面が不明瞭となったものも少なからず含まれるようになっている。4 はXI期古以前にも見える古相を残すが、型式としての時間位置はXI期中の新相からXI期新の中相の幅に収まると見ている。実時間は 17 世紀第二四半期前後を中心とする短い時間幅内と考えている。5 は口径 2.2㎝、器高 2.8㎝を測る極く小さな土師器壺である。伏見稲荷大社の縁起物で「ツボツボ」と愛称されている。

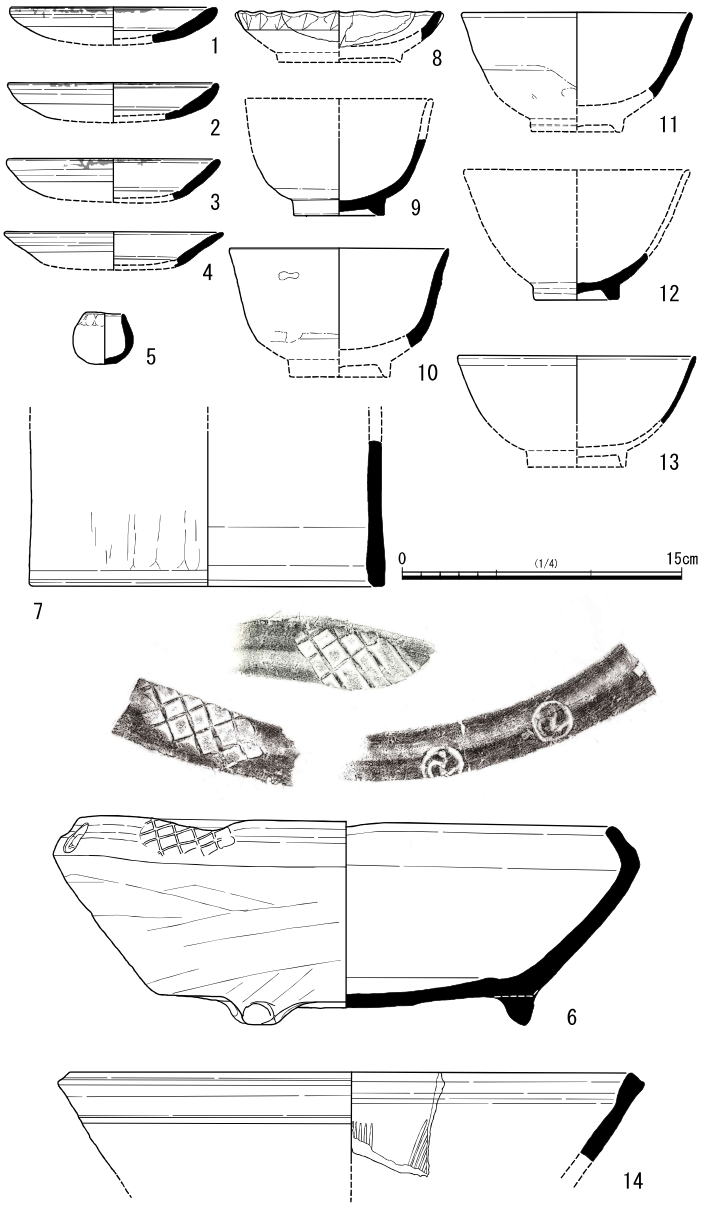
6 は土師器の三足付き火鉢と見ており、口径 29.0㎝ほど、器高 10.9㎝ほどを測る。口縁部が縁状に内傾し、三方を更に少し内曲させて、その部分の上面に粗い格子目状のタタキ痕を文様風に施している。奈良の瓦器火鉢とは土師器である点にとどまらず形態的にも文様的にも大きく異なっており、生産地は各種の型式特徴から摂津西部から播磨方面と見ている。型式変化をするが、

16 世紀後半から 17 世紀頃には、洛中では少数ながら出土が知られている。

7 は瓦灯の蓋で、体の上部と透し孔部分は欠失している。径 18.8㎝ほどを測る。器表は黒灰を呈し、外面は丁寧にヘラミガキしている。洛中でも江戸時代前期頃によく見られる灯火具で、奈良産あるいは奈良系の製品と見ている。

8 ～ 11 は国産施釉陶磁器類である。8 は口径 11.0㎝、推定器高 2.7㎝ほどの小振りの皿である。轆轤成形の丸形の皿であるが口縁部はヘラ等を用いて小さい花弁状に成形している。9 は、削り出し輪高台の径が 5.3㎝ほどを測る、推定口径 10.0㎝ほど、器高は 6.2㎝ほどの小振りの埦である。8・9 は両者ともに鉄釉が施されており、胎土、釉調等から瀬戸美濃産と見ている。10・11 は肥前陶器の唐津埦であり、10 には鉄絵が施されているが、11 は無地である。10 は口径 11.6㎝、推定器高は 6.8㎝ほどである。11 は口径 12.2㎝、推定器高は 6.3㎝ほどである。両者ともに茶碗として使用されていた可能性もある。12 は高台径が 4.5㎝ほどであり、推定では口径 12.0㎝、器高 7.0㎝ほどの埦となる。釉調は淡褐色でかせたものであり、粗い印象の削り出し高台と底部外面中央の兜巾のケズリ痕等からは、いわゆる 17 世紀代の新しい高麗茶碗だろうと考えている。半島の釜山和館窯産ではあっても一応は輸入品として扱っておく。13 は薄作りの体部外面に呉須で模様を描く染付磁器碗の口縁片であり、口径 12.6㎝ほど、推定器高 5.9㎝ほどである。白色のきめ細かい胎土や釉の透明感、呉須の発色等からは、中国明末の景徳鎮系の輸入品と見てよいだろう。明代末期の 17 世紀前葉頃には大量に輸入されており、洛中では伊万里の国産染付磁器が増え始める 17 世紀第二四半世紀頃までは、伝世使用だろうものも含めて国産施釉陶器と同等程度に出土する。

14 は、口径 31.0㎝ほどを測る、一般的な焼き締め陶器の擂鉢であ



第 44 図　土器・陶磁器類実測図 26（井戸 S40 出土）

る。口縁端部は、体部の外上方への伸びに直行するように切り揃えられた後に内外面をナデ仕上げした結果、断面形状は角に丸みを持つが少し長めの方形状を呈する口縁部となっている。内面の口縁部付近には浅い凹線があり、このような口縁形状の特徴は工房を越えて丹波で共通されている。ねっとりとした茶褐色の器表感等からも、丹波産と見てよいだろう。残存部で確認できる多条化した擂り目とその隙間幅からは、17 世紀前半代の早い段階頃の製品と見られる。

このように土師器皿類と共伴出土している土器陶磁器類は、少し古くから搬入されて伝世使用されていたものと見られるものを含んでいるが、17 世紀第二四半期頃の内に土師器食器類とともにまとめて廃棄された生活用具類と見てよいだろう。

第 45 図に示した遺物は、落込み S73 から出土したものである。1 ～ 10 は土師器、12 ～ 21 は国産施釉陶器類、22 は輸入陶磁器、23 ～ 25 は国産の焼き締め陶器類および土人形である。

1 ～ 6 は京域主流派に属する土師器皿である。1 は赤褐色系の皿 Nr の小で口径 5.8㎝、器高 1.4㎝ほどを測る。2･3 は白色系の土師器皿 Sb であり、2 は口径 9.5㎝、器高 2.0㎝、3 は口径 9.0㎝、器高 2.1㎝ほどの大きさである。両者ともに内底面に凹状圏線を持っていない。4 ～ 6 は皿 S 大 1 であり、4 は口径 11.0㎝、器高 2.2㎝、5 は口径 11.0㎝、器高 2.0㎝ほどである。6 は口径 14.8㎝、器高 2.5cm ほどの大きさであり、皿 S 大 3 と見ている。これら皿 S 大には、内面の立ち上がり付近に明瞭な凹状圏線が付いているが、少しずり上がって見える位置に付いている。これらの土師器皿の型式要素はⅪ期の形式の基本を保持しているが、凹線に限らず口縁端部形態を含めて、次のⅫ期の方を向いた新相を明瞭に読み取れるものとなっている。Ⅺ期新に属し江戸時代前期の内の第二四半期頃から半ば過ぎ頃の年代の内に収まるものと見ている。

7 は口径 2.6㎝、器高 2.5㎝ほどの「ツボツボ」と愛称されている土師器小壺である。Ⅺ期を通じて出土例が増えるが、少し華奢さが増す程度で型式変化を読み取ることが難しい。8 は口径 5.8㎝、器高 8.5㎝ほどの大きさの堺産の焼き塩壺である。体部は面取り気味のナデ仕上げである。Ⅸ期古から中に出土するやや体部が袋状に膨らむ先行類品に比べて、体部が直立気味でコップ状を呈する形となっている。16 世紀末頃から以降江戸時代を通じて、京都へもたくさん搬入されている。9 は底径 8.4㎝、体部径 11.8㎝ほどを測る土師器の香炉である。器高は 6.0㎝ほどの低いものと推定しており線香立て的な小香炉と見ている。

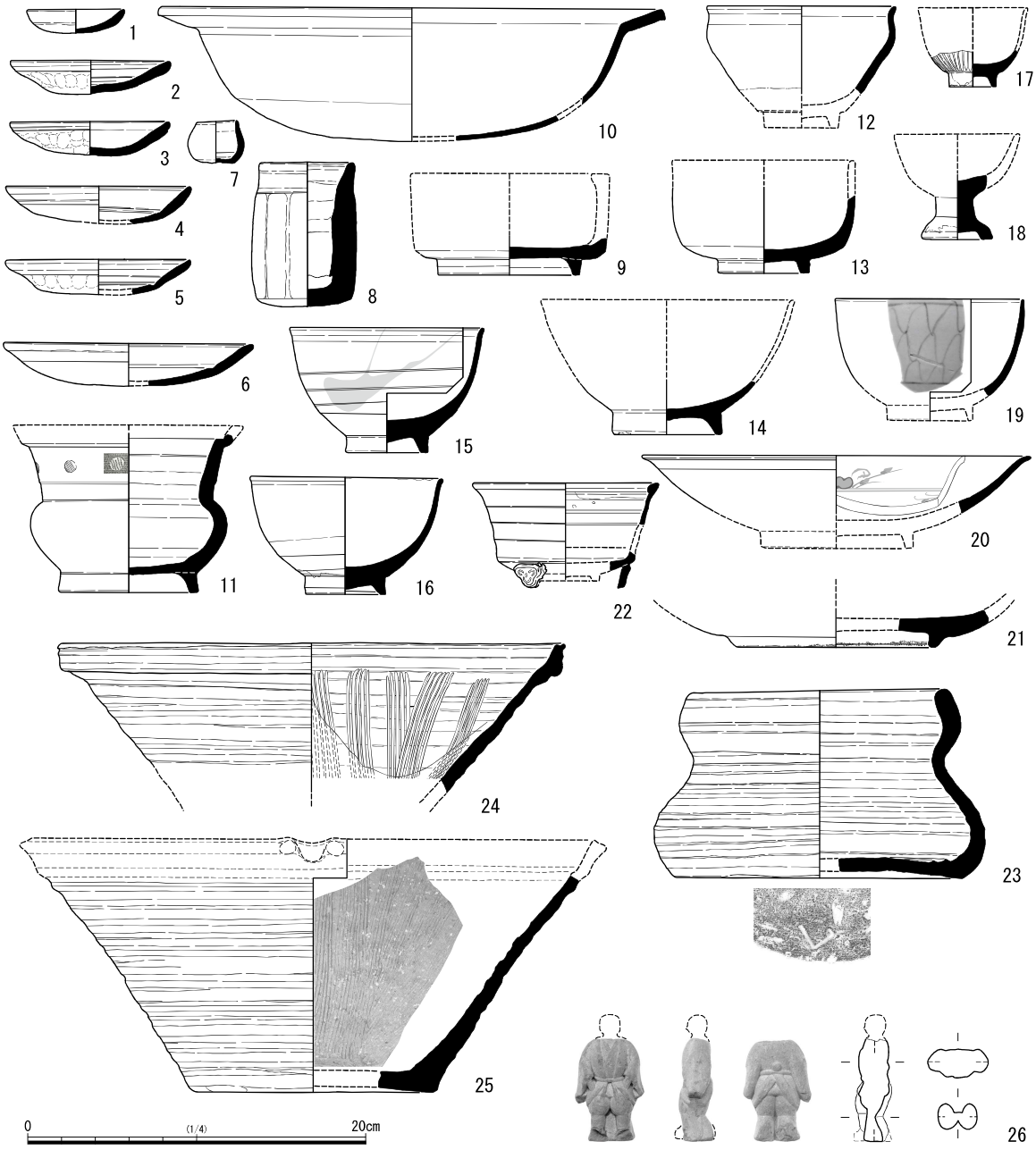
10 は口径 30.0cm、器高 7.9cm ほどを測る土師器の焙烙である。口縁端部直下まで台型のアタリ（圧痕）が確認出来、口縁端部下端にバリの名残り的な少し小さな突起が残る。内面から口縁端部外面まではナデ仕上げである。体部が丸く開き気味に立ち上がり、口縁部が外方へ「く」の字状に折れて幅のある縁状を呈する。全形の特徴は、奈良産あるいは同系統の焙烙に通有なものである。完全な台型成形となっているのに、やや深さが残っている点からは 17 世紀第二四半期頃以降の奈良系焙烙と見てよいだろう。

11 は瓦器の香炉であり、復元口径 13.5㎝、復元器高 10㎝弱ほどである。口縁部の残存形態からは、蓋を受ける平坦面を持ち、その外辺から立ち上がり部が付く、鍋の口縁形態に類似したものと思われる。全形は下半が丸味を持って膨らむ、いわゆる袴腰であり、底外にはやや高い貼り

付け輪高台が付く。外面全体は丁寧なヘラミガキを施して炭素を吸着させて黒色に仕上げている。胎土は灰色だが黒光りする外面は黒色土器に近い。頸部外面には一定間隔で斜め線の入る丸文を施している。産地は奈良周辺と見ている。

12・13 は瀬戸美濃産の施釉陶器である。12 は口径 11.2㎝、推定器高 7.2㎝の鉄釉天目茶垸であり、桃山時代頃のものに比べると少し縦長となっている。13 は体部径 10.8㎝ほどのいわゆる半筒茶垸であり、淡黄緑色気味をおびた釉調からは黄瀬戸と見られる。

14 ～ 21 は肥前あるいは北部九州の半島系の陶磁器類である。14 は径 6.5㎝ほどの大きめの高台が付く、口径 15.0㎝、器高 8.0㎝ほどの大振りな垸と推定される。エナメル質感もある白黄色の釉調と高台内まで施釉する特徴的な陶器である。肥前の枠にとどまらず対州焼など北部九州諸



第 45 図　土器・陶磁器類実測図 27（落込み S73 出土）

窯のなかで検討すべきものと考えている。15･16 は口径 11.5㎝前後､器高 7.0cm 前後の大きさで、ゆるい丸味のある腰から体部上半から口縁部が外上方へゆるく立ち上がる、和的に定型化した形態を持っている。両者とも釉は透明に近い灰釉を基本としており、内面は胎土の色を反映して淡褐色を呈する仕上げである。しかし外面は 15 の場合、地肌を反映した淡褐色をベースに銅緑釉を流し掛け的な文様としているのに対して、16 はエナメル質感を持った銅緑釉をほぼ全体的に掛けており外面は緑釉陶器である。17 世紀後半頃に肥前諸窯で、磁器とともに量産された施釉陶器埦であり、この資料はその中では古相なものと見られる。17 は高台径 2.8㎝ほどの猪口風の小碗であり、18 は台底径 4.2㎝、台高 2.5㎝ほどの小振りの仏飯器である。19 は口径 11.2cm ほどを測り、体部外面に呉須で一重網目文を施した、肥前では一般的大きさと模様を持つ染付磁器の碗である。網目文の様子からは江戸時代前期 17 世紀代の中葉頃を中心に生産されていたものと見られる。20・21 は染付磁器の皿であり。20 は口径 23.0cm ほどで八寸に近い中皿であり、21 は高台径が 11.8㎝ほどの大きさで口径が 30cm を超える大皿と推測される。

12 ～ 21 の国産施釉陶磁器の埦・皿他は、17 世紀前半から中葉頃に位置付けられるものが主体を成していると見てよく、推定時期幅の後半は土師器皿類のⅪ期新の推定年代と重なる。江戸時代前期の 17 世紀中葉頃には、洛中でも染付磁器を中心とする土器陶磁器類が日常の食器等の中に大きな位置を占めるようになったことをよく示している。

22 はここでは数少ない中国明末の青磁香炉片であり、口径 11.0㎝、器高 6.2㎝ほどの大きさで三足が付く。伝世使用された良品と見られ、明からの輸入年代は 17 世紀前葉以前に遡ってもよいだろう。

23 は口径 15.6㎝、器高 11.2㎝、底径 17.1㎝ほどを測る、備前産の焼き締め陶器である。体部中位の少し上で大きくくびれ上下を切られたヒサゴ形状の特徴的な形態を呈している。体部外面の轆轤目は意図的に多条凹線状に調整されており、かなり作意を感じる茶道具の一種であり、少し器高は低いが水指と見てよいと考えている。24･25 は鉄泥（釉）を施された信楽の擂鉢である。24 は口径 30.0㎝ほど、25 は推定口径が 35.0㎝弱、推定器高 15.0㎝ほどであり、一般的な大きさとそれより少し大振りなものである。体部は器壁が薄く、口縁部はかなり発達しており、全体に鉄泥（釉）を施している。しかし櫛目状の擂り目単位間に隙間が残っている。型式特徴等からは、17 世紀の中葉頃に位置付けてよいと考えている。

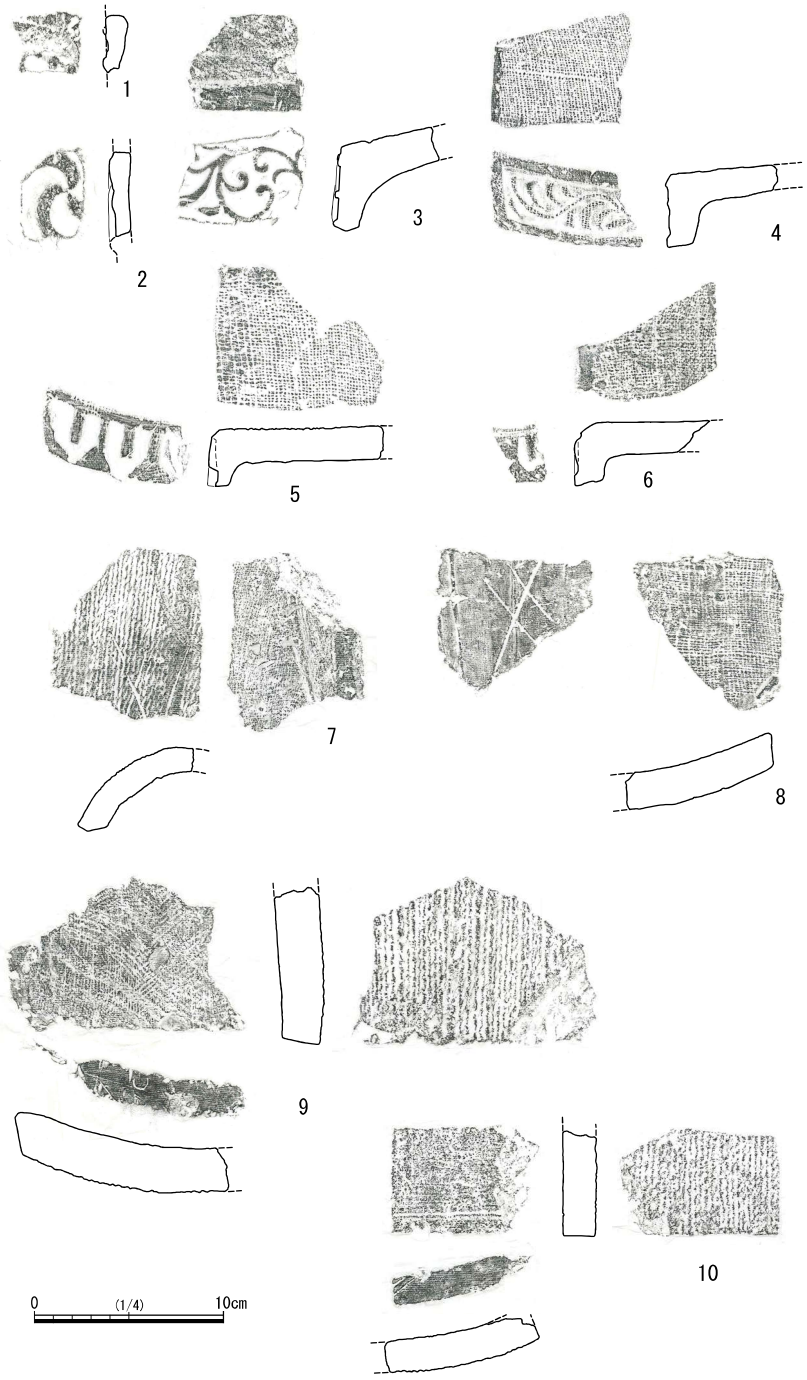
26 の土人形は頭部を欠失しているが、推定高は 7.0㎝強である。彩色は残っていないが器表には雲母の混ざった胡粉かと見られるものが付着して残っている。伏見人形等に繋がる古い段階の合せ型作りの土人形と見ておきたい。京都では 16 世紀末から 17 世紀頃から土人形の出土がよく見られるようになるが、この人形もその一つである。

上述してきたごとく、土器陶磁器類の多くは 17 世紀第二四半期から中葉頃と重なる時期か、それよりも古くからの伝世品と理解されるものが主体を成している。これらの土器陶磁器類は、Ⅺ期新の土師器皿類と共伴的に廃棄されたものと見て問題ないだろう。

2. 瓦磚類（第 46 ～ 51 図）

今回出土した瓦磚類は量的には多くはないが､年代は平安時代から江戸時代までのものがある。江戸時代以前の時期の瓦類はいずれも後代の遺構や包含層から出土している。

平安時代の瓦類はコンテナバット 4 箱程度で、いずれも小片であった。8 世紀末の前期段階から 12 世紀代の後期段階までの瓦類があるが、造瓦技法などから見て前～中期は少なく、多くは



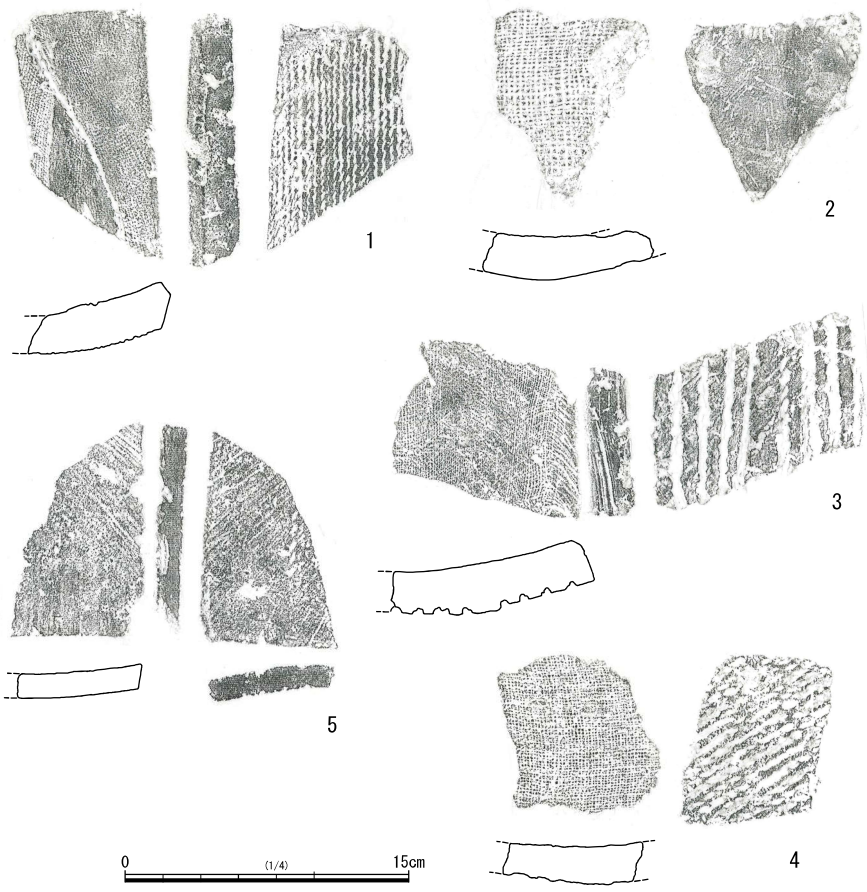
第 46 図　瓦磚類実測図 1（平安時代）

1・9：A-7 区 包含層　　2：B-8 区 包含層　　3：B-6 区 包含層　　4：B-4 区 土坑 S155　5：C-3 区 包含層
6：A-7 区 包含層　　7：B-2・3 区 土坑 S35　　8：A・B-3・4 区 落込み S73　　10：B-5 区 包含層

後期段階のものと思われる。

軒丸瓦で文様のわかる瓦は２点である。第 46 図１は蓮華文の一部と中房部分だけの破片で、蓮子間に笵傷がみえる。２は三つ巴文である。軒平瓦も瓦当文様のわかるものは４点であった。3・4 は唐草文を表し、３はいわゆる半折り曲げ、４は平瓦端の折り曲げで瓦当部を作っている。４の平瓦部凹面の瓦当際に、縦方向で 3㎝前後の細い刻線記号が３本認められる。5・6 は剣頭文で、瓦当部は折り曲げで作っている。なお、５の文様面に細い斜線２本の刻線記号がある。７～ 10 は記号の見える瓦類である。７は軒丸瓦の丸瓦部と思われる。凸面に細い斜線２本の刻線記号がある。８は軒平瓦の平瓦部で、凸面に斜線２本とそれに交差する斜線の刻線記号がある。９・10 は平瓦で、端面に９は竹管状の小さな半円の記号が、10 には斜線２本の刻線がある。１～ 10 は、いずれも平安時代後期の栗栖野瓦窯（岩倉幡枝瓦窯）製品と思われる。

第 47 図１は凹面の布目痕に布の合わせ目が見える平瓦で、かがり縫いされた布端が交差し、隙間ができている。この合わせ目の隙間にも微かに布目痕が見えるが、１枚造りの平瓦では不自然な布目痕であり、奈良時代後期の桶巻き造り平瓦の可能性が考えられる。２は軒平瓦の平瓦部で、凸面の幅広のケズリ調整痕や粗い布目の様子などから平安時代中期に属すると見られる。３～５は平安時代後期の平瓦である。凹面の布目痕や凸面の縄目叩き痕から、３は讃岐産で４は丹



第 47 図　瓦磚類実測図２（平安時代）

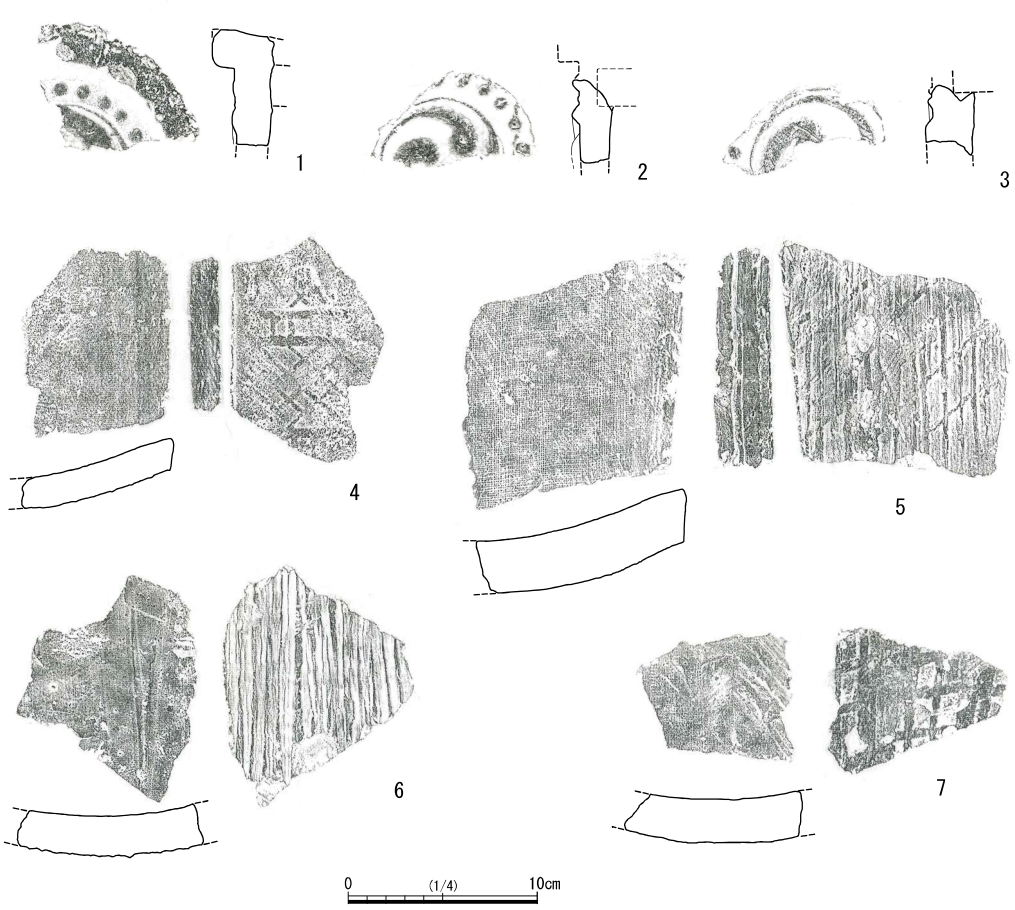
１・３：B-7 区 包含層　　２：A・B-3・４区 落込み S73　　４：B・C-4・５区 瓦溜 S25　　５：C-8 区 土坑 S64

波産と思われる。5 は凹凸両面とも同方向の糸切り痕が顕著な薄手の平瓦で、これは栗栖野瓦窯製品であろう。

第 48 図は鎌倉時代と見られる瓦類で、1 ～ 3 は、外区に密に珠文を巡らす三つ巴文の軒丸瓦である。1 は瓦当面に細かい離れ砂が使用されている。2 の珠文帯には縦方向に笵傷が、3 の巴部分には糸切り痕が認められる。

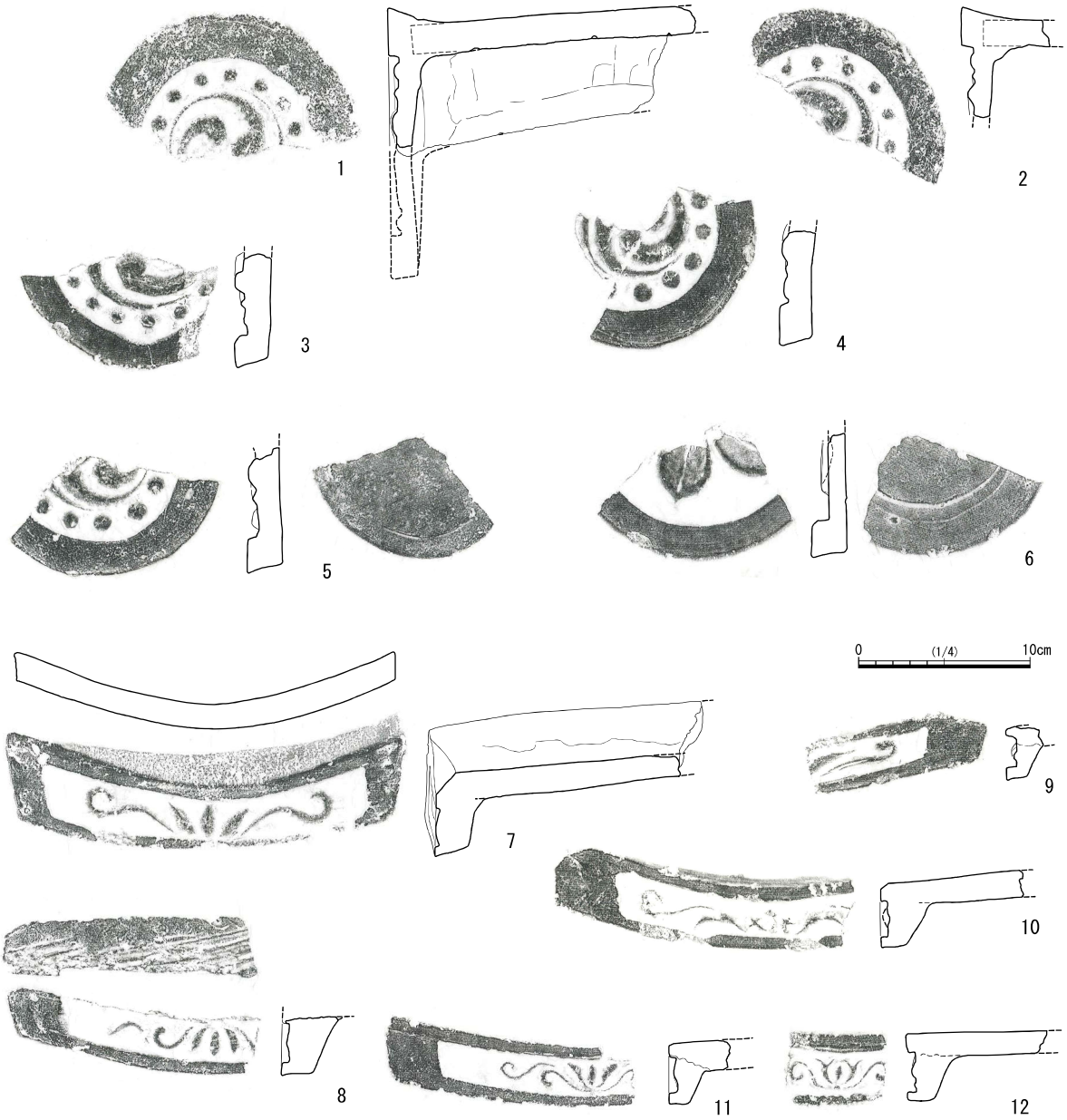
4 ～ 7 は平瓦で、凸面の叩き目が格子あるいは条線文の例で、いずれも凹面の布目痕は比較的細かい。4 の凸面には、比較的細かい斜格子に横方向の梯子状の文様を加えたタタキ目があり、離れ砂を用いているようである。5 は厚さ 3㎝の厚手の瓦である。凸面のタタキ目は条線文に斜線を加えたような格子目で、凹面には糸切り痕が見える。6 の凸面は、条線文のタタキがかなり重複してなされている。凹面は布目も見えるが、全体に縦方向のナデがなされている。7 は凸面が斜格子文タタキで、凹面に糸切り痕が残っている。4 は暗灰褐色、5 は表面黒色で内部灰白色を呈し、6・7 は硬質の焼成で青灰白色を呈している。

今回の調査では、調査区内の上層にあった幕末の蛤御門の変の兵火によると見られる焼け瓦の廃棄坑や、一部の井戸など江戸時代末期の遺構からは桟瓦も出土しているが、江戸時代と認められるものは多くが本瓦葺きの瓦類であった。第 49 図は桃山時代～江戸時代の軒瓦類である。軒



第 48 図　瓦磚類実測図 3（鎌倉時代）

1：B-2 区 包含層　2：B-6 区 井戸 S27　3：A-5 区 整地層　4：B-4・5 区 包含層
5・6：B・C-1・2 区 暗渠溝 S13　7：B-4 区 瓦溜 S11



第 49 図　瓦磚類実測図 4（江戸時代）

1・11：C-5 区 整地層　　2 ～ 4：B・C-4・5 区 瓦溜 S19　　5・9：B-6 区 井戸 S27　　6：C-7 区 柱基礎撹乱 S1
7・8・10：A・B-3・4 区 落込み S73　　12：C-7 区 落込み S14

丸瓦の文様は、6 が細桔梗のようだが、他は外区に珠文を巡らす三つ巴文である（1 ～ 5）。この内、5 と 6 は江戸時代末期の瓦と見られる。軒平瓦（7 ～ 11）の瓦当文様はいずれも単純な唐草文を表している。7 は、瓦当上縁部を幅広く面取りしており、瓦当文様が聚楽第跡や伏見城跡などでも類例のある唐草文であることから、桃山時代の瓦と考えられる。8 も同様の軒平瓦で、瓦当部を形作る際に平瓦凸面端に刻んだカキヤブリの痕が顕著に認められる。

第 50 図は床材の敷磚（敷瓦）である。いずれも室町時代のものと思われる。1 は四半敷の磚敷床の壁際で用いられるもので、1 辺 24㎝の方形磚を対角線で二分した三角形を呈している。厚さは 3㎝である。2 ～ 4 は破断の様子から、方形磚と思われる。2・3 の厚さは 3.5㎝、4 は 2.8

cmである。

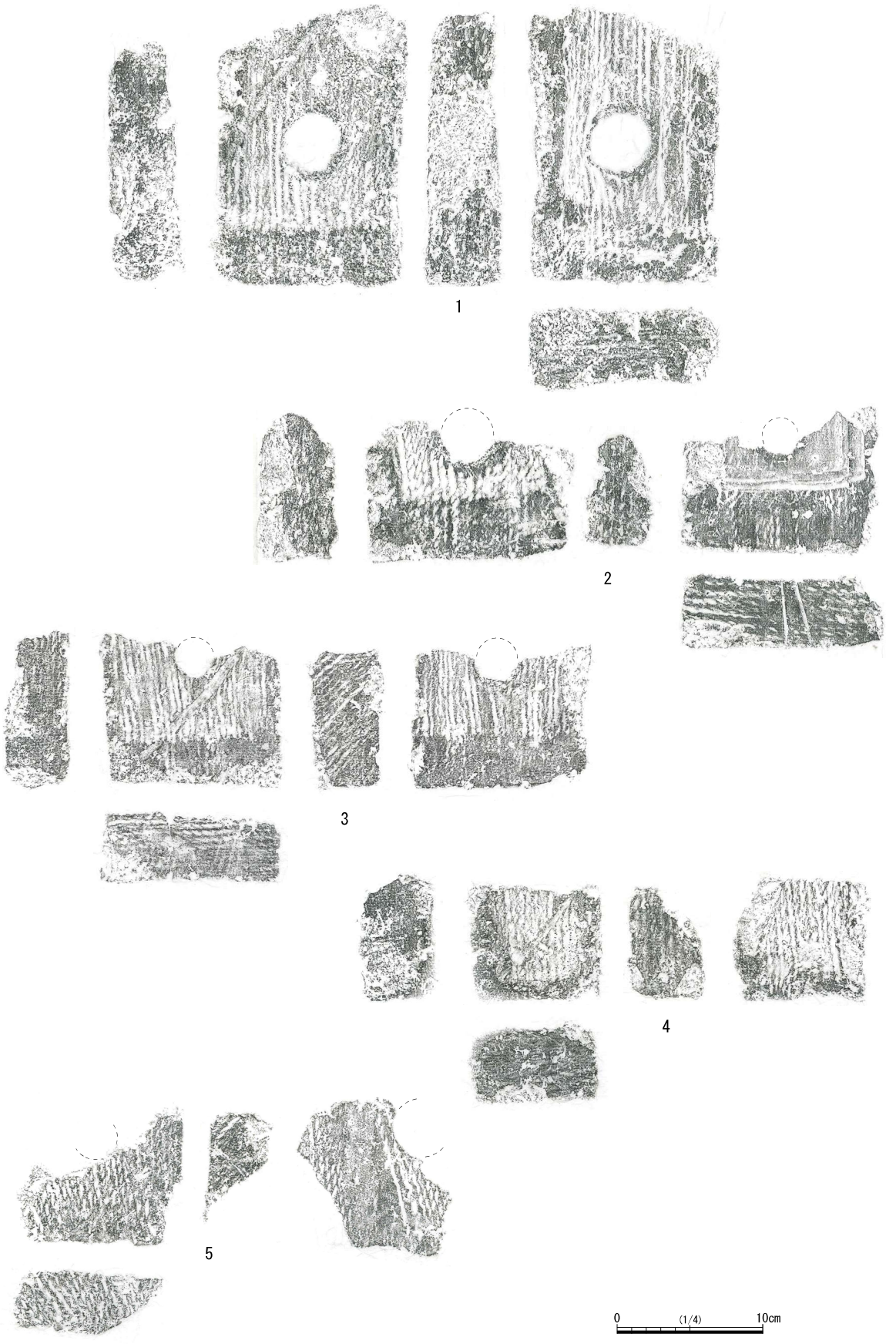
敷磚は表裏面と各側面もナデで仕上げがなされるが、成形は箱状の枠の中に粘土を詰めていくようで、割れ口に粘土塊の形が見える部分もある。また、各側面は若干傾斜させ、敷き並べる際に隙間が少なくなるようにされている。なお、いずれも表面は比較的滑らかであるが、胎土には粗い砂を多く混じえている。

第51図は、いわゆる有孔磚である。多くはレンガ状の直方体で、通常2箇所に孔が開けられている。また、各面とも縄目叩き痕が残り、孔の開けられた表裏面の中央部が両面とも窪められている。同様の有孔磚は京内各所の鎌倉時代以降の遺構などから出土するが、特に左京八条二・三坊あたりでの出土が多いように見受けられる。ただし、このような有孔磚が本来どのような用途であったのかはまだ不明である。今回の調査でも破片が多数あるが、大半が礫に混じって出土するような状況であった。

第51図1は半分程度の破片で、窪められた一方の面に指先による斜線の記号が入れられている。2の形状は1と同様であるが、短い方の側面に細い棒の先のようなもので2本線の記

第50図　瓦磚類拓影5（敷磚）

1・2・4：A・C-1・2区 暗渠溝S13　　3：B-4・5区 井戸S65



第 51 図　瓦磚類拓影 6（有孔磚）

1：B-4 区 石組遺構 S128　　2・4：B-4・5 区 井戸 S65　　3・5：A ～ C-1・2 区 暗渠溝 S13

号が入れられている。3 は 1・2 より幅がやや狭い磚で、指先による斜線の記号がある。4 はさらに幅の狭い磚で、同じく指先による斜線の記号がある。この磚の残存部分では孔は認められない。5 は各面に縄目叩き痕があり孔が開けられているが、窪みがない磚である。一般的な 1・2 などとは異なる形状の磚と思われる。図示できなかったが、各面に縄目叩き痕があって窪みのない厚さ約 6㎝の磚もあった。なお、これらの磚は概ね灰～灰黒色を呈し、またいずれも胎土にかなり粗い砂を多く含んでいる。

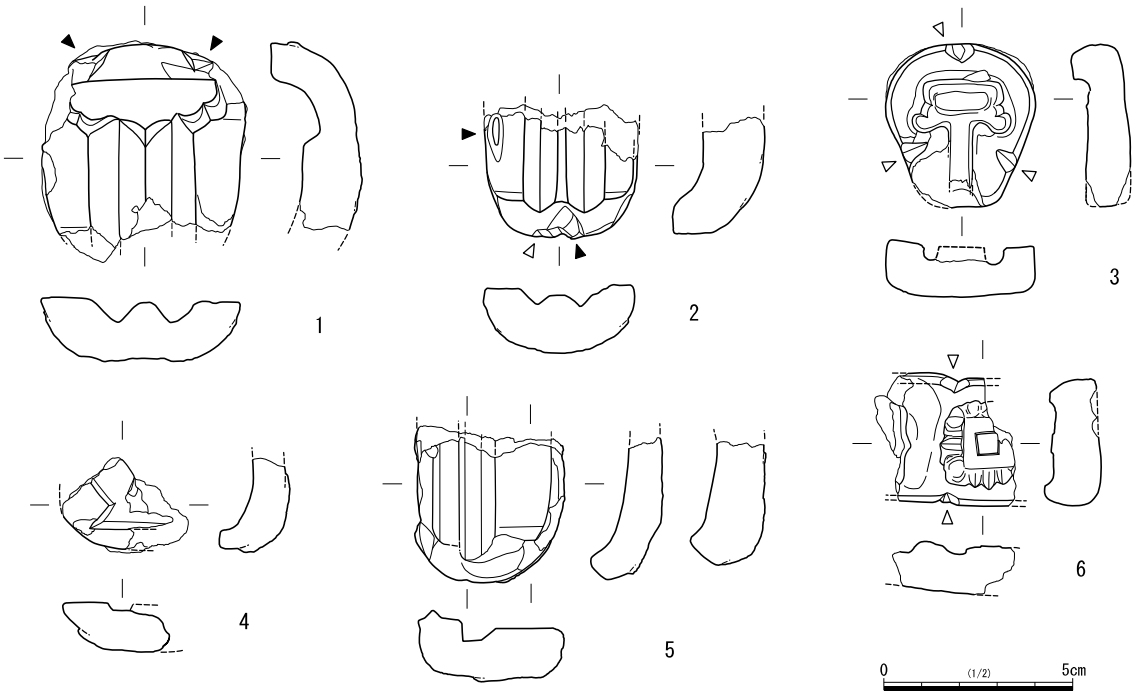
3.　鋳造関係遺物（第 52 ～ 55 図、図版 24・25）

今回の調査では、主に包含層中から鋳型やルツボ（坩堝）など鋳造関係の遺物が出土している。鋳型の種類やルツボの様子から、銅製品の鋳造と思われる。ただし、鋳造関係遺物は集中して出土するような状況ではなく、鋳造に関するような焼土もほとんど認められなかった。調査区内で鋳造作業が行われていた状況は見られないが、小片ながら各種の鋳造関係遺物があり、近辺には鋳造工房があったと判断される。

【鋳型】（第 52 ～ 54 図、図版 24）

刀装具と鏡の鋳型は判別できた。その他にも、やや大型の製品の鋳型などもあるが、小破片のため製品の形は不明であった。

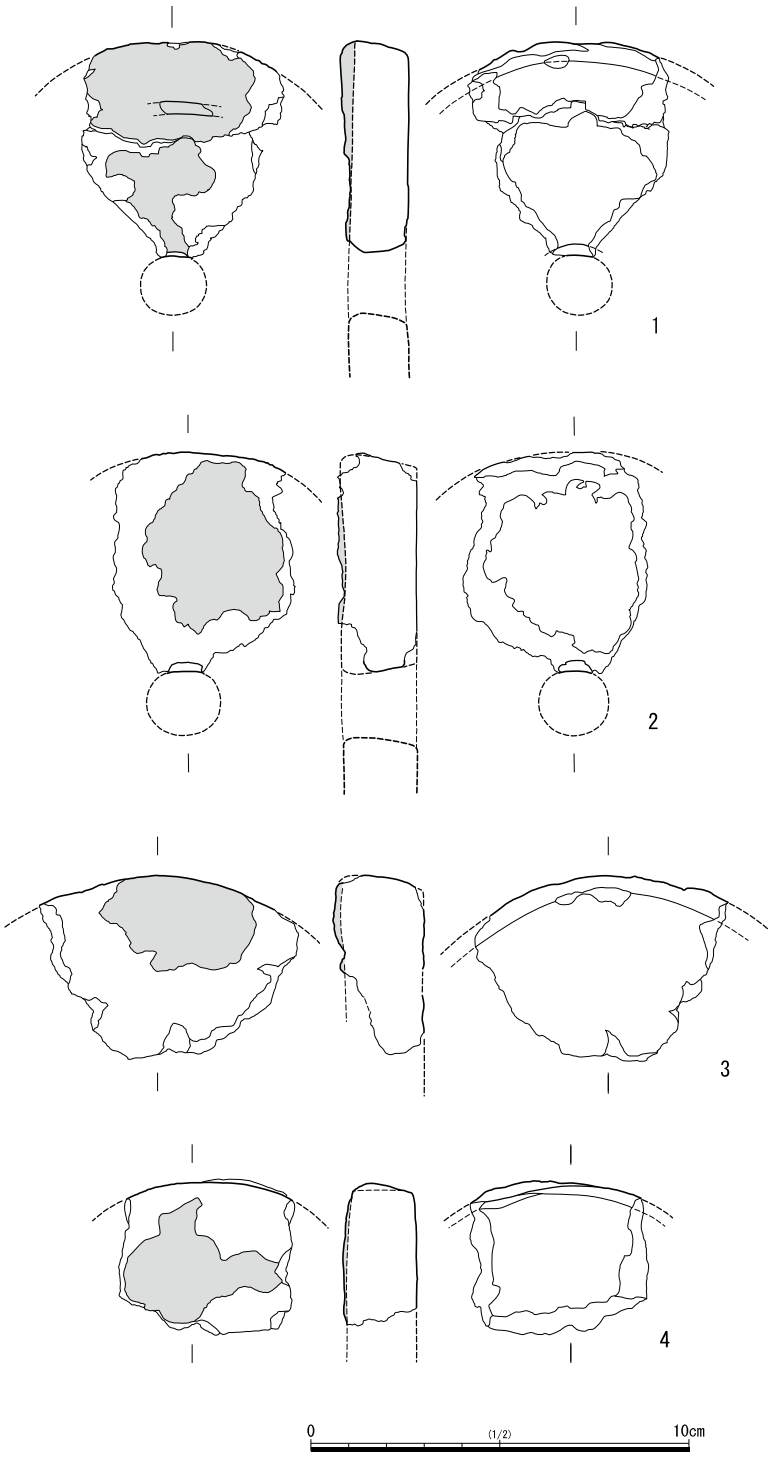
刀装具の鋳型で真土部分の残るものには、腹帯形足金物（第 52 図 1・2）、櫓金物（3）、胄金または石突金物（4）、座金（6）がある。5 も刀装具の鎚（ハバキ）鋳型かと思われる。



第 52 図　鋳造関係遺物実測図 1（刀装具鋳型）

1・3・4：C-7 区包含層、 2：井戸 S75、 5：表面採集、 6：井戸 S74

鋳型の土台にあたる部分の胎土はやや粗くて砂粒も少し含んでおり、おおまかに製品の形に窪ませて、これに数㎜程度の厚さで真土を付加している。鋳型には型合わせのための小さな突起(第52図▲印）や、合わせる際の目安の窪み（同図△印）が認められる。内型を入れて型合わせをした後、周囲を粘土で包み、一度焼き固めたものであろう。いずれも全体に赤褐色で、鋳込みで高熱を受けた箇所は部分的に灰～灰黒色を呈している。

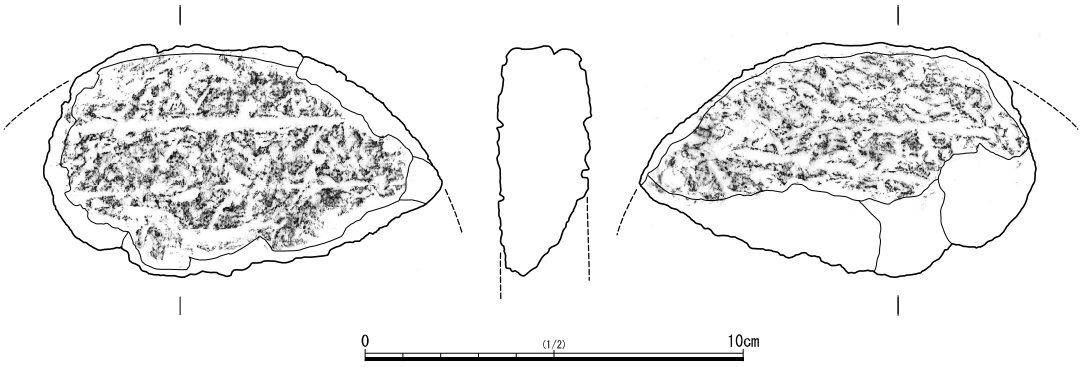


第53図　鋳造関係遺物実測図2（鏡鋳型1）

1：B-5区包含層、 2・3：B-4・5区包含層、 4：石組遺構S128

鏡の鋳型（第 53 図）はいずれも粗型（土台）部分で、極くわずかに真土の残るものもあった。1 の真土には鏡の縁かと思われる平坦な円弧の一部が見えるが、他には文様面や鏡面部分の残っているものはなかった。1・2 は、粗型の鏡面部分中央の穿孔部と周囲までの幅から見て、これらは径 9㎝（3 寸）の鏡の鋳型になろう。やや大きい鋳型では、外周の径から 15㎝程度の円鏡を鋳たものと思われる。粗型の胎土はガス抜きのため籾殻も混ぜてかなり粗い。外側にあたる面は平坦になるが、内側の真土が塗られる面は均されてはいない。

なお、A-6 区の江戸時代の土坑 S23 からも鏡鋳型の粗型が 1 点出土している（第 54 図）。粗型の胎土には籾殻がかなり多く混ぜ込まれており、真土との接合をよくするための斜格子刻線が両面にある。ただし、両面とも真土を載せた形跡はなく実際には使用されなかったものかも知れない。この粗型は数枚の鋳型を合わせて量産するもので、江戸時代の鏡鋳型と思われる。



第 54 図　鋳造関係遺物実測図 3（鏡鋳型 2）

【ルツボ】（図版 25-1 ～ 5）

ルツボは細かく砕けている破片ばかりで大きさのわかるものはほとんどないが、少なくとも大小のルツボがある。胎土は大粒の砂を含みかなり粗い。a は口径およそ 20㎝、厚さは約 2㎝である。内側には黒色のスラグがこびり付き、外側にも滴れた痕があって、この部分から「湯」を注ぎ出したと思われる。b ～ e は小型のルツボ口縁片で、内側に溶融した付着物がある。

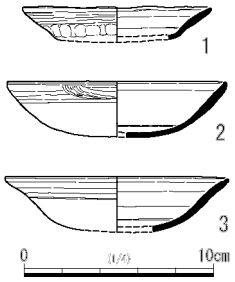
【フイゴ羽口】（図版 25-6 ～ 9）

フイゴの羽口も細かく砕けており、全形のわかるものはなかった。f は炉に差し込まれていた羽口の先端部で、外径約 6㎝、内径が約 2.5㎝であった。

【トリベ】（第 55 図、図版 25）

溶けた金属（湯）を鋳型に注ぐ際に「湯」を小分けするトリベ（取瓶）は、形態から見て土師器の白色系皿と赤橙色系皿の両方の「カワラケ」が用いられているようである。トリベと判断したのは二次的な高熱を受けて、須恵器や瓦器のように焼け締まり、内面に黒色あるいは赤色の付着物や若干の緑青が見える土器片である。年代はいずれも 14 世紀末頃と考えられる。トリベ専用に作られた器は見当たらず、通例の土師器皿をトリベに利用したと見られる。このような土器片は 50 点余り出土しており、すべて小破片で包含層からの出土が多く、特に調査区東半部からの出土が目立った。

第 55 図は図示できたトリベ片で、1 が赤橙色系皿、2・3 は白色系皿である。2 は内面に赤褐色の融着物があり、その表面に径 1 ～ 7㎜の気泡がはじけたような円形の痕が多数認められる。



第 55 図　鋳造関係遺物実測図 4（トリベ）
1：井戸 S65　2：B-5 区包含層　3：C-5 区整地層

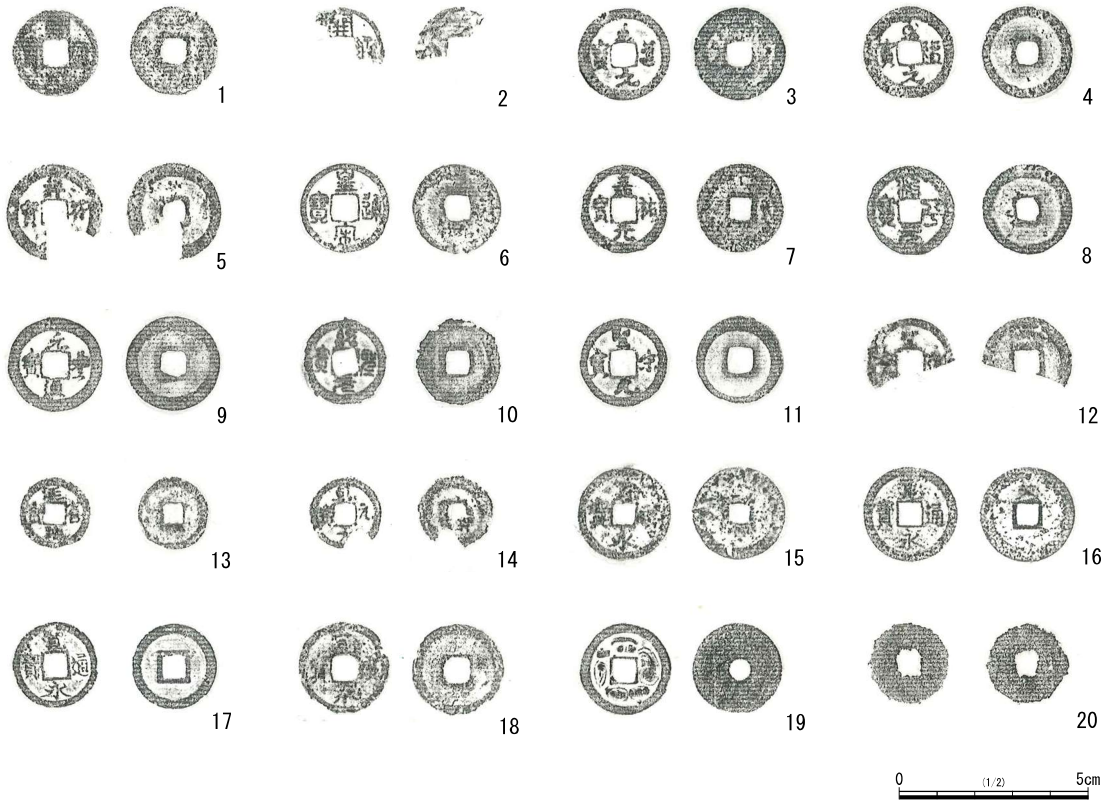
なお、上記の鋳造関係遺物はいずれも銅製品の生産に関わるもので若干の銅の小粒や鉱滓もあるが、調査区各所の概ね 14 世紀以降の遺構や包含層からは鉄の鉱滓も出土している。鉄滓は拳大前後の塊のものが多く、コンテナバットで 2 箱分余り出土した。鉱滓は溶融炉などの保温用に利用されることがあるとも言われるが、銅製品鋳造との関連はよくわからない。出土した状況は、鉱滓だけが集中していることはなく、礫に混じるようにして出土していた。調査地近辺では銅製品だけでなく、鉄製品の生産も行われていたことを窺わせる。

4.　その他の遺物（第 56 ～ 62 図、図版 26 ～ 28）

(1) 金属製品

【銭貨】（第 56 図、表 1）

今回の調査で銭貨は、江戸時代の絵銭を含めて 20 枚出土した。北宋銭が多く 8 種 9 枚で、銭



第 56 図　銭貨拓影

No	銭銘	初鋳年	出土地点	No	銭銘	初鋳年	出土地点
1	開元通寶	621 始鋳	B-6 区 包含層	11	聖宋元寶	1101 鋳	B・C-4・5 区 瓦溜 S19
2	開元通寶	621 始鋳	B-4・5 区 井戸 S65	12	（銘不明）	（宋銭）	B-4 区 石組遺構 S128
3	至道元寶	995 ～ 997 鋳	C-5 区 井戸 S40	13	延喜通寶	907 始鋳	C-5 区 包含層
4	至道元寶	995 ～ 997 鋳	C-5 区 土坑 S43	14	乾元大寶	958 始鋳	C-5 区 包含層
5	祥符□寶	1008 始鋳	C-7 区 包含層	15	寛永通寶	1625 始鋳	調査区西半
6	皇宋通寶	1039 始鋳	C-5 区 井戸 S40	16	寛永通寶	1625 始鋳	調査区西半
7	嘉祐元寶	1056 始鋳	A-7 区 柱基礎撹乱 S2	17	寛永通寶	1625 始鋳	A-6 区 土坑 S94
8	熙寧元寶	1068 ～ 1077 鋳	C-5 区 包含層	18	寛永通寶	1625 始鋳	C-2 区 土坑 S36・39
9	元豊通寶	1078 始鋳	C-5 区 井戸 S40	19	（大黒絵銭）	江戸時代	A-2 区 柱基礎撹乱 S8
10	紹聖元寶	1094 ～ 1097 鋳	C-5 区 井戸 S40	20	（無銘鉄銭）	室町時代以前	C-5 井戸 S40

第 1 表　銭貨一覧表

銘不詳ながら北宋銭らしいものも別に 1 枚あった。唐銭は「開元通宝」が 2 枚である。皇朝十二銭の「延喜通宝」と「乾元大宝」が 1 枚ずつある。江戸時代の「寛永通宝」は 4 枚出土した。15 は「古寛永」と見られ、16 の背面には「文」字がある。また、通貨ではないが、大黒天の姿を表した江戸時代の「絵銭」も出土している。なお、銘は認められないが穴開き銭の形状をした「鉄銭」が井戸 S40 から出土している。遺構の年代からは、室町時代以前のものと思われる。

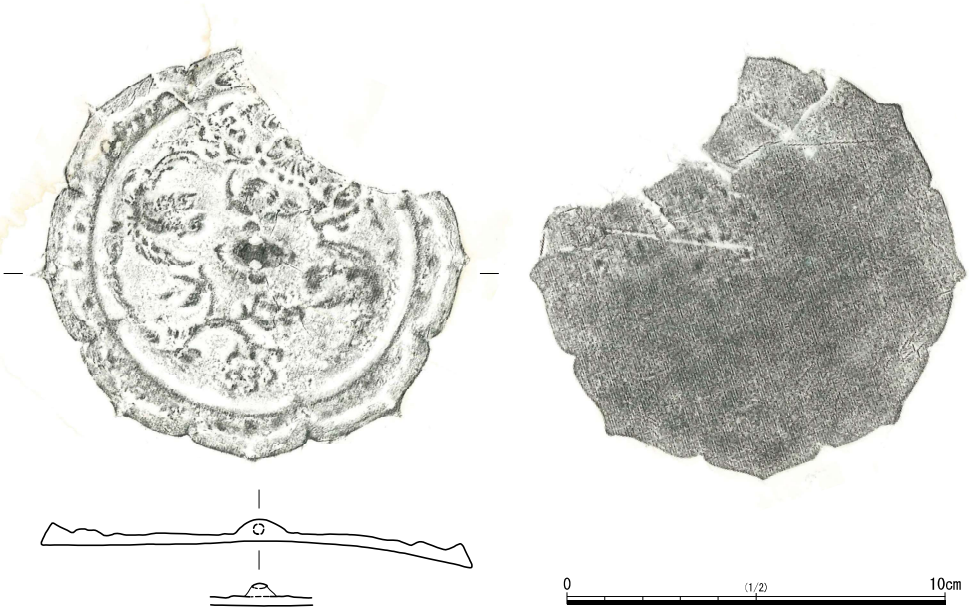
【銅鏡】（第 57・58 図、図版 26・27）

B-4 区の鎌倉時代遺物包含層から、一部を欠損しただけの八稜鏡が鏡背面を下にして出土した。鏡面径は、稜の先端間で 11.7㎝、外縁の高さは 0.7㎝である。外縁の断面形は三角形になる。外形の八稜形は単位の幅が一定ではなく、厳密に 8 等分に割り付けたものではない。出土時点では全体錆に覆われていたが（第 40 図）、錆落とし後は錆化が進んでいる部分があるものの、やや黄色味を帯びた金属光沢も見え、状態は比較的良好である。

鏡背文様の外区は内区より段差をつけて、内外区の界としている。この段は単に円形ではなく、外形の八稜形のひとつおきに合わせた内向きの 4 箇所の突起を持つ。外区の文様は本来、唐草文や飛雲文などが表されるが、この鏡では退化して珠文のようになっている。内区文様は瑞花双鳳文の一種であろう。2 羽の鳥は翼を広げて尾が後ろに長く延び、頭を中心に向けて、振り返るように表されている。不明瞭ながら、片足は体の前に、もう一方の足は後ろに蹴るように表されているらしい。鈕は楕円形で、鈕座は四葉花である。文様には退化の傾向も認められるが、年代は 10 世紀代の製作と考えられる。

第 57 図　瑞花双鳳八稜鏡（出土時）

なお、鏡面側の欠損部に近いところに、工具による浅



第 58 図　瑞花双鳳八稜鏡実測図

く細い刻線が 2 筋認められる。あるいは欠損部は、この線を目安に折り取られたようにも思われた。

【懸仏】（第 59 図 1、図版 27）

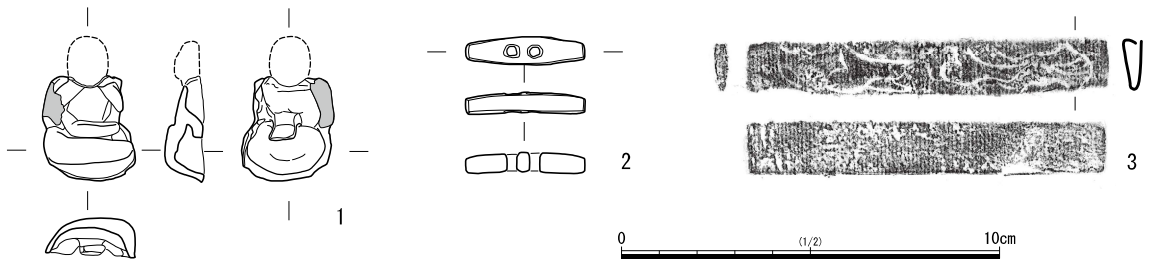
A・B-5 区の包含層から出土した小さな如来形の仏座像である。結跏趺坐し膝上で手を組んでいる。頭部は失われている。半丸彫りの鋳銅製品で、鋳上がりはあまり鮮明ではない。頭部は失われている。幅は 2.4㎝、残存高は 2.8㎝、膝部で盛り上がりは 0.9㎝である。背面の凹部に小さな取手があり、この像は鏡形に取り付ける懸仏と見られる。

【笠鋲】（第 59 図 2、図版 27）

C-5 区の包含層から出土した。長さ 3.1㎝、幅 0.7㎝、厚さは 0.4㎝である。おそらく、甲冑の金物で装着の際に胸板と肩上をつなぐ部分の「ボタン」である笠鋲であろう。

【江戸時代の銅製品】（第 59 図 3、図版 27）

C-5 区の江戸時代整地層から、刀の付属品である小柄の柄（袋）が出土した（第 59 図 3、図版 25）。長さ 9.5㎝、幅 1.2㎝である。片面に文様が刻まれているが、題材はよくわからない。また同じ層からは、煙管の雁首や吸口も出土している。



第 59 図　銅製品実測図

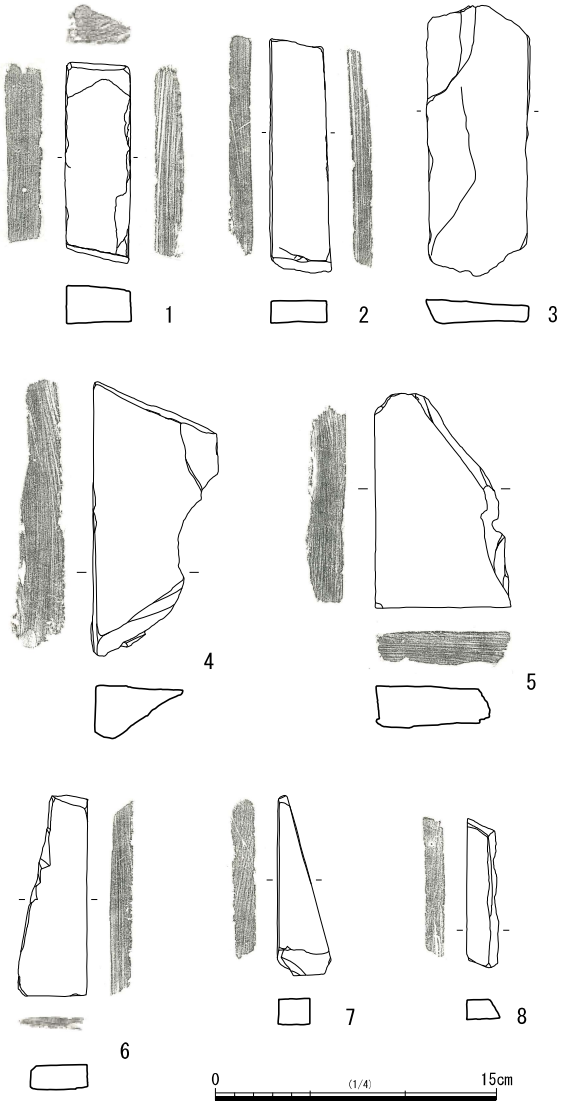
(2) 石製品

【砥石石材】(第 60 図、図版 28)

今回の調査で出土した石製品で特に目立ったのは、砥石の未製品と端材である。石材は多くが黄白色の粘板岩で、やや赤みの強いものもある。これらはコンテナバットにして 1 箱分程度で、破片数では 500 点余りの量があり、この中では、研いで使用した痕跡のある石は見当たらなかった。ほとんどの石には側面に鋸による挽き目が認められる。未製品らしいものは両側面に切断痕があり、幅が 3 ～ 4.5㎝程度で、長さは 10㎝前後である。製作途中に割れたり、剥離したため廃棄されたもののように思われる。

およそ調査区全体から出土しているが、石材が特に多く出土したのは、15 世紀の遺構と見られる A・B-5 区の井戸 S74 (74 点)、B-5 区の井戸 S95 (22 点)、A-5 区の土坑 S143 (61 点) であった。

第 60 図 1・2 は長辺の両側に切断痕の挽き目が残る。1 は幅 3.4㎝、2 は幅 2.8 ～ 3.1㎝で、加工途中の未製品だったと見られる。2 は片面のみ滑らかに磨かれている。3 は幅 5.2㎝、両側面は浅く挽き目が入る割り面で、全体に薄く片面は自然の剥離面であるため、これは未製品というより端材になるかもしれない。4 ～ 8 は、いずれも原石から製品になる部分を切り取ったあとの端材である。

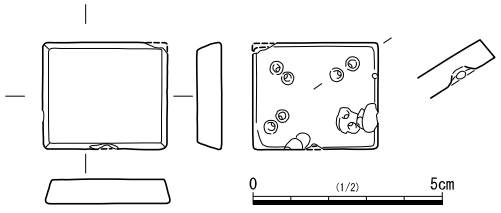


第 60 図　砥石石材実測図

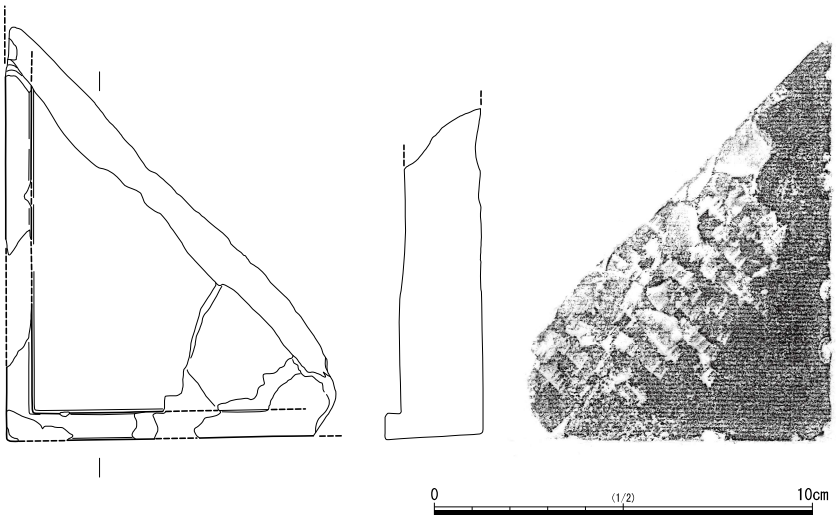
【その他の石製品】(第 61・62 図、図版 28)

B-7 区の包含層から石帯の巡方が 1 点出土した (第 61 図)。黒色の石材で、縦横 2.8 × 3.3㎝、厚さ 0.6㎝である。表面と四方の側面は滑らかに磨かれており、裏面の四隅に、帯革に縫い付けるための糸通しの穴が開けられている。

B-3 区の江戸時代の落込み遺構 S73 から石硯が出土している (第 62 図)。赤紫色を呈する石材で、陸部分の周囲に縁が廻る。破片のため縦横の長さはわからないが、縦の残存長は 10.7㎝である。裏面の周囲は平坦に仕



第 61 図　石帯実測図



第 62 図　石硯実測図

上げられているが、中央部がごくわずかに窪み、ノミの痕をみせている。

C-2 区の柱基礎撹乱坑 S7 から、長さ 4.5㎝の石核状の青色チャートが出土した。稜線部分が随所で細かく潰れていることから、火打ち金の鉄片と打ちあわせる「火打ち石」と見られる（図版 28）。現代の撹乱坑からの出土であるが、これは江戸時代の遺物であろう。

なお、S146 から出土している滑石製石鍋（第 30 図 15）は、石鍋片を「温石」に加工したもので、切断痕があり径 3㎜ほどの孔が 2 箇所に開けられている。

註

1) 小森俊寛・大洞真白「石清水八幡宮と男山文化圏」（『遺跡学研究』第 8 号、日本遺跡学会、2011/3/31）
2) 大洞真白・小森俊寛『上津屋遺跡発掘調査（第 5・7・8 次）概報』（『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』36、八幡市教育委員会、2003/3/31）
3) 平安京左京五条三坊の既調査で室町時代後期の土坑 SK1570 からの出土品として、土師器丸底小鉢が多数報告されている（『平安京左京五条三坊発掘調査報告』〔関西文化財調査会、1998/3/2〕）。この資料は、少し体部が膨らみ全形は丸味をおびたものであるが、大きさは今回の出土例と近似的で、内面の平滑な痕跡や外面のハケ目痕および丸底である点などの型式特徴は共通している。五条三坊の資料には、内面にもハケ目痕が所々に残りハケ目の凹内にはススが付着している個体が幾つもあり、丸底小鉢が油煤取り道具の可能性があることを知ることが出来た資料であった。しかし、今回出土の土師器丸底小鉢にはススが付着しているものはなく、土師器丸底小鉢は別用途での使用もあった可能性も十分あり、検討の継続が必要だろう。
4) 小松武彦・田中利津子『史跡賀茂御祖神社境内』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』2010-14、京都市埋蔵文化財研究所、2010/3/31）
5) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京北辺四坊　第 1 分冊（公家町形成前）』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第 22 冊、京都市埋蔵文化財研究所、2004/1/30）
6) 『御蔭祭大宮河合社御蔭社献備神饌之図』（江戸時代、賀茂御祖神社蔵）

第５章　調査の成果

今回の調査で検出した遺構・遺物は、年代的に粗密はあるがほとんどの時代にわたり、少なくとも平安時代から現代までは、当地でほぼ切れ目なく何らかの営みが続いていたことがわかる。

遺構の種類では井戸が目立ち、12 世紀末 -13 世紀代と 15 ～ 16 世紀代および 18 ～ 19 世紀代の井戸が多く、これらの時期に特に活動が盛んであったことが窺える。なお、14 世紀には調査地の一部は墓地になっていたようである。

遺物は各時期とも土器・陶磁器類が量的に多く、また必ずしも遺構に伴わない遺物にも鋳造に関するものなど、この遺跡の性格の特徴を表す資料が含まれている。そこで、今回の調査成果として出土遺物についての状況を整理し、まとめとしたい。

1.　土器・陶磁器類について

出土遺物の全体像を土器・陶磁器を中心に、定性的にではあるが概括しておく。遺構や包含層の検出はなかったが、奈良時代以前の遺物としては、弥生時代後期から古墳時代初頭頃に位置付けられる畿内Ⅴ様式系の弥生土器、および 7 世紀から 8 世紀前半頃に位置付けられる土師器、須恵器が少量出土している。

調査地においては、平安京域内となる 8 世紀末以降に出土遺物が多くなる。平安時代前期（8 世紀末～ 9 世紀）から中期前半（10 世紀）頃の遺物は土師器・須恵器の他、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器など京域内で一般的に出土する土器・陶磁器類は全種見られる。輸入陶磁器や緑釉・灰釉陶器等、一般的に当時の高級品と見られるものも多数含むが、緑釉陶器は山城系等が主体で、品質の点では京域内で中～下級品と見られるものが中心のようである。なお、少数であるが瓦類や皇朝十二銭、石帯巡方などもある。土器・陶磁器を中心とした平安時代前半期の遺物は小片ながら量も多様性もそなえているが、この時期の遺構や包含層が検出されておらず、平安時代後半期以降の新しい時代の整地層や遺構内への混入品としての出土である。

平安時代中期の半ば頃以降になると遺構や整地層からのまとまった形での土器の出土例も見られるようになるが、全体的な出土量の増加は中期末～後期（11 世紀末～ 12 世紀初）初め頃からで、平安時代後期前半あるいは中葉以降（12 世紀半頃）には出土量の増加がより明確なものとなる。平安時代後期頃には造られていただろう複数の井戸から、平安時代後期末（12 世紀後半）から鎌倉時代初頭（12 世紀末）頃に埋没したと言える遺物が出土している。整地土層や土坑等の遺構からの出土遺物数は、この頃以降に大きく増加しているようである。平安時代中期後半（11 世紀）から後期（11 世紀末～ 12 世紀）の遺物は形態変化が進んでいるが、

厚手化した皿類を中心とした土師器食器類が圧倒的多数を占めるものの、甕等の土師器煮炊具はほとんど見られなくなっている。一般的に中期後半の 11 世紀中頃前後から、中国華南産を中心とした碗・皿・壺・水注・合子等の白磁類の増加が注目されるが、当調査地でも同様にこの時期には白磁食器を中心とする輸入陶磁器が多数出土する。

この時期の最終段階となる平安時代末期の 12 世紀に入ると 13 世紀以降につながる変化が明瞭となってくる。土器では瓦器煮炊具の三足の鼎形釜や少し遅れて鍋類の量的登場であり、当調査地でも 12 世紀後半期には明確な変化の一様となっている。12 世紀後半代の平安時代末期から鎌倉時代初頭頃には、中国の同安窯や龍泉窯の青磁の碗・皿も出土が見られるようになる。土器・陶磁器類では、楠葉産の瓦器盤の登場や土師器の製塩土器風の鉢などが平安時代末期以降ここでも出現している。

平安時代最末期となる 12 世紀後半期から 14 世紀前葉の鎌倉時代、および 14 世紀中葉頃から 15 世紀半ば過ぎの室町時代前半頃までの中世前半期に話を進める。皿を中心とする土師器食器類は、平安時代以来の様相を受け継ぎ、土器・陶磁器全体の中にあっても常に量的主体を占めて京都の都城的土器・陶磁器の基となっている。しかし鎌倉時代には土師器食器類の中に白色系の土師器食器類がはっきりと登場し、赤橙色系の伝統的土師器とともに、白色系と赤橙色系の２種類で主体が構成されるようになる。当調査地の鎌倉時代の遺構出土土師器食器類にもその変化が明確となるが、鎌倉時代前半期頃までの白色系の増加は京域内他地域より少し遅れて進むように見えるが、同後半期では白色系が赤橙色系とほぼ対等になる状況を呈すると見てよいだろう。14 世紀に入ると白色系土師器は華奢で、より薄くきれいな白い土器として定型化し、赤橙色系土師器は赤さの増したものが多くなり、口縁部は内湾的形態から外反的尖がり気味の形態へと変化している。

当地において平安時代後半期に多かった中国からの輸入白磁類は減少し、鎌倉時代から室町時代前半のこの時期には中国龍泉窯の蓮弁文を主体とする青磁の碗・皿・壺・香炉等が中心となり鉄釉や褐釉陶器の割合も増える。輸入陶磁器全体の出土量も増加しているようである。

12 世紀後半期に登場した瓦器の釜や、瓦器の鍋や火鉢等も使用されたと見てよい。瓦器の盤類等も、この時期には土器・陶磁器の組成の中に一定の位置を占めている。瓦器の埦や皿・坏類はある程度共伴出土するものの量的には多くない。これらの各種瓦器類は 13 世紀から 14 世紀半ば頃までは楠葉産が中心であり、和泉産や奈良産は少ない。しかし 14 世紀後半以降、楠葉産の盤類は奈良産の火鉢にほぼ全面的に取って代られるが、火鉢以外の瓦器はその後の 15 世紀から 16 世紀でも楠葉産が主体的である。

また、この時期の前半となる 13 世紀から 14 世紀では、須恵器の鉢や中小甕は残るが陶器では常滑産を主体とする焼き締め陶器類が多くなる。14 世紀後半から 15 世紀頃では焼き締め陶器の甕・壺・擂鉢に備前産が進出し、国産施釉陶器も灰釉・鉄釉（天目茶埦も少し含む）を中心に、この時期には瀬戸美濃の陶器が一定量出土するようになっている。逆に中国から

の輸入陶磁器類は 14 世紀後半から 15 世紀前半頃には一時激減するようだ。

このように土器・陶磁器類は、14 世紀のいわゆる南北朝頃を境に古代から続いた分が大きく変質するか消えて行き、近世へつながる大きな変化が進むように見える。

この中世前半期とも言える時期の出土遺物には、上述してきた常用品や上級品以外に生産に関わる遺物類が見られるようになる。当地では、鋳型やルツボなど銅の鋳造関係品が出土した。鎌倉時代から室町時代前半期の土地利用のあり方とその利用者の主体は、平安時代とは大きく様変わりしたと理解される。出土遺物の様相や井戸密度の高まり等から、この時期以降の当地の利用者は、中小の各種の生産者が主体となっているようである。この地域は、多数の商工業者が集住する七条町の一角を占めると見てよいと考えている。

なお、この時期の後半期となる 14 世紀後半から 15 世紀前半頃に位置付けられる遺構には複数の墓と見られる土坑が確認されている。副葬品の土師器を主体とする遺物は、他の遺構出土遺物との大きな様相差を見いだせない。この町の人々は、生産を含む居住地の近接地に一時だろうが墓を営んでいたものと考えられる。

いわゆる応仁の大乱以降の中世後半期となる室町時代後半代（15 世紀後半～ 16 世紀）から、近世初頭となる桃山時代～江戸時代前期（16 世紀末～ 17 世紀）までは大きな変化を内包しているが、前代の中世前半代に形成された商工業的な都市様相を受け継いでいると見てよいだろう。しかし、応仁期頃から後の比較的安定した時期であるが、出土遺物は極く少ないように見える。16 世紀に入ると遺物は多くなっている。

この 15 世紀後半から 16 世紀半ば過ぎの室町時代後半期には、土師器食器類は出土単位での量的な主体性は保持しているが、型式変化は大きく進む。より浅い皿形化と白色系が占める位置が大きくなり、赤橙色系はより小型化し、色調も淡橙色から褐色へ戻っており、補助的位置へと後退したように見え、京の他地域とも共通した変化を示す。室町時代末期の 16 世紀前半頃には新しい定型化を遂げるが、近世桃山時代から江戸時代にまで受け継がれている。江戸時代前期後半頃以降の土師器食器の減少傾向が当地でも進むようである。

16 世紀の輸入陶磁器類は、中国の明からの青磁と少量の天目茶垸や白磁は一定量の出土が見られ、染付には 16 世紀末から 17 世紀前半頃の明末の碗皿が含まれている。室町時代後半期からの瀬戸美濃産の灰釉陶器や天目茶垸を含む鉄釉陶器類等の国産施釉陶器類も多くなるが、唐津等は 17 世紀に入らないと出土が見られない。

備前産の焼き締め陶器類は、室町時代末期の 16 世紀以降は擂鉢が大きく増加するが甕・壺は少なくなるようだ。江戸時代前半頃以降の信楽産は、鉄釉（泥）を施したものが中心となっている。17 世紀中頃以降は、染付を中心とした国産の施釉陶磁類も増加して、近世的土器・陶磁器様相で主要な位置を占めている。京焼の増加も加わり、17 世紀後半以降は国産施釉陶磁器の時代である。

土製煮炊具は、室町時代末期の 16 世紀前半頃までは楠葉産の瓦器鍋釜が使われているが、16 世紀後半には激減し、16 世紀後半から 17 世紀には、奈良系の土師器焙烙等が残るだけと

なっている。瓦器は、火消し壺や火鉢・香炉等の火まわり品として続いている。

2. その他の遺物について

【瓦類】

今回の調査で得られた瓦類は、量的には多くないが平安時代から江戸時代までのものがあった。江戸時代以前の瓦類は調査区の各所から少量ずつ出土していて、瓦溜のように集中して出土することはなかった。平安時代の軒瓦は、瓦当文様の残るものはいずれも 12 世紀代の栗栖野瓦窯産と見られる。瓦当部を欠失する軒瓦や丸・平瓦にも栗栖野瓦窯産と考えられるものが目立った。少数ながら、後期の瓦には丹波・播磨・讃岐など平安京周辺の瓦窯産以外の瓦もある。平安時代前期～中期と見られる瓦も出土しているがごく少数で、ここでは平安時代後期の瓦が主体になっている。瓦の量が多くないため、平安時代後期の調査地周辺に何らかの瓦葺建物のあった可能性が考えられる程度であった。

江戸時代の瓦類は数カ所で瓦溜などから纏まって出土した。量的には必ずしも多くはないが、大半が江戸時代前半期と見られる本瓦葺の瓦類で、第 49 図 7 など桃山時代の瓦も含まれていた。これも調査地近くに瓦葺建物のあったことが想定できるが、年代的に見ると、調査地から距離的に近い本願寺と関係する施設の可能性も考慮できるかも知れない。

【鋳造関係遺物】

平安京の左京八条二・三坊あたりの発掘調査では、平安時代後期から室町時代前期頃にかけての鋳造に関する遺物が多く出土する。今回も、鋳型やルツボなど銅製品の鋳造関係遺物が出土し、既往調査の状況と同様であった。今回出土した鋳型は、判別できるものでは刀装具と鏡があった。他にもやや大型の製品の鋳型と思われるものもあるが、細かく砕けていて形はわからなかった。刀装具や鏡は単なる日用品ではなく、いわゆる付加価値の高い品で、当地では主にこのような品を製造していたと考えられている。鋳造関係遺物は大半が包含層や後世の遺構からの出土であるため年代を特定しにくいが、トリベに用いられていた土師器皿がいずれも 14 世紀末頃とみられるため、他の鋳造関係遺物もこの年代のものと思われる。鏡の鋳型には 1 点だけ江戸時代のものもあったが、他には特に時期差の認められるものはなかった。

今回の調査では直接に鋳造工房の跡を検出したわけではなく、鋳造関係の遺物の量も多くはないが、七条界隈に営まれていた鋳造工房群の範囲と年代に関する一つのデータは得られたかと思われる。なお､今回出土した銅製品に懸仏や甲冑金物らしい鞢があるが､これらも「付加価値の高い品」であり、当地で作られていたことも考えられる。

また、包含層中からではあるが平安時代の銅製八稜鏡が出土した。この八稜鏡は 10 世紀代の鏡と考えられるもので、当地での製作品ではなかろう。この鏡は､「東市」「七条町」の隣接地として物資の集積・流通に関わるもの、あるいはここに居住していた富裕層の生活用品、

といった可能性もあろう。調査地周辺では、平安時代前～中期の緑釉陶器や輸入陶磁器類などの高級品や銭貨の出土も多い。ただし、別の用途の可能性も考えられる。鋳造の「原料」としての使いみちである。この鏡が出土したのは、鎌倉～室町時代の遺物を含む層の掘り下げ時であった。同時に出土した遺物に確実な鋳造関係のものはなかったが、この鏡が出土時点から一部が意図的に折り取られたように欠失していたことが気にかかる。不用になった金属製品は鋳つぶして原料にされるが、これもそのようなものであった可能性も考えたい。

【砥石石材】

今回出土した石製品の中で注意されるのは、砥石の石材片が多数あったことである。調査区各所から出土し、小片を含むと数百片におよぶ。同様の石材で完成品や使用痕のあるものはなく、いずれも剥離した未製品と、切り捨てられた端材であった。原石は、おそらく近年まで砥石の産地であった京都市右京区の梅ヶ畑あたりで採取されたものであろう。石材片が比較的集中して出土したのは、A･B-5 区の井戸 S74、B-5 区の井戸 S95、A-5 区の土坑 S143 で、これらの遺構の年代観はおよそ 15 世紀代である。散布状況から見て、このような端材片が離れた場所から流れてきたことは考えにくく、室町時代のこの時期に、今回の調査地あるいは近隣に原石から砥石の形に加工し、また販売する「砥石屋」というべき工房があったと思われる。これも「七条町」辺の生業の多様さを表す例になろう。

参考文献

【調査地周辺の発掘調査報告書】

1. 『平安京左京八条三坊』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第 6 冊、京都市埋蔵文化財研究所、1982/5/31)
2. 下條信行・川西宏幸編『平安京左京八条三坊二町』(『平安京跡研究調査報告』第 6 輯、古代学協会、1983/7/31)
3. 堀内明博「15 左京八条二坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 57 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1984/3/1)
4. 寺島孝一編『平安京左京七条三坊五町』(『平安京跡研究調査報告』第 15 輯、古代学協会、1985/3/31)
5. 定森秀夫編『平安京左京八條三坊二町 －第 2 次調査－』(『平安京跡研究調査報告』第 16 輯、古代学協会、1985/3/31)
6. 小森俊寛「7 平安京左京七条二坊・八条二坊」、上村和直・久世康博「8 平安京左京八条二坊」、上村憲章・小森俊寛「9 平安京左京八条三坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 60 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1988/3/31)
7. 鈴木忠司編『平安京左京八条三坊七町 －京都市下京区東塩小路町－』(『京都文化博物館 (仮称) 調査研究報告』第 1 集、京都文化財団、1988/3/31)
8. 小森俊寛･原山充志「8 平安京左京七条二坊･八条三坊」、「10 平安京左京八条三坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 61 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1989/3/31)
9. 木下保明「15 平安京左京八条二坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 62 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1991/12/5)

10. 平尾政幸「15 平安京左京八条三坊 1」、木下保明「16 平安京左京八条三坊 2」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 2 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1994/12/10)
11. 網　伸也「8 平安京左京八条三坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 5 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1996/3/1)
12. 鈴木廣司・山本雅和「8 平安京左京八条三坊 1」、網　伸也他「9 平安京左京八条三坊 2」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 6 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1996/11/1)
13. 百瀬正恒「4 平安京左京八条二坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 7 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1997/3/31)
14. 東　洋一・南出俊彦「6 平安京左京八条二坊 1」、南出俊彦・久世康博「7 平安京左京八条二坊 2」、山本雅和「8 平安京左京八条三坊 1」、上村和直他「9 平安京左京八条三坊 2」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 8 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1998/3/31)
15. 加納敬二・真喜志悦子「6 平安京左京八条二坊 1」、鈴木廣司「7 平安京左京八条二坊 2」、上村憲章「8 平安京左京八条三坊 1」、上村憲章「9 平安京左京八条三坊 2」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 9 年度、京都市埋蔵文化財研究所、1999/3/31)
16. 近藤章子「5 平安京左京八条二坊」(『京都市埋蔵文化財調査概要』平成 11 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2002/6/30)
17. 網　伸也編『平安京左京八条二坊十五町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2003-17、京都市埋蔵文化財研究所、2004/4/30)
18. モンペティ恭代編『平安京左京八条二坊三町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-11、京都市埋蔵文化財研究所、2006/10/31)
19. 木下保明・近藤章子・西森正晃編『平安京左京八条四坊四・五町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-20、京都市埋蔵文化財研究所、2007/3/15)
20. 日開調査設計コンサルタント編『平安京左京八条二坊十五町』(『株式会社 日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書』第 1 集、日開調査設計コンサルタント、2007/3/30)
21. 近藤章子編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-2、京都市埋蔵文化財研究所、2007/7/31)
22. 古代文化調査会編『平安京左京八条三坊九・十町 - 七条町の調査 -』(古代文化調査会、2007/10/31)
23. 木下保明編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-18、京都市埋蔵文化財研究所、2008/3/31)
24. 近藤奈央編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-1、京都市埋蔵文化財研究所、2008/4/30)
25. 西森正晃・前田義明編『平安京左京七条四坊四町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-6、京都市埋蔵文化財研究所、2008/9/30)
26. 「5 平安京左京八条三坊二町」(『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 51 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2008/9/30)
27. 濱口芳郎・仲道裕・大橋裕子編『平安京左京七条二坊十一町（東市外町）発掘調査報告書 龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査』(龍谷大学、2009/3/31)
28. 小檜山一良・尾藤徳行編『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2009-1、京都市埋蔵文化財研究所、2009/6/30)
29. 前田義明編『平安京左京八条三坊九町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2009-12、京都市埋蔵文化財研究所、2010/3/31)

30. 濱口芳郎・仲道裕・大橋裕子編『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 龍谷ミュージアム建設に伴う発掘調査』（龍谷大学、2010/3/31）
31. 山本雅和編『平安京左京八条三坊九町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2010-6、京都市埋蔵文化財研究所、2010/9/30）
32. 濱口芳郎・仲道裕・河野凡洋・大橋裕子編『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 龍谷大学大宮学舎白亜館建設に伴う発掘調査』（龍谷大学、2011/3/31）
33. 「18 平安京左京八条三坊一町」（『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 52 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2011/9/30）
34. 「23 平安京左京八条三坊二町 1」（『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 53 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2011/12/15）
35. 「24 平安京左京八条三坊二町 2」（『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 53 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2011/12/15）
36. 「27 平安京左京八条三坊二町」（『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 54 年度、京都市埋蔵文化財研究所、2012/3/31）
37. 近藤章子編『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2013-11、京都市埋蔵文化財研究所、2014/3/31）
38. モンペティ恭代編『平安京左京八条一坊十六町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2013-16、京都市埋蔵文化財研究所、2014/6/30）
39. モンペティ恭代編『平安京左京八条一坊十六町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2013-16、京都市埋蔵文化財研究所、2014/6/30）
40. 株式会社イビソク関西支店編『平安京左京八条二坊三町跡 －南夷町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第 11 輯、株式会社イビソク関西支店、2014/9/30）
41. 近藤章子編『平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2015-11、京都市埋蔵文化財研究所、2016/3/31）
42. 近藤章子編『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2015-12、京都市埋蔵文化財研究所、2016/3/31）
43. 『平安京跡・東本願寺前古墓群』（『京都府遺跡調査報告集』第 169 冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター、2017/3/28）
44. 山下大輝・李 銀眞編『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2017-7、京都市埋蔵文化財研究所、2018/3/15）

【一般書・論考】

45. 京都市編『京都の歴史』1（学芸書林、1970/10/10）
46. 京都市編『京都の歴史』2（学芸書林、1971/5/31）
47. 京都市編『京都の歴史』3（学芸書林、1968/10/10）
48. 京都市編『京都の歴史』4（学芸書林、1969/10/10）
49. 京都市編『京都の歴史』5（学芸書林、1972/4/20）
50. 京都市編『京都の歴史』6（学芸書林、1973/3/31）
51. 仲村　研「八条院町の成立と展開」（秋山國三・仲村　研『京都「町」の研究』所収、法政大学出版局、1975/10/17）
52. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 Ⅰ空間』（東京大学出版会、1989/11/25）

53. 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 Ⅱ町』（東京大学出版会、1990/2/25）
54. 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集 日本都市史』（東京大学出版会、1993/9/10）
55. 吉田 元「六条寺内町の酒屋」（『本願寺史料研究所報』13 号、本願寺史料研究所、1995/7/17）
56. 朧谷寿『平安貴族と邸第』（吉川弘文館、2000/11/1）
57. 上村和直「京都「八条院町」をめぐる諸問題 －出土漆器を中心として－」（『研究紀要』第 8 号所収、京都市埋蔵文化財研究所、2002/3/31）
58. 上村和直編『平安京左京北辺三坊四町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2002-9、京都市埋蔵文化財研究所、2002/9/30）
59. 織豊期城廓研究会 2018 京都研究集会準備会編『続 織豊期城廓瓦研究の新視点』（織豊期城廓研究会、2018/9/8）

【鋳造関係】

60. 杉山 洋「今様の鏡」と「古躰の鏡」- 出土八稜鏡より見た平安時代の鏡 -（『MUSEUM』第 481 号、ミュージアム出版、1991/4/1）
61. 網　伸也「和鏡鋳型の復原的考察　左京八条三坊三町・六町出土例を中心に」（『研究紀要』第 3 号、京都市埋蔵文化財研究所、1996/11/29）
62. 久保智康『中世・近世の鏡』（『日本の美術』第 394 号、至文堂、1999/3/15）
63. 山本雅和「平安京左京八条二坊十五町出土の銭貨鋳型」（『研究紀要』第 10 号所収、京都市埋蔵文化財研究所、2007/3/31）
64. 久保智康「花枝蝶鳥方鏡の鋳型 ～平安後期の銅鏡製作をめぐって～」（古代文化調査会編『平安京左京八条三坊九・十町 - 七条町の調査 -』古代文化調査会、2007/10/31）
65. 村木二郎「中世京都七条町・八条院町界隈における生産活動」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 210 輯所収、国立歴史民俗博物館、2018/3/30）
66. 村木二郎「中世における金属製品の生産と技術 －鉄鍋・銅鏡を例として－」（村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究叢書』5、「中世のモノづくり」所収、朝倉書店、2019/3/15）

【土器・陶磁器関係】

67. 大矢義明・玉村登志夫・永田信一・原山充志・平尾政幸・峰巍『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ 1974,75 年度』（京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1980/3）
68. 大矢義明・小森俊寛・永田信一・原山充志『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 1976 年度』（京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1981/3）
69. 小森俊寛・原山充志『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ 1977 ～ 1981 年度』（京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1982/3）
70. 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1981/7/30）
71. 小森俊寛「消費地の様相〈平安京〉」（中近世窯業調査課程講義資料、奈良国立文化財研究所、1990/6/21）
72. 古代の土器研究会編『古代の土器 1　都城の土器集成Ⅰ』（古代の土器研究会、1992/9/19）
73. 古代の土器研究会編『古代の土器 2　都城の土器集成Ⅱ』（古代の土器研究会、1993/10/2）
74. 小森俊寛「1 平安京の土器・陶磁器の概要」「2 土師器・黒色土器・瓦器」（『平安京提要』所収、角川書店、1994/6/15）
75. 古代の土器研究会編『古代の土器 3　都城の土器集成Ⅲ』（古代の土器研究会、1994/9/24）
76. 田辺昭三『陶邑古窯址群』（『平安学園研究論集』第 10 号、平安学園、1966/4）
77. 菱田哲郎『須恵器の系譜』（『歴史発掘』⑩、講談社、1996/9/27）

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうにぼうきゅうちょう
書名	平安京左京八条二坊九町
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第7集
編著者名	植山 茂、小森 俊寛
編集機関	有限会社 京都平安文化財
所在地	〒612-8018　京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4
発行年月日	2020年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとししもぎょうくあぶらのこうじどおり 京都市下京区油小路通 しもうおのたなさがるあぶらのこうじちょう 下魚ノ棚下ル油小路町 284、286、317-2	26106	1	34度 59分 17秒	135度 45分 13秒	2018年 6月26日 ～ 2018年 9月27日	280㎡	ホテル 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	平安時代 ～ 江戸時代	井戸、暗渠 墓、土坑	土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、鋳造関係遺物、銭貨、八稜鏡	

要約	今回の調査地では、平安時代の土坑なども検出されたが、遺構・遺物の年代観から、主に鎌倉～室町時代の営みが顕著に認められた。この時期の井戸が多数検出でき、連続して生活の場であったことがわかる。遺構は伴わないが鋳造関係遺物から、当地辺では銅製品の生産が行われていたこともわかった。その後、調査地の一部は墓地になり、江戸時代には町屋に替わっていく状況であった。

図　版

調査前（東より）

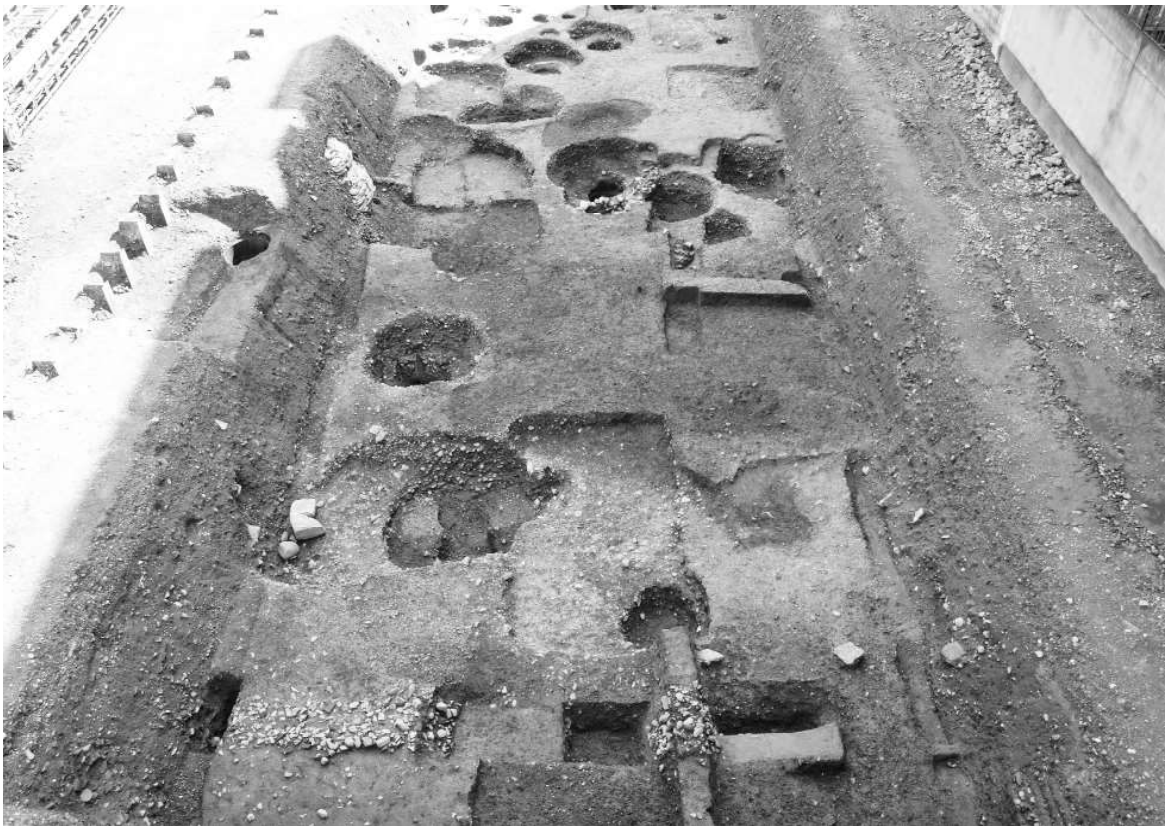
調査地から東を望む

図版2　遺構全景1

第1面（西より）

第1面（東より）

第2・3面（東より）



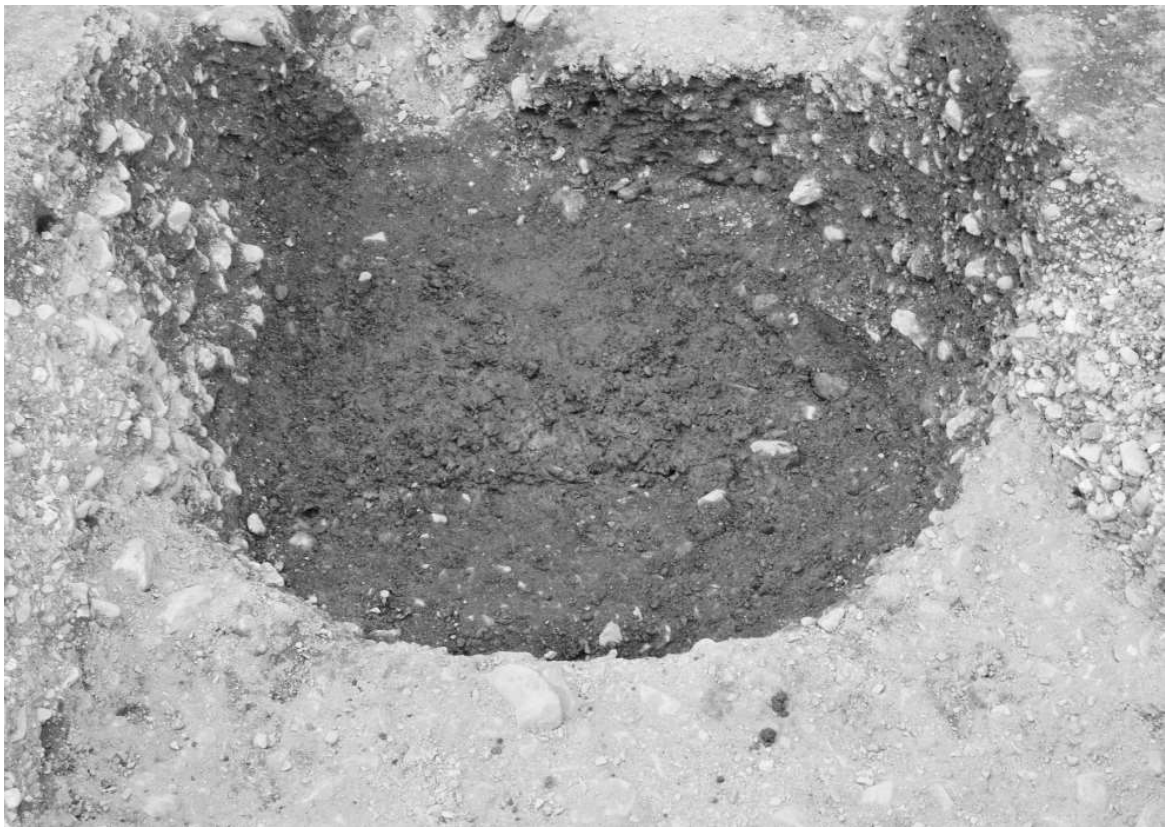
第2・3面（西より）

井戸 S153、上層遺物出土状態（西より）

井戸 S153、内部（南より）

井戸 S150（北より）

井戸 S151（北より）



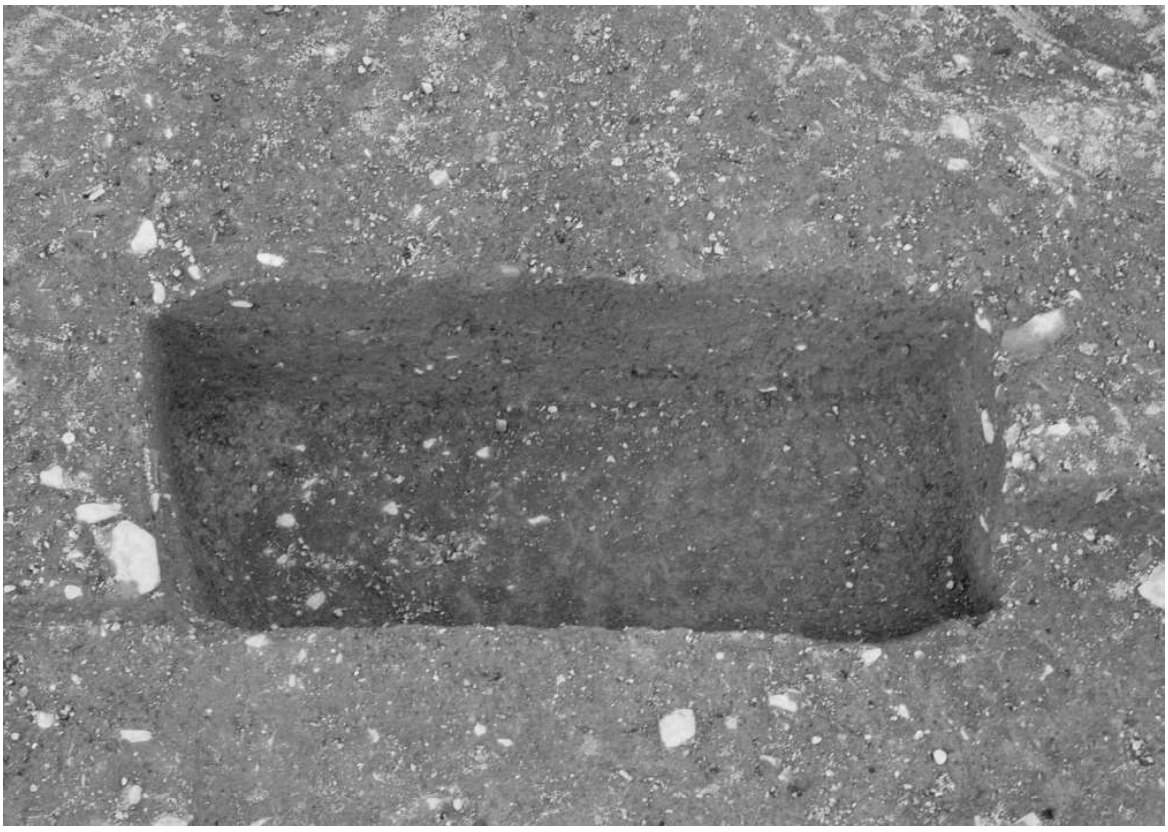
井戸 S112（西より）

井戸 S138（北より）

B・C-4・5 区、井戸群（南より）

井戸 S65（北より）

墓 S71、遺物出土状況（北より）



墓 S71、完掘状況（北より）

墓 S144、遺物出土状況（東より）

墓 S144、遺物出土状況（北より）

墓 S71 と S101（南より）

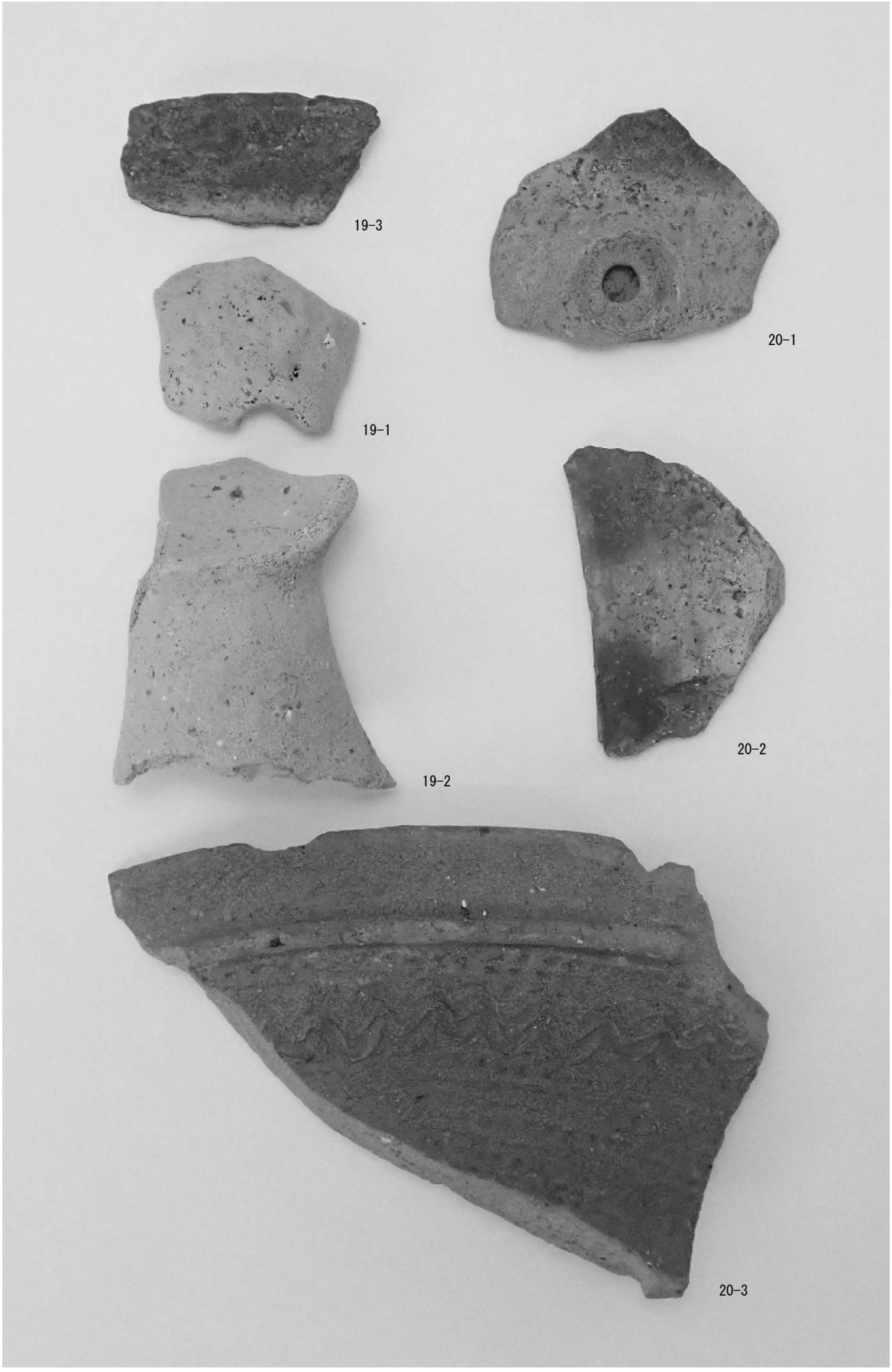
墓 S101（南より）

暗渠溝 S13（西より）

暗渠溝 S13（南より）

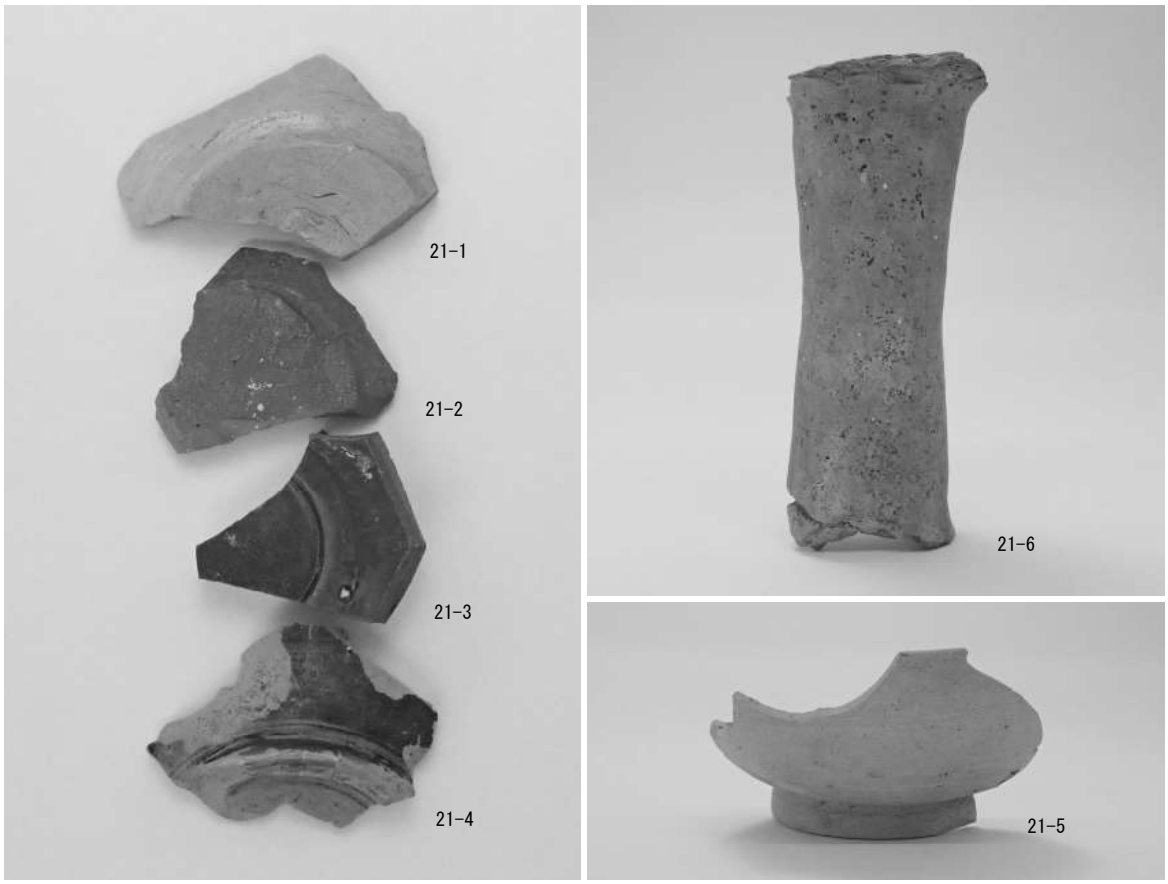
瓦溜 S25（北東より）

落込み遺構 S73 遺物出土状況（東より）

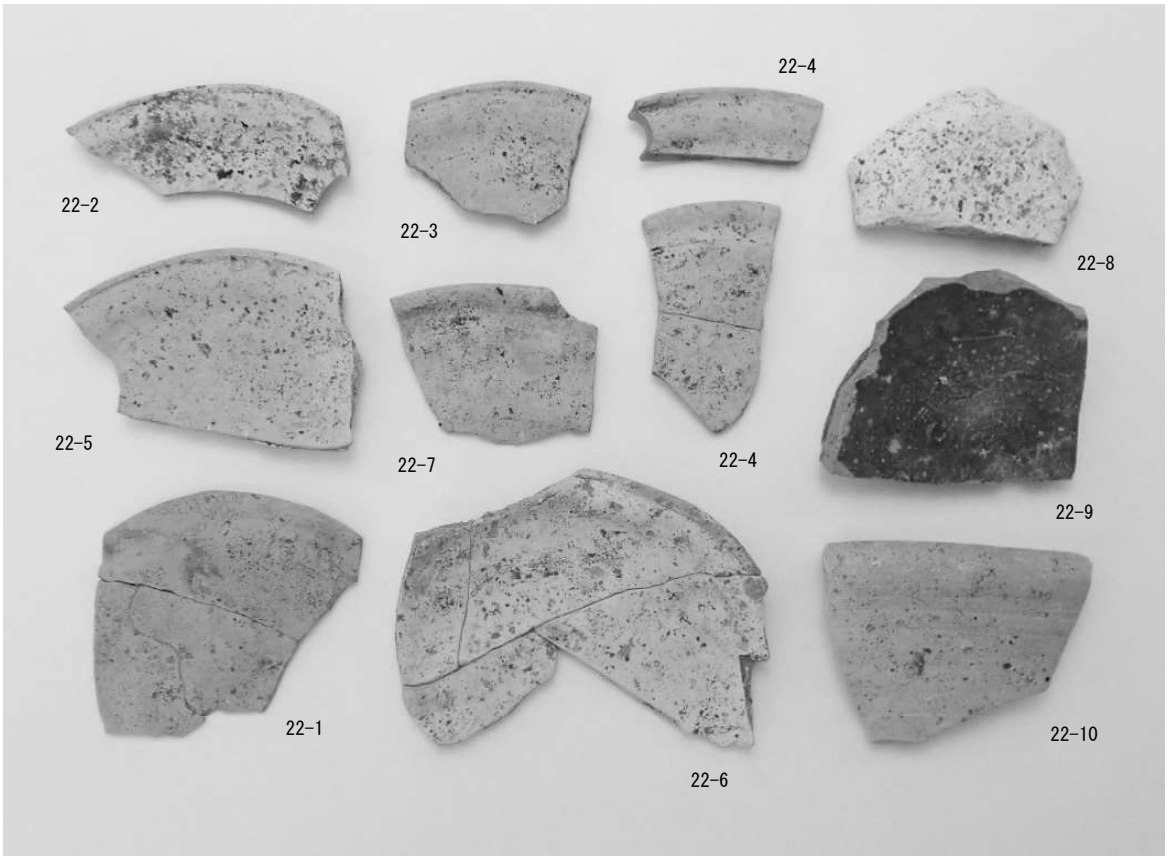


平安時代以前

図版14　出土遺物2（土器・陶磁器類2）



平安時代



落込み S104

28-3

28-4

28-6

28-8

28-29

28-17
28-16
28-12
28-18
28-11
28-20
28-14
28-21
28-19

井戸 S153

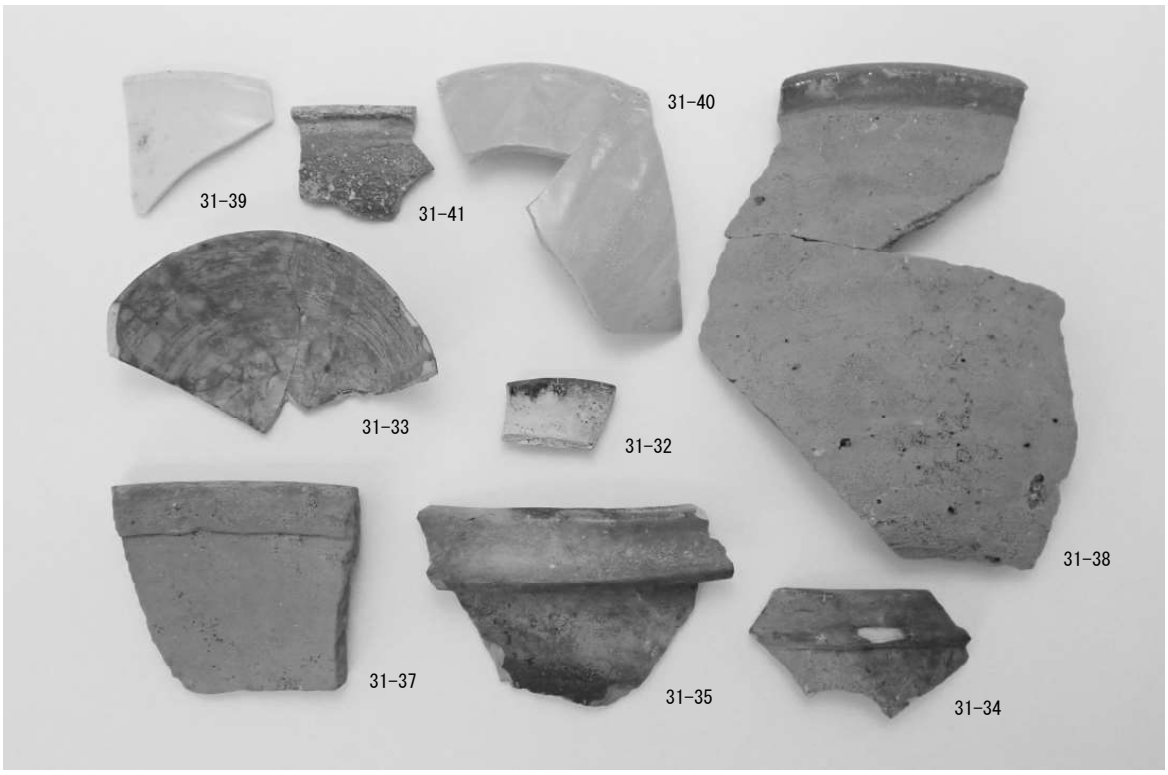
土抗 S124

土抗 S147

土抗 S155

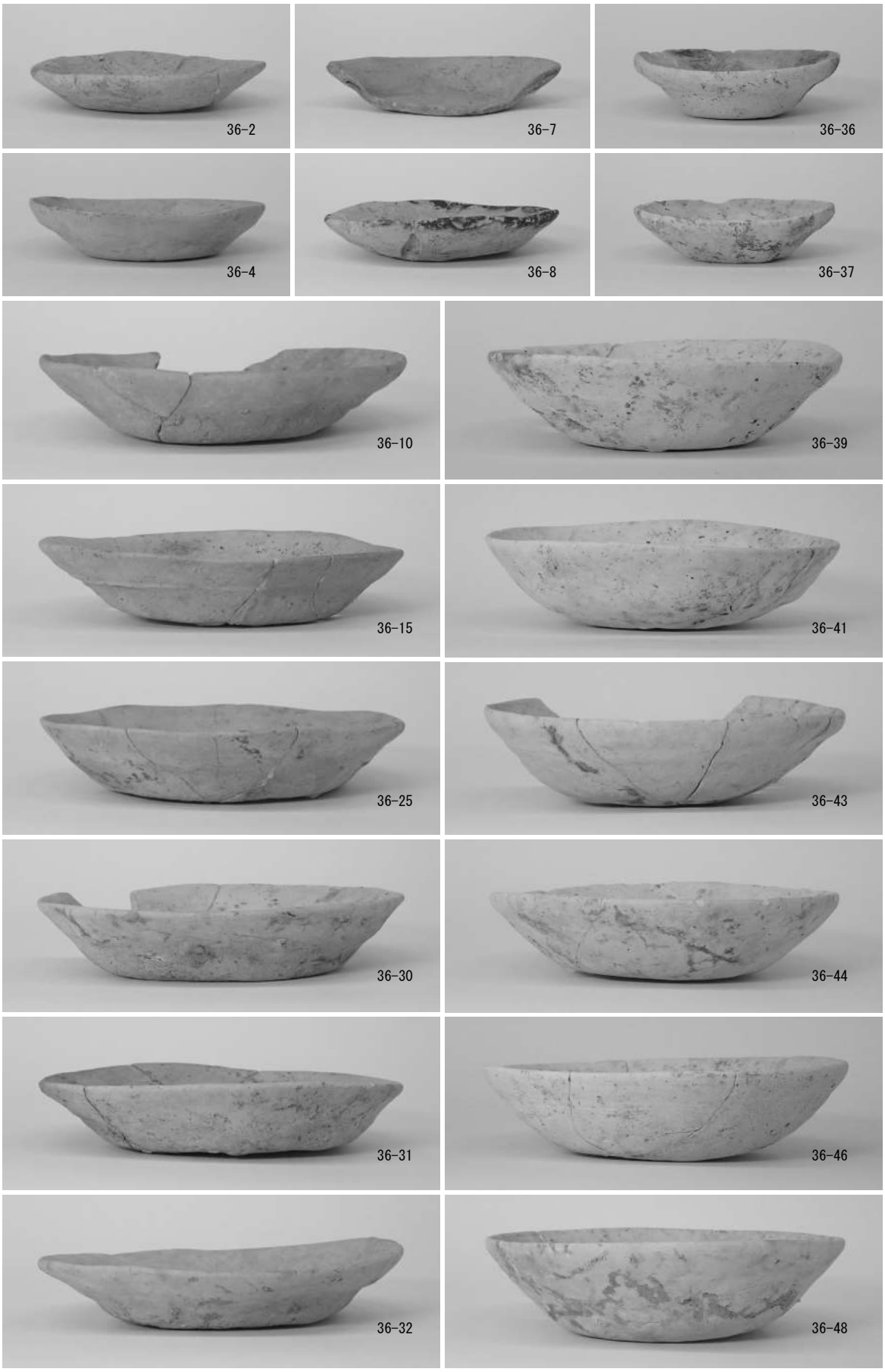
井戸 S139

井戸 S151

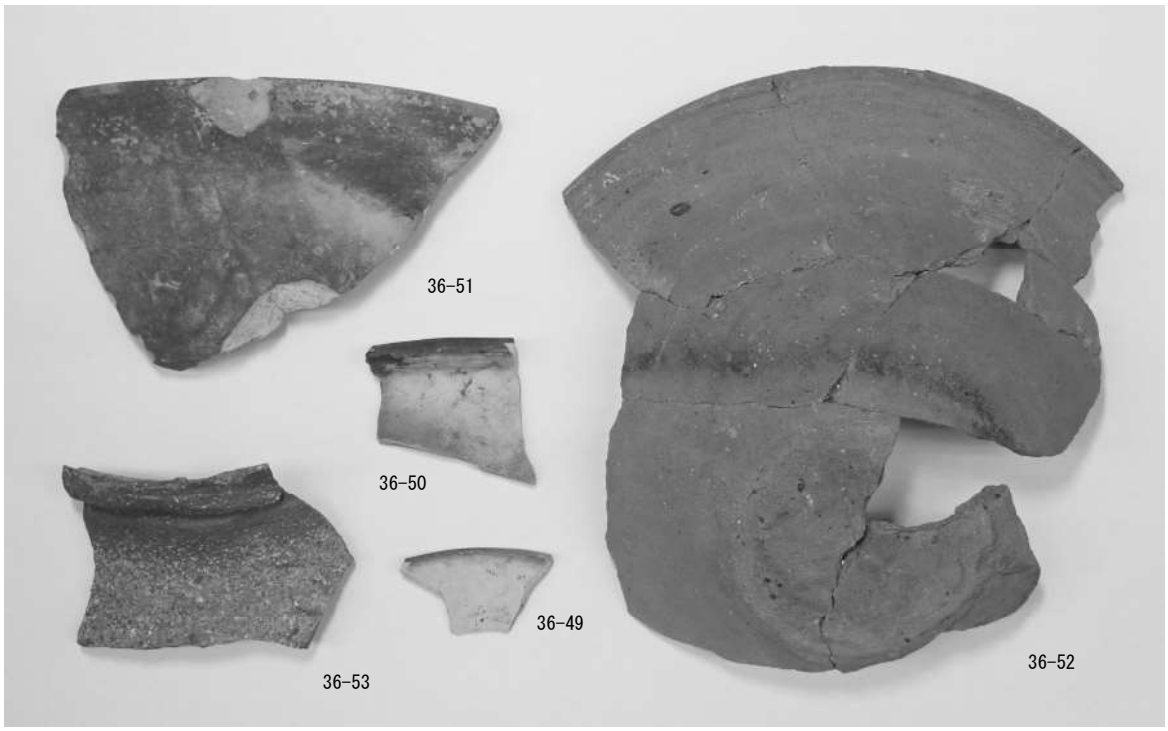


井戸 S151

墓 S101


36-2
36-7
36-36
36-4
36-8
36-37
36-10
36-39
36-15
36-41
36-25
36-43
36-30
36-44
36-31
36-46
36-32
36-48

墓 S71

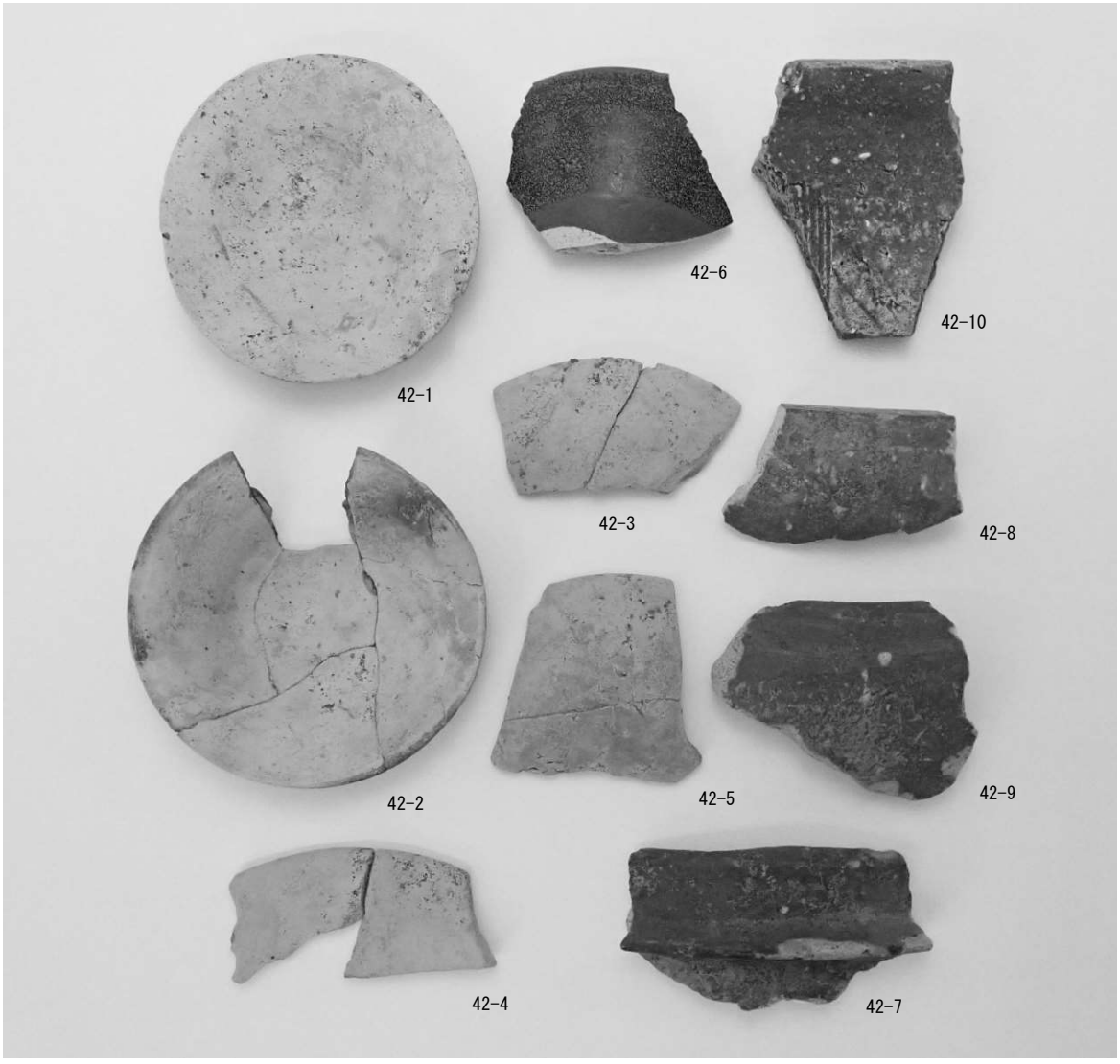

36-51
36-50
36-49
36-53
36-52

墓 S71

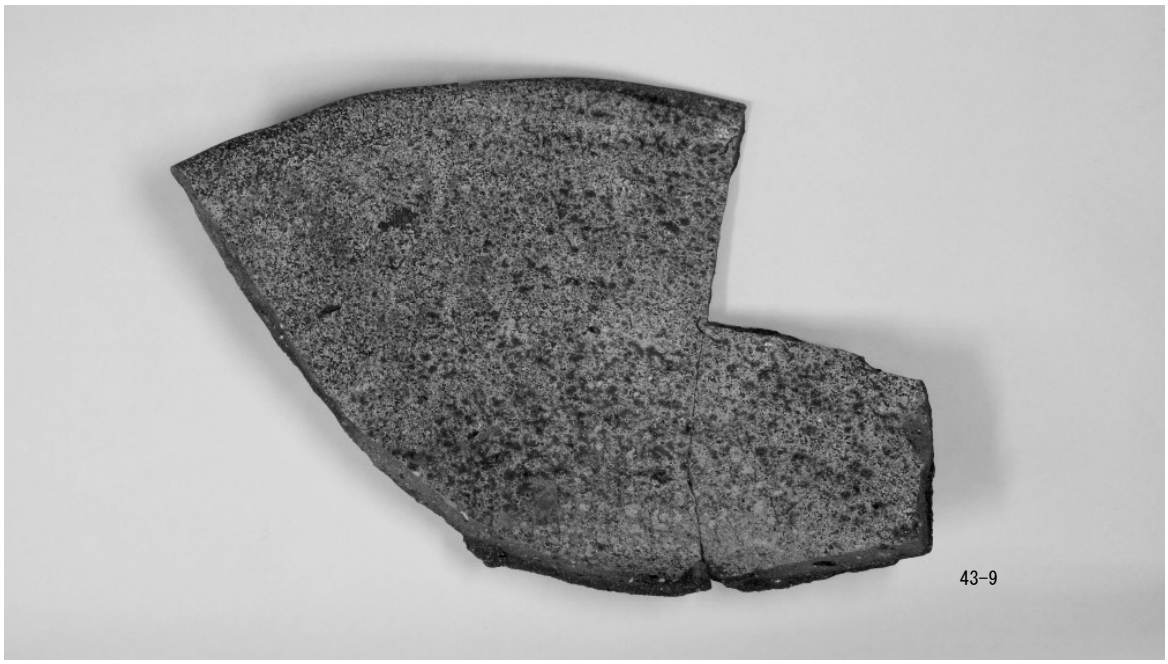
37-1
37-5
37-2
37-7
37-11
37-10
37-13
37-17
37-19
37-20
37-22

墓 S144

墓 S81



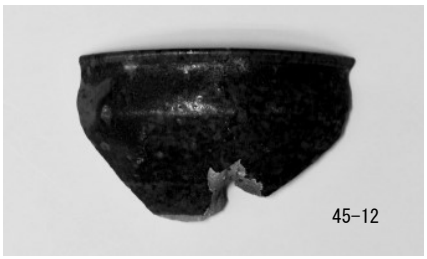
暗渠溝 S13

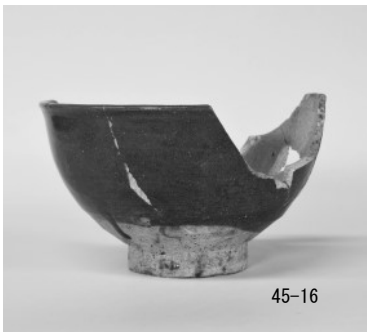


井戸 S35

井戸 S40

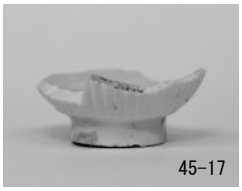
落込み S73


45-12

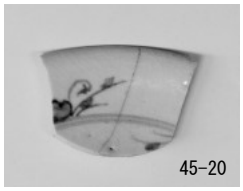

45-16

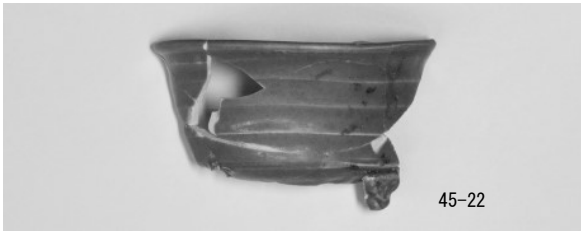
45-15

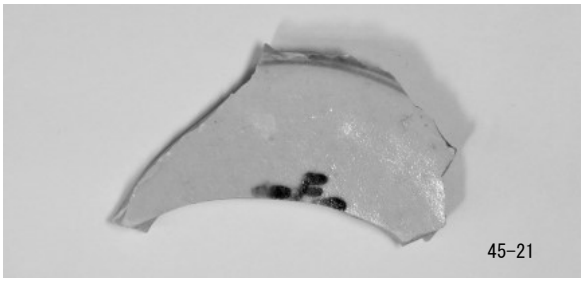
45-13


45-17

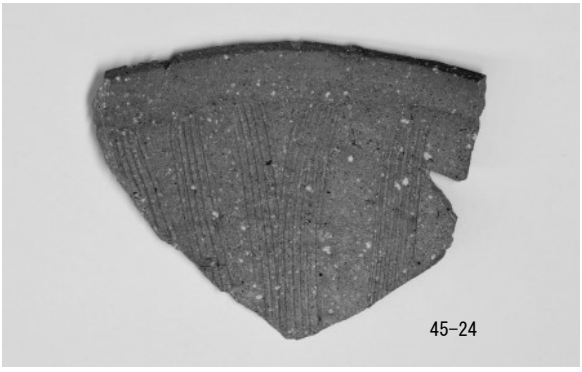
45-18


45-20


45-22

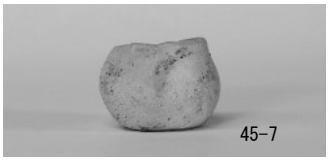

45-21

45-3


45-24

45-4

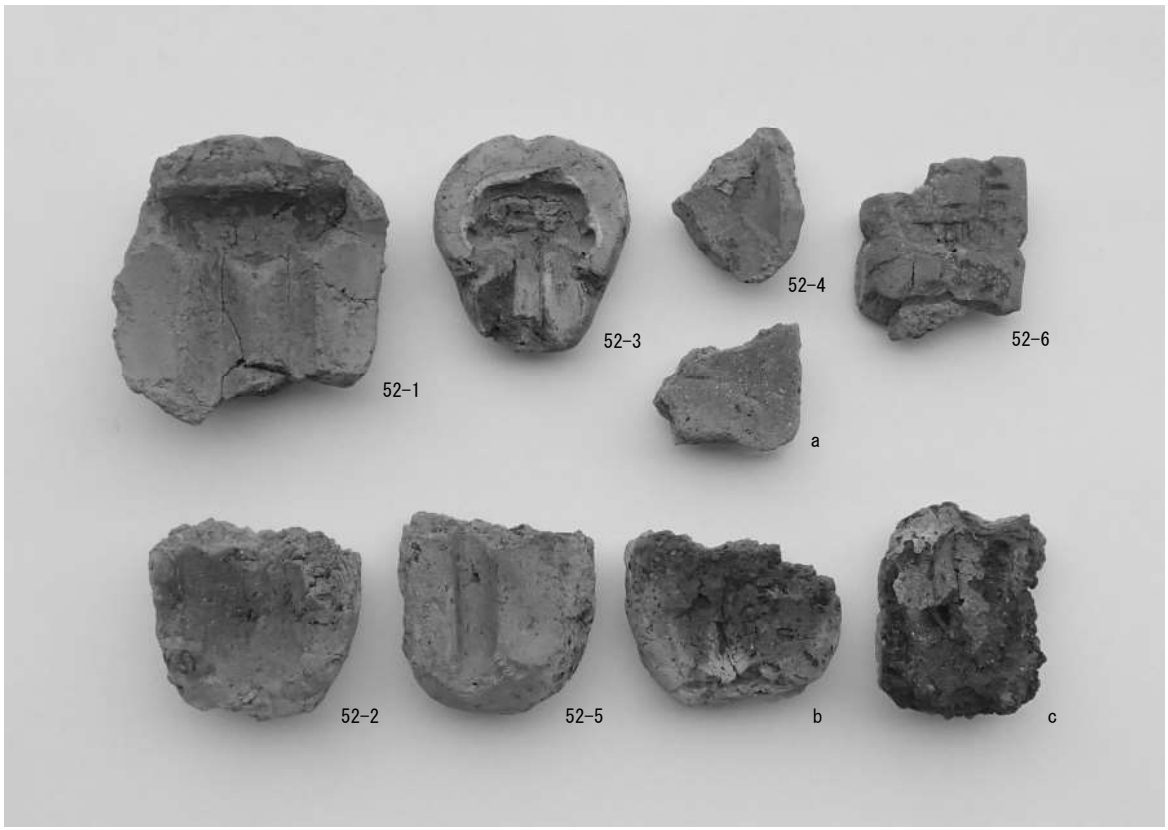
45-1


45-7

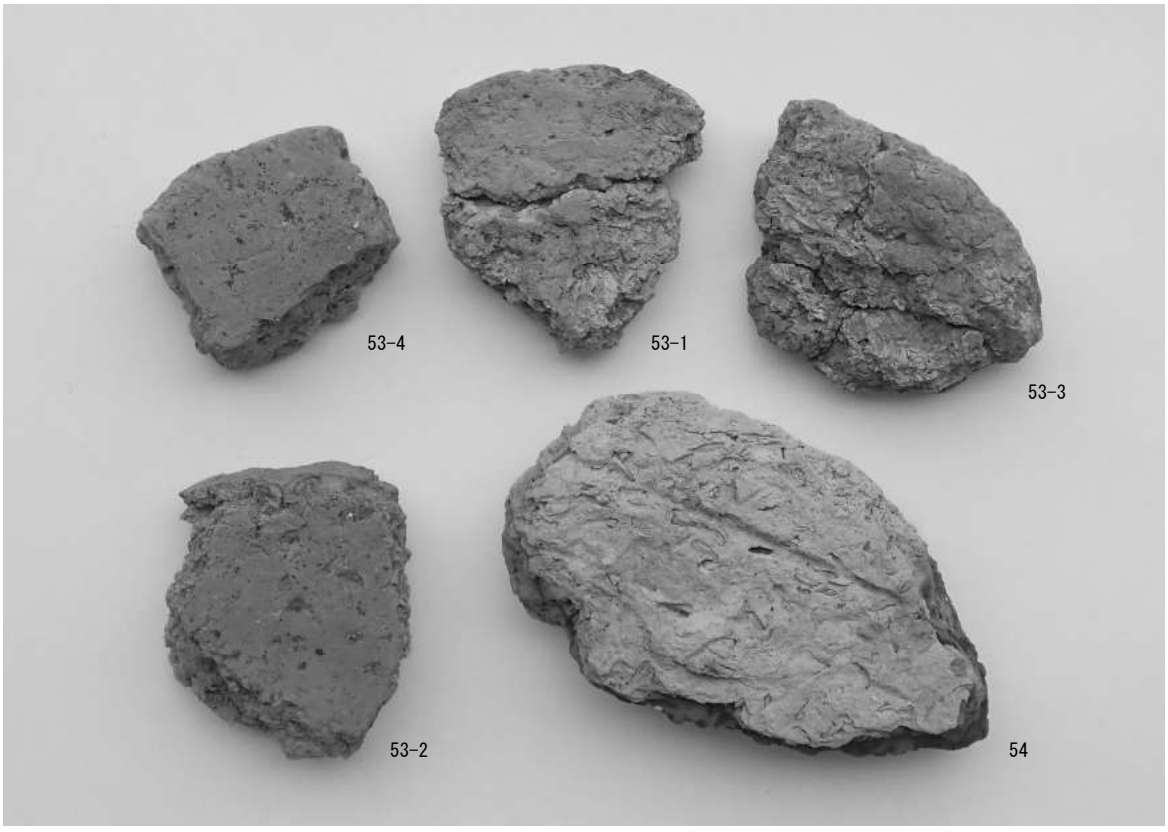
45-8

45-23

落込み S73



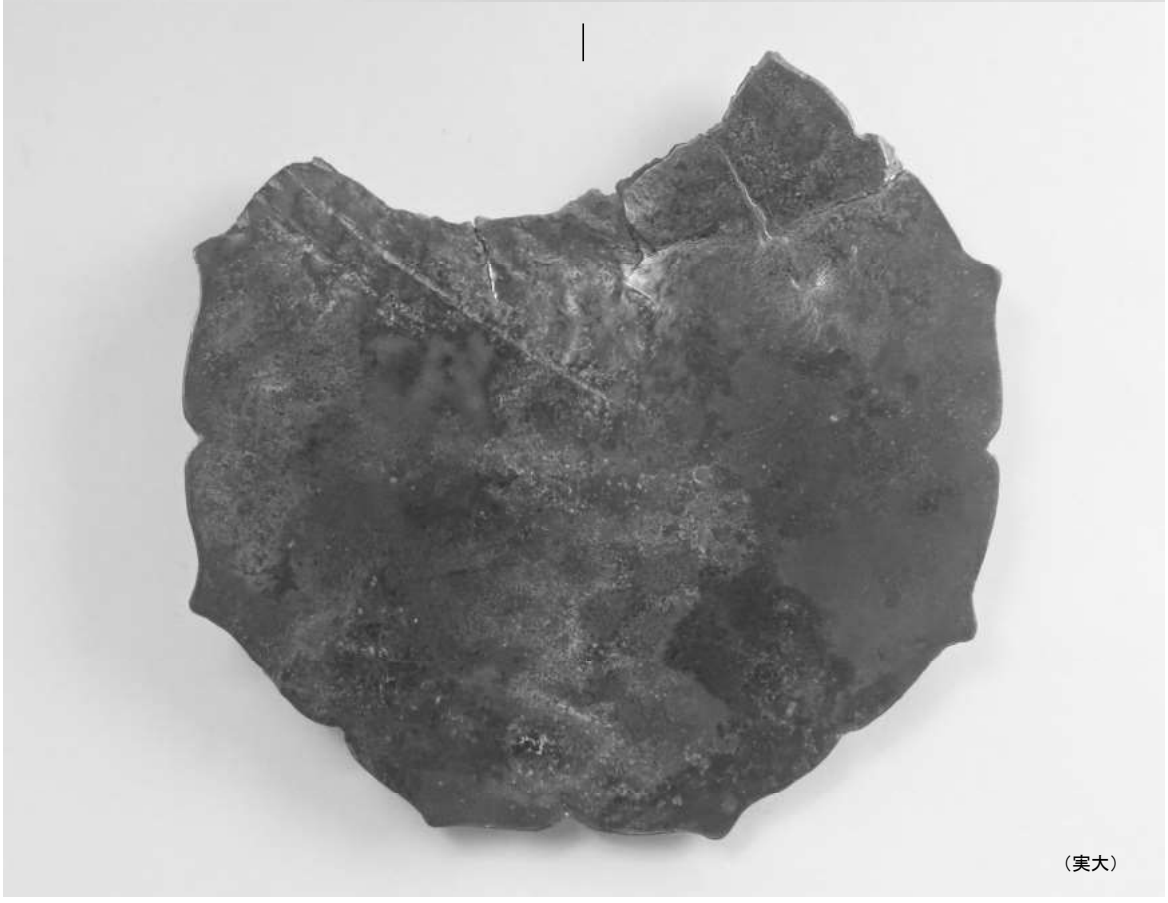
刀装具鋳型



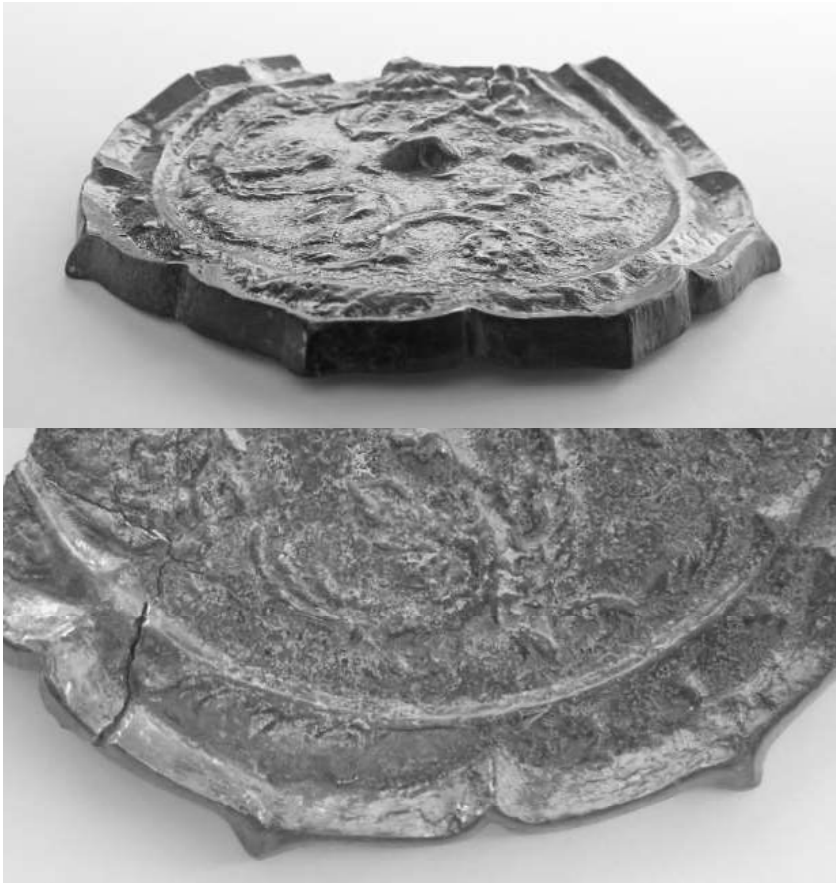
鏡鋳型

ルツボ（a～e）、フイゴ羽口（f～i）

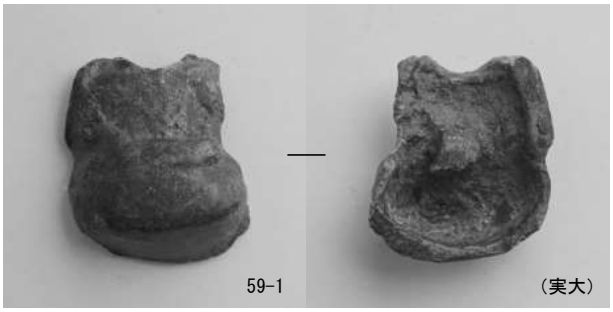
トリベ



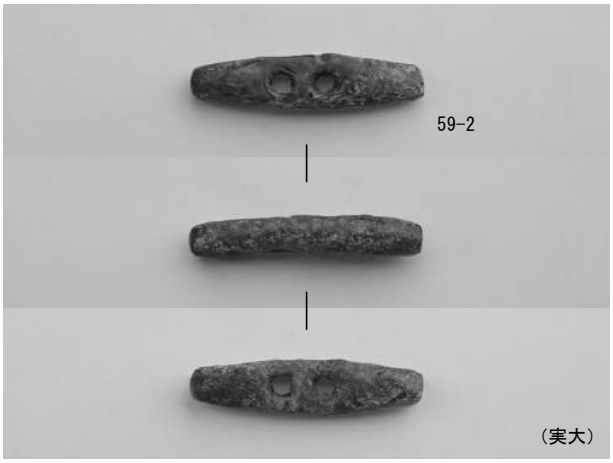
瑞花双鳳八稜鏡



瑞花双鳳八稜鏡細部

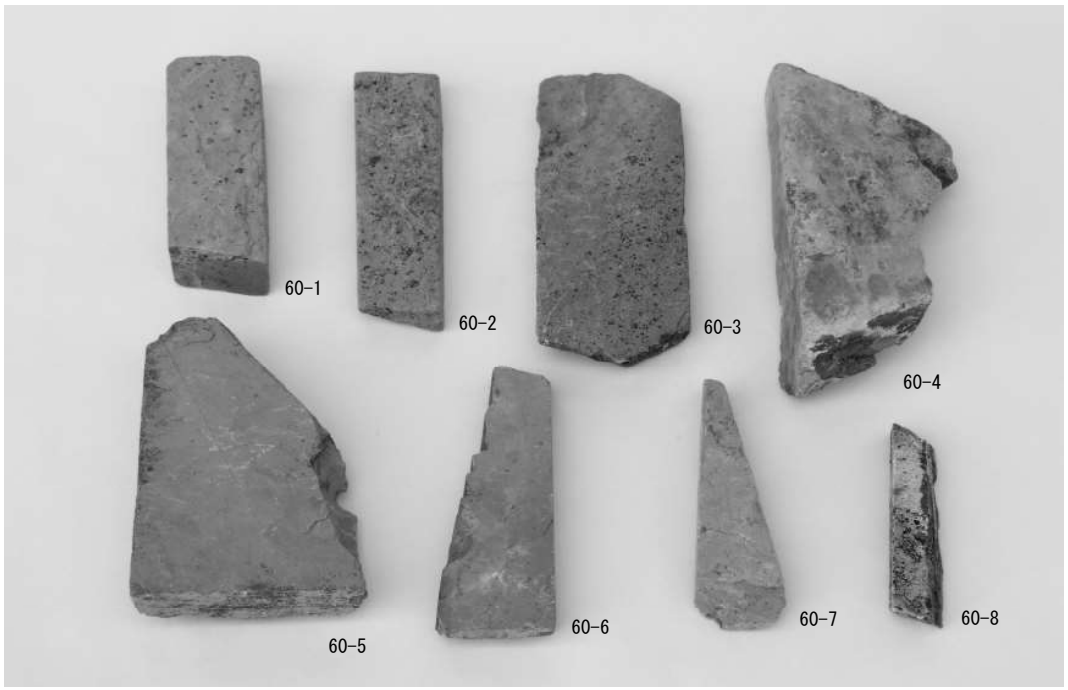


懸仏

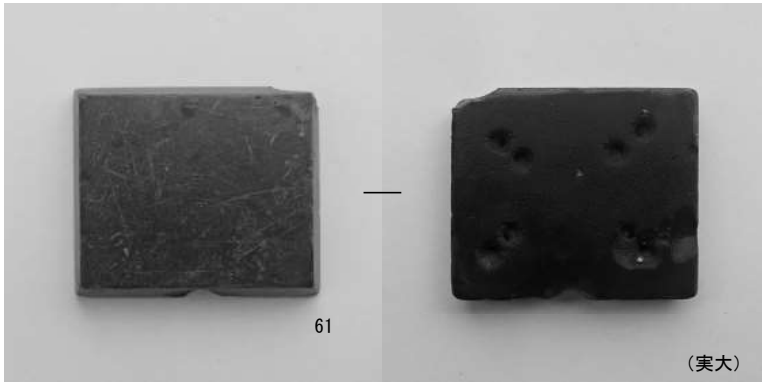


笠鞐

小柄



砥石石材



石帯巡方

火打ち石

石硯

令和２年（2020 年）1 月 31 日発行

平安京左京八条二坊九町
（京都平安文化財調査報告　第 7 集）

編集　有限会社京都平安文化財
〒 612-8018　京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4
電話　075―644―6600

印刷　あおぞら印刷株式会社
〒 604-8431　京都市中京区西ノ京原町 15
電話　075―813―3350